

## Meghadūta (『雲の使者』) 研究 ——ヴァッラバデーヴァとマッリナータ(1)——

川村 悠人

### 1. 解題

本稿は、雨季の情緒を詠ったカーリダーサ(Kālidāsa, 4世紀後半から5世紀前半)の代表作 *Meghadūta* (『雲の使者』)<sup>1</sup>及びヴァッラバデーヴァ(Vallabhadeva, 10世紀)による注釈書 *Meghadūtavivṛti* とマッリナータ(Mallinātha, 14世紀後半から15世紀前半)による注釈書 *Samjivini*の翻訳研究である。

ヴァッラバデーヴァの注釈書は *Meghadūta* に対する注釈書の中で現存する最古のものであり<sup>2</sup>、Hultsch氏による非常に信頼度の高い校訂本もあることから、*Meghadūta* を研究する上で決して無視することのできないものである。マッリナータはカーリダーサの諸作品の、あるいはカーヴィア(kāvya)の名注釈家として名高く、*Meghadūta* を読解する上で彼の注釈も無視することのできないであろう<sup>3</sup>。口数が少なく、読解に必要な情報をしばしば読者に与えてくれないヴァッラバデーヴァの注釈に比べ、マッリナータの注釈は詳細で、読者の要求に答えてくれる。彼の注釈を通じて *Meghadūta* のより深い理解が可能となるのである。また、時代的に隔たりのある二人の注釈書を読解することにより、*Meghadūta* のテキストとその解釈

の変遷も探ることができる<sup>4</sup>。

*Meghadūta* 自体の翻訳は多数存在し、邦訳としても小野島[1941ab, 1942]、木村[1965]、田中[1974](妙訳)等がある。本研究がそれらに多く負っていることは言うまでもないが、ヴァッラバデーヴァとマッリナータの注釈書の翻訳研究は筆者が知る限り存在しない。カーヴィアの注釈家達が繰り広げる高度な議論やその詳細な説明は、古典サンスクリット文学あるいは修辞学や文法学等の分野にとっても非常に重要なものである。それにもかかわらず、他の諸分野の文献に比べ、カーヴィアの注釈書の翻訳研究は皆無と言っていいのが現状である。カーヴィアに対する注釈が現存する最古の注釈家として近年注目を集めているヴァッラバデーヴァと、カーヴィアの名注釈家として知られるマッリナータの注釈書を扱う本研究が、本邦の古典サンスクリット文学研究または注釈家研究等に役立てば幸いである。

本稿では、物語の導入に始まり、雲の旅路の描写が開始される *Meghadūta* 1.1-1.15 を取り扱う<sup>5</sup>。

### 1.1. 内容概観

*Meghadūta* の物語の概要は、クベーラ(Kuberā)への務めを怠った罪により、ラーマギリ

<sup>1</sup>*Meghasamdeśa* (『雲の音信』)とも呼ばれるが、本稿では *Meghadūta* (MD) で統一する。

<sup>2</sup>またヴァッラバデーヴァの注釈書は、カーヴィアに対する注釈書の中でも現存する最古のものである。

<sup>3</sup>'kāvya'には「美文詩」、「芸術詩」、「文学作品」等の様々な訳語が当てられるが、本稿では「カーヴィア」で統一する。

<sup>4</sup>ヴァッラバデーヴァとマッリナータの年代や作品、その他諸々の情報については Goodall and Isaacson[2003] と Lalye[2009] をそれぞれ参照されたい。

<sup>5</sup>本稿で提示するマッリナータ注 *Meghadūta* の詩節番号はすべてĀに従う。

(Rāmagiri) の山中で流滴の日々を送る一人のヤクシャ (yakṣa) が、雨季の近い空に現れた雨雲を目にし、ヒマラーヤ (Himālaya) にある神都アラカー (Alakā) に一人残した妻を想い、妻への希望の音信を雲に託すというものである。はじめの五詩節ではカーリダーサによる物語の導入がなされ、第六詩節からはヤクシャが雲に語りかける形で物語は進行する。

カーリダーサは *Meghadūta* 中で雄大な山々から極微細な植物に至るまで見事な描写を見せ、自然の様々な側面と移り変わる人間の繊細な感情を、哀愁を漂わせつつ優雅に表現している。また *Meghadūta* は宗教的色彩が濃く、ヒンドゥー教の神話や宗教生活に関連する描写も多くなされる。その中でもシヴァ (Śiva) に関する描写が非常に多く、このことはカーリダーサが如何にシヴァを崇拜していたかを如実に物語っている<sup>6</sup>。

以下に *Meghadūta* の物語がどのように展開していくのかをより具体的に見ておこう。ただ実際にはヤクシャが雲に一方的に語りかけているに過ぎず、物語はすべてヤクシャの空想の中で進行する。

- 己の務めを怠った主人公ヤクシャは、主であるクベーラの呪いを受けて都を追放され、一年の間妻と別離しなければならなくなり、ラーマギリで一人暮らしていた、と物語が開始される。そんなある日、山頂を抱く美しい雲を目にし、妻への想いに掻き立てられたヤクシャは、雲に妻への音信を運んでもらおうと思いつき、雲を歓迎する。無生物であり、人間の言葉を話せるはずのない雲に音信を託すのは甚だ奇妙であるが、恋に病む者は生物と無生物を区別できないのだとカーリダーサは述べる。ここまではすべてカーリダーサが語り手となって物語を導入する (M 1.1-1.5, V 1-5)<sup>7</sup>。

<sup>6</sup>シヴァ、その妻パールヴァティー、そして彼らの息子スカンダに関連する描写は *Meghadūta* 1.7, 1.33, 1.34, 1.36, 1.43, 1.44, 1.45, 1.50, 1.52, 1.55, 1.56, 1.58, 1.60, 2.10 でなされる。

<sup>7</sup>マッリナータのテキストを示す場合に M, ヴァッラ

- ここから語り手はヤクシャに代わり、これ以降はヤクシャが雲に語りかける形で物語が進行する。ヤクシャは雲の美質を賛美した後、守護者たる者は苦しむ者を救うのが道理として、雲に妻へ音信を運ぶことを依頼する。そして雲の出発が夫の帰りを待つ妻達の安堵をもたらすこと、雲の旅路が実に良好なものであること、そして妻が悲しみのあまり死んだりして雲の努力が水の泡となることは決してないこと等を語る。ここに、何とかして音信を運んでもらおうとするヤクシャの努力が窺える。そして親友である山ラーマギリに出発の別れを告げよ、とヤクシャは雲を促す (M 1.6-1.12, V 6-12)<sup>8</sup>。

- これより神都アラカーへ向かう雲の旅路の描写が始まり、雲が訪れる先々の美しい情景が描かれる。雲はヤクシャに旅路のアドバイスをもらい出発、雨の恵みを与えながらマール大地 (Māla)、アムラクータ山 (Āmrakūta) を過ぎ (この山で一時間休憩する)、眼下にレーヴァー河 (Revā) を捉えてその水を飲み、体内に雨を降らすための水を補給する (M 1.13-1.21, V 13-21)。孔雀達に鳴き声で歓迎されつつ、美しいダシャールナ (Daśārṇa) 国に到着した後、その首都ヴィディシャー (Vidiśā) へと赴き、そこを流れるヴェートラヴァティー河 (Vetravati) の甘い水を飲む (M 1.22-1.24, V 22-24)。花咲き誇るニーチャイス山 (Nīcais) に身を置いて休憩し、植物に水を、花摘みの女達には影を与えつつウッジャイニー (Ujjayinī) を目指す (M 1.25-1.27, V 25-27)。ウッジャイニーへの旅路で雲は艶麗なニルヴィンディアー河 (Nirvindhya) の水を味わった後、アヴァンティー国 (Avantī) に到着し、その首都ウッジャイニーへと赴く。ウッジャイニーは恰も地上に現れた天界の一角の如く富み

バデーヴァのテキストを示す場合に V という略号を便宜的に用いる。

<sup>8</sup>M 1.9-1.12 と V 9-12 の間に詩節順序の相違があるが、物語の流れは M に従ったものである。

- 栄えている。そこでは心地良い風が吹き、風窓からは女達の髪を整うための香煙が立ち上り、孔雀達は友情の舞踏を舞う。雲はこの都で旅の疲れを癒す (M 1.28-1.32, V 28-32)。
- 次に雲はシヴァの聖なる住処マハーカラ寺院 (Mahākāla) へと向かう。これより雲がシヴァを崇拜する様子が描かれる。雲はシヴァ礼拝の儀式の際に雷鳴を太鼓代わりに鳴らし、その果報として、爪跡の傷を雨水で癒してあげた美女達の流し目を受ける。そして自身の体を使って、血塗られた象の皮を求めるシヴァの欲求を鎮め、その信愛 (bhakti) がパールヴァティー (Pārvatī) に認められる (M 1.33-36, V 33-36)。
  - 舞台は再び都へと移る。雲は逢い引きする女達の夜道をその雷光で照らした後、妻である雷光の休息のため家の屋根で一夜を過ごす。そして太陽が昇り始める頃、再び目的地へと出発する (M 1.37-39, V 37-39)。雲は旅路でガンビラー河 (Gambhīrā) と出会い、その水を飲んで暫しそこにとどまる (M 1.40-1.41, V 40-41)。
  - これよりヒンドゥー教神話を背景にした情景描写が続く。まず雲は清涼な風に運ばれつつデーヴァギリ山 (Devagiri) へ赴き、そこにいるスカンダ (Skanda) に花の驟雨を浴びせ、彼が乗る孔雀を雷鳴で踊らせる。次にランティデーヴァ王 (Rantideva) の名声を讃えるべくチャルマンヴァティー河 (Carmaṇvatī) を訪れ、その水を飲み、ランティデーヴァ王の都ダシャプラ (Daśapura) の女達に見つめられながら進み行く。ブラフマーヴァルタ地方 (Brahmāvarta) に入った雲は、大戦争に名高い大地クルクシェートラ (Kurukṣetra) へ向かい、バララーマ (Balarāma) が享受したと言われるサラスヴァティー河 (Sarasvatī) の水を享受して身は清浄となる。そして、ヒマーラヤから流れ出るガンガー河 (Gaṅgā) へと赴き、その河水を飲む (M 1.42-51, V 42-51)。
  - 雲は目的地アラカーのあるヒマーラヤに到着する<sup>9</sup>。雲は休息のため、その岩々が鹿達の麝香の香りで香ばしいヒマーラヤの頂きに座し、シヴァの牡牛が掘り起こした土の如きを美を纏う。そして、樹々の摩擦によって発生した山火事を雲はその豪雨で鎮め、無駄にも自分に襲いかかろうとして来るシャラバ達 (śarabha) に雹の雨を振りかけ、ヒマーラヤにあるシヴァの足跡の周りを信愛をもって回る。ヒマーラヤではキーチャカ竹 (kīcaka) が音を立て、それに合わせてキンナラ女達 (kiṃnarī) は声高らかに歌い、雲は太鼓の如き雷鳴を轟かし、ここに歌舞演奏 (saṃgīta) が完成する (M 1.52-1.56, V 52-56)。
  - さらに雲は進み行く。雲はクラウンチャ山 (Krauñca) の抜け穴を通して北方を目指し、恰もシヴァの笑いが積み重なったかの如くそびえ立つカイラーサ山 (Kailāsa) に到着する。カイラーサ山で、或る時には雲はガウリー (Gaurī) の山登りのために階段へと姿を変え、また或る時にはそこにいる少女達にシャワー室代わりにされる。そして種々の戯れを通じて山々の王カイラーサを思う存分享受した後、いよいよ目的地である神都アラカーに到着する (M 1.57-1.63, V 57-63)。
  - これより神都アラカーの描写に入る<sup>10</sup>。神都アラカーにある楼阁には優美な女達があり、壁は絵画に飾られ、歌舞演奏の太鼓も打ち鳴らされ、その床は宝石からなる。アラカーの女達は様々な花飾りを身につけ、神々を魅するほど美しい少女達は砂浜で遊び興じている。恋人と悦楽に興じる女達の疲れは、月長石から滴る水滴に癒される。

<sup>9</sup>ここでなされるヒマーラヤの描写は、*Kumārasambhava* 第一章でなされるそれと類似している。

<sup>10</sup>ここでなされる描写は、先のヒマーラヤの描写と同様 *Kumārasambhava* 第六章でなされるオーシャディプラスタ (Ośadhiprastha) の描写と類似している。なお、M ではここまでが「先の雲」(pūrvamegha)、この先が「後の雲」(uttaramegha) として区別されているが、V では区別されず、*Meghadūta* は一続きの作品として扱われている。

ここでは恋人の心を魅するのに愛の神カーマ(Kāma)の矢は必要なく、女達を飾る様々な装飾品もたった一本の如意樹がもたらしてくれる。不滅の財宝を有する男達は最高の女を連れて、星が煌めく楼閣内の酒場にやって来ては酒を飲み、神々の遊女やキンナラ達(kimnara)と遊園で日々を満喫している。ここでは神都アラカーが如何に人々の理想とする楽園であるかが描かれると同時に、そのような描写を通じて、そこから追放されたヤクシャの悲痛と羨望が強く表現されている(M 2.1-2.12, V 64-71)<sup>11</sup>。

- 次にヤクシャは自身の館に関する情報を雲に伝える。ヤクシャの館は富みの神クベーラの館のやや北に位置する。館には壮麗な弓なりの正門があり、妻が息子のように育てる曼陀羅樹(mandāra)が生え、ハンサ鳥達(hansa)が憂い無く暮らす美しい溜め池もある。そして溜め池のそばには、頂が青玉からなり、黄金のカダリー樹(kadali)に囲まれた娯楽の丘陵があり、そこにある蔓草の四阿の傍らには無憂樹(asoka)とケーサラ樹(kesara)が生えている。さらにその二樹の間には、腰掛けが水晶からなる黄金の止まり木があり、日が落ちる頃、孔雀達はそこに身を寄せる。そして館の扉の両側には法螺貝と蓮の模様が描かれており、以上の特徴を手がかりに雲はヤクシャの館を発見する(M 2.13-2.17, V 72-77)。
- 次に別離に苦しむ妻の様子が語られる。館内に視線を落とした雲は、そこにこの世のものとは思えない絶世の美女を発見するだろうとヤクシャは語る。だが、別離による憂愁の日々が過ぎ行く間に彼女が様変わりしているかもしれない可能性をヤクシャは雲に告げる。目は涙に腫れ、下唇は溜息の熱で色褪せ、顔は垂れ下がる巻き毛に覆われている。彼女は夫の帰郷を願って神々の崇拝に明け暮れ、夫の絵を描き、鳥

に話しかけ、詩歌を吟じ、花を数えて別離の残り日数を計算し、自慰行為に耽りながら、別離の日々を何とか耐え凌いでいる。しかし夜には気晴らしがなく、眠りにも付けず、深い悲しみに包まれているかもしれないとヤクシャは言う。さらにヤクシャは続ける。彼女は褻れた体の片側を寝床に横たえ、涙を流して重い夜を過ごし、かつては喜びをもたらすものだった月光からも目を背け、夫との思い出にまた涙を流す。彼女は頬に掛かる巻き毛を手や吐息で何度も取払う。夢の中でもいいから何とか夫と出会えないものかと眠りを切に望むが、溢れる悲しみに眠りにつくことさえままならない。以上のような哀れな様を目にすれば、無生物である雲すら涙を流すはずだとヤクシャは語る。そして雲が彼女の下に近付いた時、もし彼女が眠っているならば、夢で夫と出会えているかもしれないから、彼女を起さず待機することを雲に伝える(M 2.18-2.34, V 78-94)<sup>12</sup>。

- 清涼な風を送って彼女を起こした雲は、使者としての挨拶を述べた後、希望に心開いた彼女にヤクシャからの音信を伝える。ヤクシャはまず妻が幸福かどうかを問い、自分も妻と同様に深い苦しみに焼かれていることを述べ、妻への多大なる切望を語る。自然界の様々な事物に妻の姿を想い見るが、所詮それらはかりそめのものに過ぎず、妻の代わりは妻しかいない。石に妻の絵を描き、妻に謝る自身を彼女の足下に描こうとするや否や、目は涙で覆われ絵を描くこともままならない。絵の中ですら会わせてくれないのかとヤクシャは無慈悲な運命を嘆く。夢の中で再会を果たした妻を抱きしめようと、ヤクシャは虚空に手を伸ばす。北方から風が吹けば、その風が先に妻の体に触れたかもしれないと思いつつ、風をも抱きしめる。灼熱の痛みに焼かれたヤクシャの心は、夜が何とか短く

<sup>11</sup> ここでも M と V の間に詩節順序の相違がある。なお M 2.4, 2.8, 2.11 は M のみに存在する詩節である。

<sup>12</sup> M 2.26-2.31 と V 86-91 の間に、詩節順序の相違及び句が入れ替わっている箇所がある。ここではマッリナータのテキストに従って説明している。



マンダークラウンターの最初の四つの guru は切望や思慕の感情を表現し、それに続く五つの laghu はヤクシャの不安を勃発させて切望や思慕を一層際立たせ、中間休止はそれらをより高める。マンダークラウンターを通じて *Meghadūta* は哀感を帯び、もの悲しい音色を奏でる<sup>18</sup>。木村[1965: 215]の言葉を借りれば「この長短音配置が緩より急へ、さらに緩への韻律をなして、いかにも天空を往く雲の動きのリズムを想像」させ、「この詩編の内容が配流の旅路の望郷、雨季の哀れ、空行く雲の動きを画いたものであるのと、それを描写するマンダークラウンター調の韻律とが調和して、詩情を一層盛りあげてゆく」のである。

### 1.3. カーヴィアとしての分類

ヴィシュヴァナータ (Viśvanātha, 13世紀から14世紀) の *Sāhityadarpaṇa* で説明されるように、一般的に *Meghadūta* はカンダカーヴィア (khaṇḍakāvya) とされる<sup>19</sup>。 *Sāhityadarpaṇa* とその注釈 *Vivṛti* によると、端的に言えばカンダカーヴィアとは、何か一つの事柄を描くことに専念した、サンスクリット語による韻文作品である<sup>20</sup>。 *Meghadūta* では雨季や雨雲に関連す

る叙情や叙景が数多く出て来るが、その主題は当然〈別離〉 (vipralambha, viraha) であろう。 *Meghadūta* が〈別離〉を主眼に書かれた作品であることは、 *Meghadūta* 中の表現や注釈家達の言葉からも明らかであり、雨季・雨雲・別離をキーワードとしてヤクシャの悲痛を歌い上げているところに、鑑賞者達の感動を誘う一つの要因があるのである<sup>21</sup>。よって *Sāhityadarpaṇa* に従うならば、男女の〈別離〉を描くことに専念した、サンスクリット語による韻文作品である *Meghadūta* は、カンダカーヴィアであると言えることができる<sup>22</sup>。

よりなるものがカンダカーヴィアである、という意味である」)

なお、 *Sāhityadarpaṇa* 6.329ab の 'kāvyā' を、 *Vivṛti* は直前に述べられた 'kāvyā'、即ち *Sāhityadarpaṇa* 6.328 で述べられたカーヴィアのことを指すと解釈しているが、 *Lakṣmī* はそれを *Sāhityadarpaṇa* 6.315cd-325ab で定義される 'mahākāvya' のことを指すと解釈している。その場合、マハーカーヴィアの定義や特徴を部分的に満たすものがカンダカーヴィアであると解釈される。 *Lakṣmī* on SD 6.329ab: kārikāyām cakārapadopanyāsāt kāvyasya pūrvābhīhitasya mahākāvyaśety arthaḥ / ekadeśānusāri yatkiñcillakṣaṇahīnam ekāṁśānurūpam ity arthaḥ / samskr̥tapadyair nirmītakāvyaṁ khaṇḍakāvyaṁ bhavet / (「詩節中に ca 音の語が提示されているから、カーヴィアの、とは即ち、先に述べられたマハーカーヴィアの、という意味である。部分的に従うものとは、何であれ [マハーカーヴィアの] 特徴を欠いているもの、即ち部分的に [マハーカーヴィアに] 類似しているもの、という意味である。サンスクリット語の韻文よりなるカーヴィアがカンダカーヴィアであろう。)」

<sup>21</sup> この〈別離〉という項目は、 *Sāhityadarpaṇa* が定義する、マハーカーヴィアで扱われるべきとされる項目に含まれており、カーリダーサと比較的年代が近いダンディンの *Kāvyaśāstra* 中でも、マハーカーヴィアの定義の際にこの項目が挙げられている。 SD 6.322-323: samdhyāsūryendurajanīpradoṣadhvāntavāsarāḥ / prātar madhyāhnamrgayāsailartuvanasāgarāḥ // sambhogavipralambhau ca munisvargapurādhvarāḥ / raṇaprayāṇopayamamantraputrodāyādayaḥ // (「黄昏・太陽・月・夜・夕方・暗闇・昼・夜明け・真昼・狩り・山・季節・森・海・飲・別離・苦行者・天界・都・儀式・戦闘・進軍・結婚・政策協議・息子の誕生等」) その他の各文学理論書でもこの〈別離〉という項目は取り扱われ、サンスクリット文学において好題、もしくは必要不可欠な要素とされていたことが知られる。ただし、 *Nāṭyaśāstra* を除けば現存する最古の文学理論書である *Kāvyaśāstra* には、この項目は挙げられていない。ダンディンの定義については次項を見よ。なお各文学理論書で挙げられる、マハーカーヴィアで扱われるべきとされる項目については Trynkowska[2000] に詳しい。

<sup>22</sup> *Kale*[1987: viii]によれば、カンダカーヴィアに属する作品の中で有名なものに、作者及び成立年代不明の *Ghaṭakarpara* (『破れ水瓶』)、ビルハナ (Bilhaṇa, 11世紀

<sup>18</sup> *Warder*[1977: 145] 及び *Mishra*[1977: 64-66] 参照。

<sup>19</sup> *Kale*[1987: vii]、*Lienhard*[1984b: 66-67, 113, 116] 及び木村[1965: 1-2] 参照。

<sup>20</sup> SD, p. 375.12-13: khaṇḍakāvyaṁ bhavet kāvyasyaika-deśānusāri ca / yathā—meghadūtādi / (「そして、[直前に説明した] カーヴィア [の特徴] に部分的に従うものがカンダカーヴィアであろう。例えば『雲の使者』等」)

この直前の詩節ではカーヴィアに関する定義がなされている。 SD 6.328: bhāṣāvibhāṣānīyamāt kāvyam sargasamujjhitam / ekārthapraṇāyāṇāḥ padyāḥ samdhisāmagryavarjitam // (「[サンスクリット等の] 洗練された言語や [アパブランシャ (apabhraṁśa) 等の] くずれた言語に制限され、一つの事柄 [の描写] に専念した韻文からなり、章を持たず、完全な連結 (samdhi) を備えていないのがカーヴィアである」)

*Vivṛti* はカンダカーヴィアを端的に説明している。 *Vivṛti* on SD 6.329ab: kāvyasyānantaranirūpitasya ekadeśānusāri yatkiñcillakṣaṇahīnam / tenātra bhāṣānīyamō nāsti / ekārthapraṇāyāṇāḥ samskr̥tapadyair nirmītam khaṇḍakāvyaṁ ity arthaḥ // (「カーヴィアに、即ち直前に説明された [カーヴィアに] 部分的に従うもの、即ち何であれ [カーヴィアの] 特徴を欠いているもの、それゆえ、これ (カンダカーヴィア) には [カーヴィアの場合のような] 言語に関する制限はない (=すでに決まっている)。一つの事柄 [の描写] に専念し、サンスクリット語の韻文

しかし、Meghadūta がカーヴィアとしてのどのような範疇に属するものであるかについて注釈家達は様々な解釈を提示している。Meghadūta には数多くの注釈が存在し、そのすべてに言及して逐一検討する作業は煩雑を極めるので、ここでは本研究が扱うマッリナータとヴァッラバデーヴァの解釈を紹介したい。

### 1.3.1. マッリナータの解釈

マッリナータは、山・都・海等に関する描写が様々な箇所で行なわれることを理由に Meghadūta をマハーカーヴィア (mahākāvya) と見なしている<sup>23</sup>。彼が山等の描写が行なわれていることだけをマハーカーヴィアの条件と考えていたかどうか疑問が残るが、Śiśupālavadhā 19.41 の注釈中でも、彼がマハーカーヴィアの条件として挙げるのは「山や都に関する描写が行なわれていること」だけである<sup>24</sup>。興味深いことに、ヴィディアーナータ (Vidyānātha, 14 世紀初頭) の文学理論書 Pratāparudrayaśobhūṣaṇa でも、マハーカーヴィアの条件として挙げられるのは「山・都・海等に関する描写が行なわれていること」のみである<sup>25</sup>。彼のマハーカーヴィアの定義は以下の通りである。

都・海・山・季節・月の出・日の出・  
庭園の遊戯・水辺の遊戯・酒宴・愛の  
饗宴・別離・結婚・王子の誕生・政策  
協議・使者・進軍・戦闘・主人公の勝

から 12 世紀初頭の *Caurīsuratapañcāsikā* (『忍ぶ恋の歎び百頌』)、バルトリハリ (Bhartrhari, 7 世紀) の *Śṛṅgārasātaka* (『恋愛百頌』)、作者及び成立年代不明の *Śṛṅgāratilaka* (『恋愛のティラカ (額飾り)』)、アマル (Amaru, 7 世紀) の *Amaruśataka* (『アマル百頌』)、マユーラ (Mayūra, 7 世紀前半) の *Sūryaśataka* (『太陽神百頌』)、ジャヤデーヴァ (Jayadeva, 12 世紀) の *Gītagovinda* (『牛飼い (=クリシュナ) の讃頌』) 等がある。各詩人の年代と作品名の日本語訳は辻 [1973] に従う。

<sup>23</sup>Samjivini on MD 1.1: atra kāvyē tatra naganagarārnāvādivarṇanāsambhāvān mahākāvyaṭvām / (「このカーヴィアでは、様々な箇所で行なわれるから、『雲の使者』は」マハーカーヴィアと見なされる)

<sup>24</sup>Trynkowska[2000: 38] 参照。Sarvaṃkaṣā on ŚV 19.41: naganagarādivarṇanayuktalakṣaṇam mahākāvyaṭvām / (「マハーカーヴィアとは山や都等に関する描写を特徴とするものである」)

<sup>25</sup>Trynkowska[2000: 44] 参照。

利、これらの描写が行なわれるものがマハーカーヴィアと呼ばれる<sup>26</sup>。

マッリナータが注釈中で頻繁に同書からの引用を行うことより考えて、この定義がマッリナータのマハーカーヴィア観であると言えるだろう。だがこの定義に従った場合、ほとんどの文学作品がマハーカーヴィアだということになってしまい、後世に多大な影響を与えたダンディン (Daṇḍin, 8 世紀) のマハーカーヴィアの定義とも大きく異なる。ダンディンのマハーカーヴィアの定義は以下の通りである。

章の連結体 (sargabandha) は、マハーカーヴィアと呼ばれる。その特徴は [以下の通りである]。祈願、敬礼、あるいは物語の主人公 [もしくは副主人公] の提示がその冒頭をなす<sup>27</sup>。[マハーカーヴィアは *Mahābhārata* や *Rāmāyaṇa* 等の] 古説話の物語から発するか、事実 [あるいは実在する人物] に依拠する。四目的 (caturvarga) の果報を備え、主人公は練達かつ高潔である。都・海・山・季節・月の出・日の出の描写により、庭園の遊戯・水辺の遊戯・酒宴・愛の饗宴により、別離・結婚・王子の誕生の描写により、また政策協議・使者・進軍・戦闘・主人公の勝利により修辭的に飾られ、[物語の描写は] 簡略ではなく、〈情調〉 (rasa) と 〈感情〉 (bhāva) が間断なく起こる。長過ぎない章、耳に心地よい韻律、巧妙な連結 (saṃdhi) を備え、どの [章] でも、その終わりに韻律は変化する<sup>28</sup>。真なる修辭をもち、世の

<sup>26</sup>PYBh, kāvyaprakaraṇa, p. 96.2-6: nagarārnāvāśailartucandrārkodayavarṇanam / udyānasalilakrīḍāmādhupānaratoṣavāḥ // vipralambho vivāhaś ca kumārodavavarṇanam / mantradūtāprayāñajināyākābhyudayā api // etāni yatra varṇyante tan mahākāvyaṭvām ucyaṭe //

<sup>27</sup>vastunirdeśa の解釈については注 61 を見よ。

<sup>28</sup>sarvatra bhinnavṛttāntair upetaṃ の直訳は「異なる韻律で終わるもの (=章) をどの場所でも備えた [カーヴィア]」である。即ち、各章の終わりで常に韻律が変化することを意味する。*Kāvyaḍarśa* の注釈家ランガチャルヤラッディ (Rangacharya Raddi) は当該箇所を次のよ

人々を喜ばすカーヴィアは他の劫まで永存する<sup>29</sup>。

ヴィディアーナータの定義はこのダンディンの定義の一部をそのまま借用したものであるが、一見して分かるように彼の定義はマハーカーヴィアの定義をあまりに簡略化し過ぎている。そのことはマツリナータの息子クマラスヴァーミン (Kumārasvāmin, 15世紀初頭) が、*Pratāparudrayasobhūṣaṇa* に対する注釈書 *Ratnāpaṇa* の中で次のように指摘している<sup>30</sup>。

そしてこの[ヴィディアーナータの定義]は、[マハーカーヴィアが]章の連結体であること、四目的の果報を備えていること、[その]主人公は練達かつ高潔であること等を含意している。しかしそ(マハーカーヴィア)の詳説は *Kāvyaḍarśa* で知られねばならない<sup>31</sup>。

しかしいづれによ、マツリナータはヴィディアーナータの定義に従い、*Meghadūta* をマハーカーヴィアと考えていたようである。

### 1.3.2. ヴァツラバデーヴァの解釈

次にヴァツラバデーヴァの解釈を見てみよう。ヴァツラバデーヴァは *Meghadūta* の注釈

うに説明している。Prabhā on KĀ 1.19: bhinnavṛttāntaiḥ bhinnāni pūrvakramataḥ pṛthagbhūtāni yāni vṛttāni cchandāmsi tair antaḥ samāptir yeṣāṃ tais tādrśaiḥ sargair upetaṃ / (「bhinnavṛttāntaiḥ」について。異なる、即ちそれまでの流れとは異なる韻律 (vṛtta=chamdas) で終わる (anta=samāpti) もの、そのような章を備えた [カーヴィア]」)

<sup>29</sup>KĀ 1.14-19: sargabandho mahākavyam ucyaṭe tasya lakṣaṇam / āśīr namaskriyā vastunirdeṣo vāpi tanmukham // itihāsakathodbhūtam itarad vā sadāśrayam / caturvargaphalopetaṃ caturōdātanāyakam // nagarārṇavaśailartucandrārṇokodayavarṇanaiḥ / udyānasalilakṛīḍamadhupānaratotsavaiḥ // vipralambhaiḥ vivāhaiś ca kumārōdayavarṇanaiḥ / mantradūtaprayāṇājīnāyākābhyudayair api // alamkṛtam asaṃkṣiptam rasabhāvanirantaram / sargair anativistīrṇaiḥ śravayavṛttaiḥ susaṃdhibhiḥ // sarvatra bhinnavṛttāntair upetaṃ lokarāñjakam / kāvyam kalpāntarasthāyī jāyate sadalamkṛti //

<sup>30</sup>Trynkowska[2000: 44-45] 参照。

<sup>31</sup>RĀ on PYBh, kāvyaprakaraṇa, p. 96.2-6: etac ca sarganibandhacaturvargaphalacaturōdātanāyakatvādīnām upalakṣaṇam / tatprapañcas tu kāvyādarśe draṣṭavyaḥ /

を始めるにあたり、以下のような導入部を設けている。

さて、貴殿はこのように説明するが、何故そのように言われるのか。

政策協議・使者・聴聞等[の描写]がないので、[*Meghadūta* は] カンダカーヴィアの如きものではなく、マハーカーヴィアでもない。また、アーキアイカー (ākhyāyikā) という名称もこの作品に関しては全くの論外である。

この作品で、雨季に依拠した〈旅の別離〉(pravāsavipralambha) を詩人は描こうとしている。しかしそれ(〈旅の別離〉)は主人公に依拠せずに描かれるから、そのようには(=詩人が望むようには)美的経験(rasavattā)を伴わない。そして〈恋情〉(śṛṅgāra)が実現されることはない。

この作品でヤクシャは主人公と見なされる。そして彼は別離のせいで狂乱しているから、雲を使者に任用することも適合しなくはない。よって、ケリカーヴィア(kelikāvya)というこの[名称]があらゆる点で適している<sup>32</sup>。

ヴァツラバデーヴァによるこの導入部は様々な問題を孕んでいるが、詳細は翻訳研究に付した注を参照されたい。注目すべきはヴァツラバデーヴァが *Meghadūta* に与えるケリカーヴィア(kelikāvya)という名称である。この用語はどの文学理論書にも見当たらず、どこに起源や根拠がもとめられる用語なのかは不明であ

<sup>32</sup>Vallabhadeva's opening commentary on MD: atha yad etad bhavān vyācaṣṭe kim etad ucyaṭe / mantradūtaśravaṇādyaḥbhāvān mahākāvyaṃ api khaṇḍakāvyaṃ na bhavati / tathākhyāyikāvyaṃpadeśas tu dūrāpeta evātra / prāvṛḍāśrayaḥ pravāsavipralambhaḥ kaver varṇayitum iṣṭo 'tra / sa ca nāyakam anāśṛitya varṇyamānas tathā rasavattāṃ na dhārayati / na ca śṛṅgāravidhānam / guhyako 'tra nāyakatayāśṛitaḥ / tasya ca virahonmattatvād dūtye meghapreraṇam api nāyuktam iti kelikāvyaṃ ity etat sarvaṃ svastham //

る<sup>33</sup>。keli という語は「遊戯」や「娯楽」を意味し、kelikāvya を直訳すれば「遊戯カーヴィア」などと訳し得る。Meghadūta はカーリダーサが戯れにつくったカーヴィアだと彼は考えたのであろうか。ヴァッラバデーヴァはこの用語に関して何も説明を与えていないため、彼がどのようなことを意図して Meghadūta に適用したのかは分からない。

Wezler[2001] は、様々な作品における keli という語やそれに関わる諸語の用例を検討しながら、その語を男性の内的・精神的な活動、即ちある一人の頭の中で行われる「想像上の遊戯」(imaginary play) という意味で解釈する。keli という語をこのような意味で理解した場合、それは愛する女性と別離している男性の感情状態の一側面を示すものであり、Meghadūta の内容とも適合する。即ち Meghadūta では、別離の苦しみの中、愛する妻との再会を想像するヤクシャが描かれているのである。そして Wezler[2001] は、Meghadūta をケーリカーヴィアとするヴァッラバデーヴァの分類は、愛する者との精神的・想像的な遊戯を取り扱っている作品として Meghadūta を特徴づけようとしたものであると結論している。

ヴァッラバデーヴァによるこの導入部は今後詳細に検討していかねばならない問題の一つであるが、いずれにせよ彼によれば Meghadūta はケーリカーヴィアである<sup>34</sup>。

#### 1.4. 題材と背景

通常カーヴィアでは、歴史・伝説上の偉人や英雄あるいは神といった、作品の鑑賞者達にとって周知の人物を主人公とすることが一般的である。また、詩人によって多少の改変はなされるものの、その内容も既存のものを題材とする場合が多い。カーリダーサの作品中で取り扱われている内容も、カーリダーサ以前の文献や

歴史的事実にその原型や神話的背景が見い出されるものがほとんどである。しかし Meghadūta における、愛する女性との別離に苦しむ男が雲に音信を託して相手へ届ける、という構造は、カーリダーサ以前の文献にそのままの形では見られないものである。Meghadūta はある種の物語的要素を持ちつつも、叙情・叙景を主とするものであるから、内容自体はカーリダーサの世界観や古代インドの風景に対する心情を吐露したものであろう。だが、上記の設定に関する着想や題材が何であったのか、なぜカーリダーサは Meghadūta の主人公に「クベーラから呪いを受けたヤクシャ」を選んだのかは注釈家達や研究者達の間でも意見が分かれている。

##### 1.4.1. マッリナータの解釈

マッリナータは、他者の見解を引用する形で、カーリダーサはヴァールミーキ (Vālmīki) の Rāmāyaṇa に Meghadūta の着想を得たと述べている<sup>35</sup>。

詩人 (カーリダーサ) は、ラーマ (Rāma) がシーター (Sītā) に対して [送った] ハヌーマット (Hanūmat) の音信を心に思い浮かべて『雲の音信』をつくったと人々は言う<sup>36</sup>。

興味深いことに、マッリナータ以前に彼と同じく南インド活躍した注釈家ダクシナーヴァルタナータ (Dakṣiṇāvartanātha, 13 世紀) も Meghadūta の着想に関してマッリナータと同様の解釈を示している<sup>37</sup>。

<sup>35</sup>Rāmāyaṇa の成立年代についてはヴィンデルニッツ [1965: 204-219] 及び岩本 [1982: 259-265] を参照された。

<sup>36</sup>Samjīvinī on MD 1.1: sītām prati rāmasya hanūmat-saṃdeśaṃ manasi nidhāya meghasaṃdeśaṃ kaviḥ kṛtavān ity āhuḥ /

<sup>37</sup>マッリナータが注釈中で頻繁にダクシナーヴァルタナータの解釈を引用すること、及び Kumārasambhava と Raghuvamśa に対する注釈の冒頭部でダクシナーヴァルタナータに言及する詩節を掲げていることから、マッリナータはカーリダーサの諸作品に注釈を書くに当たって彼の注釈をかなり参考にしていないに違いない。Mallinātha's opening verse 7 on RV: tathāpi dakṣiṇāvartanāthādyaiḥ kṣuṇṇavartmasu / vyaṃ ca kālidāsoktiṣv avakāśaṃ lab-

<sup>33</sup>Wezler[2001: 898] 参照

<sup>34</sup>今回その刊本を入手することはできなかったが、Wezler[2001: 917] によれば、スティラデーヴァ (Sthiradeva, 13 世紀頃) も Meghadūta に対する注釈の冒頭部で 'kelikāvya' という用語を用いている。ただヴァッラバデーヴァ同様、彼もその用語について特に重要な説明はなしていない。

さて実に詩人は、シーターに対してハヌーマットが届けた音信を心に浮かべ、それぞれに取って代わる主人公等を生み出すことで『[雲の]音信』を kaścīt 云々とする。「このように告げた時、風の息子ハヌーマットに対するシーターのように、彼女は顔を上げて—」云々という先に述べられるであろう言葉が、ラーマの物語に対する[カーリダーサの]愛着の印である<sup>38</sup>。

*Rāmāyaṇa* 第五篇美麗の巻 (sundarakāṇḍa) では、ラーマに託された音信を、ハヌーマットがランカー島 (Lāṅkā) に幽閉されているシーターへ届けるという出来事が描かれる。確かに、ラーマがハヌーマットを使って別離するシーターに音信を送るという構造は、*Meghadūta* における、ヤクシャが雲を使って別離する妻に音信を送るという構造と一致する。*Rāmāyaṇa* では音信の送り主がラーマ、その運び手はハヌーマット、受け取るのがシーターであるのに対して、*Meghadūta* では送り主がヤクシャ、運び手が雲、受け取るのがヤクシャの妻となる。またダクシナーヴァルタナータは、*Meghadūta* が *Rāmāyaṇa* に影響を受けていることは、*Meghadūta* 2.37 の描写からも見て取れると説明している。*Meghadūta* 2.37 は以下の通りである<sup>39</sup>。

このように告げた時、風の息子ハヌーマットに対するシーターのように、彼女は顔を上げ、希望に心開いて貴方を見て敬意を表し、この後[音信を]心傾けてしっかりと聞くだろう。良き人よ、友を通じて届けられる為、女達

hemahi // (「それでも、ダクシナーヴァルタナータ等に[注釈の]余地を閉ざされたカーリダーサの表現に対し、我々は余地を得ることができる」)

<sup>38</sup>Pradīpa on MD 1.1: iha khalu kaviḥ sītām prati hanūmatā hāritam sandeśam hr̥dayena samudvahan tatsthānīyanāyakādīyutpādanena sandeśam karoti kaścīd iti / rāmākathābhilāṣe liṅgam ity ākhyāte pavanatanayaṃ maithilīvonmukhī sā iti vakṣyamānavacanam /

<sup>39</sup>テキストと翻訳はマッリナータの注釈に基づいている。

にとって夫の消息というのは[夫と]会うにもほぼ等しい<sup>40</sup>。

この詩節は、ヤクシャの妻のもとに到着した雲が自身の素性を明かした時、ヤクシャの妻が夫との再会の希望を抱き、雲を見上げて敬意を表す様を描写した詩節である。そして、雲に対するヤクシャの妻の様がハヌーマットに対するシーターの様に比喻されている<sup>41</sup>。つまりヤク

<sup>40</sup>MD 2.37: ity ākhyāte pavanatanayaṃ maithilīvonmukhī sā tvām utkaṅthocchvasitahr̥dayā vīkṣya sambhāvya caiva / śroṣyaty asmāt param avahitā saumya sīmantinīnām kāntodantaḥ suhr̥dupanataḥ saṅgamāt kiṃcidūnaḥ //

<sup>41</sup>*Meghadūta* 2.37 に相当する場面は *Rāmāyaṇa* 5.31.16 に、シーターが音信を届けてくれたハヌーマットを賞賛する場面は *Rāmāyaṇa* 5.36.7-10 にそれぞれ見受けられる。RA 5.31.16: jānākī cāpi tac chrutvā vismayam paramam gatā / tataḥ sā vakrakesāntā sukeśī keśasaṃvṛtam / unnamya vadanam bhīruḥ śiṃśapām anvavaikṣata // (「一方、シーターはそれ(ハヌーマットの言葉)を聞いて非常に驚いた。それから、美しい巻き毛をした彼女は、髪に覆われた顔を上げ、恐る恐る[ハヌーマットがいる]シンシャパー樹に目を向けた。)」RA 5.36.7-10: vikrāntas tvam samarthas tvam prajñas tvam vānarottama / yenedam rākṣasapadam tvayaikena pradharṣitam // śatayojanavistīrṇaḥ sāgaro makarālayaḥ / vikramaślāghanīyena kramatā gospadīkṛtaḥ // na hi tvam prākṛtam manye vānaram vānaraśabha / yasya te nāsti saṃtrāso rāvaṇād api sambhramah // arhase ca kapiśreṣṭha mayā samabhibhāsītum / yady asi preṣitas tena rāmeṇa viditātmanā // (「最上の猿よ、貴方は勇敢にして優れた手腕を持つ賢者である。たった一人でこの悪魔達の住処を攻撃するのだから。その武勇ゆえに賞賛されるべき貴方は、海獣達の住処であり、100 ヨーヅアナにも渡って広がる大海を小さな水たまりの如く飛び越えた。私には貴方が普通の猿だとは思えない。最上の猿よ、恐怖のない貴方はラーヴァナにすら畏怖の念を抱かない。最上の猿よ、もし貴方がかの名高きラーマの使いであるならば、どうか私とお話してください」)

*Rāmāyaṇa* 5.31.16 は、始めは怯えていたシーターにハヌーマットが自身の素性を明かした後の場面であるが、その内容は、雲がヤクシャの妻に自身の素性を明かした後の場面を描く *Meghadūta* 2.37 に類似している。そして、シーターはハヌーマットに対して何度も「最上の猿よ」と呼びかけ、様々な形容詞を用いてハヌーマットを賛美するが、このことは *Meghadūta* 2.37 における「敬意を表して」(sambhāvya) という表現との関連を思わせる。

なお、ヴァッラバデーヴァは sambhāvya を「敬意を表して」ではなく「熟考して」(vicārya) の意味で解釈している。*Rāmāyaṇa* では、ハヌーマットが到着した時、シーターははじめラーヴァナが化けているのではないかと疑ったが、ハヌーマットの言葉を聞いて彼がラーマからの使者であることを知る。よってヴァッラバデーヴァの解釈に従った場合、*Meghadūta* 2.37 は、シーターがハヌーマットを見上げて敬意を表した様ではなく、ハヌーマットを見上げて使者であることの真偽を考えた様に比喻している詩節として解釈することができる。

シャの妻が雲から音信を受け取る場面、シーターがハヌーマットから音信を受け取る場面に比喩していることから、*Rāmāyaṇa* に対する、あるいは *Rāmāyaṇa* の出来事に対するカーリダーサの愛着をこの詩節に見て取れるというわけである<sup>42</sup>。

*Rāmāyaṇa* は後世の文学作品に多大な影響を与え、豊富な題材を提供したから、それに関連する描写があるからといって、その作品がすべて *Rāmāyaṇa* に依っていると断言することはできない。だが、カーリダーサが *Rāmāyaṇa* を熟知していたことは言うまでもないから、*Meghadūta* の構造が *Rāmāyaṇa* に着想を得たものである可能性は否定できない。

なお、ヴァツラバデーヴァは *Meghadūta* の題材と背景については特に説明を与えておらず、マツリナータも *Meghadūta* の主人公である「クベーラから呪いを受けたヤクシャ」やヤクシャが怠った務め等については特に説明していない<sup>43</sup>。

### 1.5. 使者文学

カーリダーサの最高傑作と言っても過言ではない *Meghadūta* は絶大な人気を誇り、後世に多くの模倣作品やその続編を扱った作品を生むこととなった。その形式や表現方法は様々

<sup>42</sup>*Meghadūta* 1.1 や 1.12 にもラーマやシーターのことをほのめかず描写がなされている。MD 1.1: kaścit kāntāviraḥaguruṇā svādhikārāt pramattaḥ śāpenāstaṃgamitamahimā varṣabhogyena bhartuḥ / yakṣaś cakre janakatanayāśnānapuṇyodakeṣu snigdhačchāyātuṛuṣu vasatiṃ rāmagiryāśrameṣu // (「或るヤクシャは己の務めを怠った為、愛する妻との別離 [をもたらす] 故に重い、一年間耐えねばならぬ主の呪いで力を失い、シーターの沐浴した神聖な水があり、陰を与える樹々生い茂るラーマギリの草庵に身を置いた」) MD 1.12: āpṛcchasva priyasakham amuṃ tuṅgam āliṅgya śailaṃ vandyaiḥ puṃsāṃ raghu-patipadair aṅkitaṃ mekhalāsu / kāle kāle bhavati bhavato yasya saṃyogam etya snehavyaktiś ciraviraḥajam muñcato bāspam uṣṇam // (「貴方の親友であり、斜面には人々が崇拝を惜しまぬラグ家の主 (ラーマ) の足の跡が残るその高山を抱いて、別れを告げよ。雨季の度に貴殿と出会い、長き別れを思っ熱い涙を流し、愛情を顕にする彼に」)

<sup>43</sup>*Meghadūta* の背景や題材を考察するに当たっては「呪い」(śāpa) が一つのキーワードとなるが、サンスクリット文学及び叙事詩における「呪い」については原 [1979: 231-258] に詳しい。ただそこでは不思議なことに、*Meghadūta* における「呪い」については論じられていない。

な形で模倣され、*Meghadūta* 以後約 50 から 60 の「使者文学」(dūtakāvya) が著された<sup>44</sup>。また、*Meghadūta* はその形式等が模倣されただけにとどまらず、作品の各詩節から一詩句あるいは二詩句を借用し、残りの詩句を自ら補う *samasyāpūraṇa* と呼ばれる技巧を用いた詩作の題材にもされた。その技巧を用いた詩作品として、ジナセーナ (Jinasena, 8 世紀) の *Pārśvābhyudaya* やヴィクラマ (Vikrama, 17 世紀) の *Nemidūta* 等がある<sup>45</sup>。

#### 1.5.1. バーマハの議論

カーリダーサ以後に書かれた「使者文学」の中で現存する最古のものは、ジャンブカヴィ (Jambukavi, 8 世紀から 10 世紀) の *Candradūta* であるが<sup>46</sup>、バーマハ (Bhāmaha, ca. 700) は *Kāvyaḷankāra* 1.42 で次のように述べている。

雲・風・月・蜂・ハーリタ鳥 (hārita) ・  
チャクラヴァーカ鳥 (cakravāka) ・オ  
ウム等が使者となるような [任用] は  
〈不適合なもの〉 (ayuktimat) [という  
詩的欠陥 (doṣa)] である<sup>47</sup>。

このバーマハの言葉から、彼が *Kāvyaḷankāra* を著す以前から雲等が使者として作品中で描かれていたことが分かる。バーマハは雲等が使者の役割を果たすのはおかしいと述べているわけであるが、その理由を彼は次のように言う。

[雲等の] 話さないものと [蜂等の]  
明瞭に話さないものが、如何にして  
遠方へ赴いて使者の役目を果たしえ  
ようか。したがって [雲等を使者と  
して任用するのは] 適合性と結びつ  
かない<sup>48</sup>。

<sup>44</sup>後世の「使者文学」及び *Meghadūta* の続編を扱ったものにどのような作品があるかは Lienhard [1984b: 123-126] に詳しい。

<sup>45</sup>Lienhard [1984b: 124] 及び Hultzsich [1911: vi-vii] 参照。

<sup>46</sup>Lienhard [1984b: 121] 参照。

<sup>47</sup>KA 1.42: ayuktimat yathā dūtā jalabhr̥nmārutendavaḥ / tathā bhramarahāritacakravākaśukādayaḥ //

<sup>48</sup>KA 1.43: avāco 'vyaktavācaś ca dūradeśavicāriṇaḥ / kathaṃ dūtyaṃ prapadyerann iti yuktyā na yujyate //

つまり、人間の言葉を話すことができない雲等の無生物が使者としての機能を果たすことはありえず、そのような事柄を描く作品は適合性を欠いているというわけである。「使者文学」というものに対する非難とも思えるようなこの言葉は、当然、雲を使者として扱う *Meghadūta* にも当てはまるが、カーリダーサは *Meghadūta* 中で次のような詩節を設けている<sup>49</sup>。

煙、光、水、風が集積した雲というものと、鋭敏な感官を備えた生物が届けるべき音信というものとの間にはなんと大きな違いがあることか！ ヤクシャはこのようなことを切望ゆえに深く考えず、それ(雲)に頼んだ。実に、恋に病む者は本性として、生物と無生物を区別できない<sup>50</sup>。

この詩節でカーリダーサは「切望」(*autsukya*)という語をキーワードとしてあげ、バーマハの非難を回避している<sup>51</sup>。つまり恋の病にかかった者は、そのあまりの切望ゆえに、音信を託す相手が使者として相応しいかどうかを判断できないから、雲を使者として選んでもおかしくないというわけである。先に見たヴァッラバデーヴァの注釈の冒頭部でも、妻との別離に基づくヤクシャの精神の異常性を理由に、雲が使者に任用されることの適合性が説明されていた<sup>52</sup>。

<sup>49</sup>テキストと翻訳はマッリナータの注釈に基づいている。

<sup>50</sup>MD 1.5: *dhūmajyotiḥsalilamarutām saṃnipātaḥ kva meghaḥ saṃdeśārthāḥ kva paṭukaraṇaiḥ prāṇibhiḥ prāpaṇīyāḥ / ity autsukyād aparigaṇayan guhyakas taṃ yayāce kāmārtā hi prakṛtikṛpaṇās cetanācetaṇeṣu //*

<sup>51</sup>*Meghadūta* 1.5 が持つ役割について、マッリナータとヴァッラバデーヴァはその詩節に対する注釈の導入部で次のように述べている。Saṃjīvinī on MD 1.5: *nanu cetanasādhyaṃ arthaṃ katham acetanena kārayitum pravṛtta ity apeksāyāṃ kaviḥ samādhatte—*(「どうして彼(ヤクシャ)は生物が達成すべき事柄を無生物にさせようとするのか。このような期待に対して詩人(カーリダーサ)は答える」) MDV on MD 5: *nanv acetanasya meghasya dūtyaṃ katham ity āha /*(「どうして無生物である雲を任用したのか。この問いに対して[カーリダーサは]述べる。」)

<sup>52</sup>スマティヴィジャヤ(Sumativijaya, 17世紀)も *Meghadūta* に対する注釈の冒頭部で全く同様の説明をしており、Nandargikar[1979: 14-15]が指摘するように、彼の説明はヴァッラバデーヴァの説明と酷似している。ただこの箇所には一部テキストの問題があり、その問題に

そしてこの *Meghadūta* 1.5 を考慮したためか、バーマハは次のように述べている。

しかし、[使者に適したものであろうとなかろうと]あれやこれやに対し、もし切望ゆえに狂人の如く語りかけるならば、[雲等の無生物も]そのように[使者と]なってもよい。[ヴィアーサ(Vyāsa)やカーリダーサ等の]賢者達はこれ(=切望ゆえの無生物への語りかけ)を頻繁に使用している<sup>53</sup>。

つまりバーマハも音信を送る者が切望にかられ、理性を失っている場合には、雲等に話しかけることを認めているのである。よって、無生物である雲を使者として任用する点に関して *Meghadūta* にカーヴィアとしての欠陥はない。以上のようなバーマハの議論は、当時、無生物を使者として愛する者へ音信を託すという形式をとった文学作品が流行していたことを想像させるものである<sup>54</sup>。

については Maurer[1965b: 4-5]を参照されたい。SGAV on MD 1 *guhyaḥ 'tra nāyakatvenāśritaḥ / tasya virahonmatatvād dūtye meghapreṣanam nāyuktam iti /*(「この作品でヤクシャは主人公と見なされる。そして彼は別離のせいで狂乱しているから、雲を使者に任用することは適合しなくはない」)

<sup>53</sup>KA 1.44: *yadi cotkaṇṭhāyā yat tad unmatta iva bhāṣate / tathā bhuvatu bhūmedaṃ sumedhobhiḥ prayujyate //*

<sup>54</sup>例えばそのような形式をとった作品として、カーリダーサに比較的近い時代に成立したと考えられる、作者不明の *Ghaṭakarparakāvya* (『破れ水瓶』)がある。*Ghaṭakarparakāvya* は *Meghadūta* と同様に雨季の情景や雨季における別離の心情描写を主題とした作品である。興味深いことに、この作品でも愛する者へ音信を運ぶ使者として雲が選択されており、主人公が雲に語りかける形で物語は展開する。しかしその構造は *Meghadūta* とは逆で、夫と別離する妻の側が雲に音信を託す役目を担っている。また、*Meghadūta* ではヤクシャが雲に音信を託すのみで、ヤクシャと妻の再会までは描かれませんが、*Ghaṭakarparakāvya* では夫が雲の音信を聞いて妻のもとへ帰ってくるまで描かれている。この作品は全二十二詩節からなる短編で、全詩節に〈押韻〉(yamaka)を用いているところに詩的価値が認められるものの、一見して作者の未熟さが目立ち、「使者文学」としての体裁も整えられていないとされる。だが、もし *Ghaṭakarparakāvya* をいわゆる「使者文学」と見なすならば、この作品は *Candradūta* よりも古く、かつカーリダーサに比較的近い時代に成立した「使者文学」だと言える。なお、*Ghaṭakarparakāvya* とその *Meghadūta* との関係等については木村[1966]、Lien-

## 2. 凡例

- ヴァッラバデーヴァとマッリナータの注釈書の底本には次のものをそれぞれ使用した。

1. E. Hultsch, ed. *Kālidāsa's Meghadūta edited from Manuscripts with the Commentary of Vallabhadeva and Provided with a Complete Sanskrit-English Vocabulary*. London: Royal Asiatic Society, 1911 and reprinted (New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers, 1998) with a New Foreword and Select Bibliography by Albrecht Wezler.
2. Gopal Ragnath Nandargikar, ed. *The Meghadūta of Kālidāsa with the Commentary of Mallinātha, a Literal English Translation, Copious Notes in English, and Various Readings*. Reprint, Delhi: Bharatiya Book Corporation. 1979.

- マッリナータの注釈書に関しては次の刊本を適宜参照した。

1. Nārāyaṇ Rām Ācārya, ed. *Mahākavikālidāsa-  
viracitaṃ meghadūtam. Mallināthapraṇīta-  
mṛjīvinīvyākhyayā, ṭippanī-pāṭhāntara-pariśiṣṭā-  
dibhiḥ ca sanāthikṛtam*. 16th ed, Bombay: Nir-  
naya Sagar Press. 1953.
2. M. R. Kale, ed. *The Meghadūta of Kālidāsa. Text with the Commentary of Mallinātha, English Translation, Notes, Appendices and a Map*. Reprint of 7th ed, Delhi, Varanasi, Patna: Motilal Banarsidass Publishers. 1987.

- 翻訳上重要でない異読と明らかな誤植は逐一注記していない。NとKではマッリナータが後世の挿入詩節であると述べている詩節にも詩節番号が符られており、Kでは詩節の順序が変更されたりしているので、混乱をきたさないため、詩節番号はĀに従う。

- ヴァッラバデーヴァは複合語の分析、語句やその意味の説明等を行わないことが度々あるので、そのような場合、それらの解釈はすべてマッリナータの解釈に依っ

ている。それゆえ詩節の解釈を容易にするため、翻訳はマッリナータの注釈に基づくものを先に提示しており、重複する脚注はすべてそちらに付している。注釈中では逐語訳を提示しているが、詩節の訳に際しては、不自然な日本語をさげ、原語が持つニュアンスを生かしつつも分かりやすく表現するために意識している箇所がある。注釈の翻訳と詩節の翻訳の際に使用している言葉が異なる場合が見受けられるのはそのためである。また詩節の訳は基本的に注釈家の解釈に従ったものを提示している。

- [] は訳の補い、() は意味もしくは原語の提示のために用いている。動植物、山河等の名前については同定を避け、便宜的な訳語もしくは片仮名音写に依っている<sup>55</sup>。詩節及び注釈中で提示される詩節の語とその訳は太字で示す。また、マッリナータとヴァッラバデーヴァの間に詩節の異読がある場合は、ヴァッラバデーヴァのテキストの方に下線で示してある。

hard[1984a] 及び Lienhard[1984b: 110-113] を参照されたい。

<sup>55</sup> Meghadūta 中で描かれる動植物、山河等については木村[1965] を参照されたい。

## Samjivini

さてこれより *Samjivini* を伴う『雲の使者』。「前の雲」。

1. 今、世界の父母であり、左半身を妻とし、右目の一瞥ゆえに左目を閉じているお方に敬礼する<sup>56</sup>。
2. 平静かつ清浄、想像も及ばぬ力を有し、体においては突出した腹をもつ光、顔においては象という光であるかのお方を、我らは心より崇拝する。障害となる闇を鎮めるために<sup>57</sup>。
3. 学問の女神よ、愛を与える抛り所となり、世界中のもの達の寄る辺となる行いを、貴方のために私はなそう。母よ、哀れみゆえに優しい流し目を放ち、私を目的を遂げた隊商の先導者にしてほしい<sup>58</sup>。
4. 本書では、他ならぬ文法構造を主軸に私は一切を説明する。私は根拠無きことを決して書かない。必要無きことを決して言わない<sup>59</sup>。

「祈願、敬礼、あるいは物語の主人公[もしくは副主人公]の提示がそれ(マハーカーヴィア)の冒頭をなす」という論書[の言葉]に基づき<sup>60</sup>、カーヴィアの最初に主人公を示すこと

<sup>56</sup>ab 句の韻律は非正規形 *anuṣṭubh* (*bha-vipulā*)、cd 句の韻律は正規形 *anuṣṭubh* (*pathyā*) である。*Raghuvamśa* と *Kumārasambhava* に対する注釈の冒頭部でもマッリナータは同様の詩節を掲げている。

<sup>57</sup>詩節の韻律は *rathoddhatā* である。*Raghuvamśa* と *Kumārasambhava* に対する注釈の冒頭部でもマッリナータは同様の詩節を掲げている。

<sup>58</sup>詩節の韻律は *mālabhāriṇī* である。*Raghuvamśa* と *Kumārasambhava* に対する注釈の冒頭部でもマッリナータは同様の詩節を掲げているが、ここでは a 句の *kāmadam* が *śarmadam* (幸を与える) になっている。

<sup>59</sup>詩節の韻律は正規形 *anuṣṭubh* (*pathyā*) である。*Raghuvamśa*、*Kumārasambhava*、*Kirātārjunīya*、*Śiśupālavadha* 及び *Bhaṭṭikāvya* に対する注釈の冒頭部でもマッリナータは同様の詩節を掲げている。

<sup>60</sup>KĀ 1.14: *sargabandho mahākavyam ucyaṭe tasya lakṣaṇam / āśīr namaskriyā vastunirdeṣo vāpi tanmukham //* (「章の連結体 (*sargabandha*) は、マハーカーヴィアと呼

で物語を始める<sup>61</sup>。

### 1.1. 或るヤクシャは己の務めを怠った為、愛する妻との別離 [をもたらず] 故に重い、一年間耐えねばならぬ主の呪いで力を失い、シーターの沐浴した神聖な水があり、陰を与える樹々生い茂るラーマギリの草庵に身

ばれる。その特徴は[以下の通りである]。祈願、敬礼、あるいは物語の主人公[もしくは副主人公]の提示がそれ(マハーカーヴィア)の冒頭をなす)

<sup>61</sup>プールナサラスヴァティー (*Pūrṇasarasvatī*, 14 世紀) は、*Meghadūta* 1.1 でなされる *vastunirdeśa* について次のように説明している。VL on MD 1.1: *vastu cātreṭivṛttanāyakaḥ / tasya pratipādanaṃ nirdeśaḥ yathā śiśupālavadhe—harir munim dadarśa iti kirātārjunīye ca—vanecaro yudhiṣṭhiram samāyayau iti / yathā cāsyaiṣa kaveḥ kumārasambhava—nagādhirājo 'sti ity upanāyakasya /* (「そしてこの内、*vastu* とは出来事の主人公のことである。彼を示すことが *nirdeśa* である。例えば *Śiśupālavadha* では「ハリは聖者を目にした」と言われ、また *Kirātārjunīya* では「森人はユディシュティラと出会った」と言われ、さらに他ならぬこの詩人(カーリダーサ)の *Kumārasambhava* では「山々の王がいる」と言われるように、副主人公が[示されている]」)。

プールナサラスヴァティーによれば *vastu* とは主人公 (*nāyaka*) のことであり、*nirdeśa* とはその主人公を示すこと (*pratipādana*) である。プールナサラスヴァティーが引用する *Śiśupālavadha* 等の例を *Meghadūta* 1.1 に当てはめると、*Meghadūta* では「或るヤクシャは居住をなした」(*kaścit yaksah vasatiṃ cakre*) という表現が *vastunirdeśa* の役割を果たすと言える。ここで注意しなければならないのは、*Śiśupālavadha*、*Kirātārjunīya* 及び *Kumārasambhava* の第一詩節における「ハリ(ヴィシュヌ)」(*hari*)、「森人」(*vanecara*) 及び「ヒマーラヤ」(*himālaya*) は、プールナサラスヴァティーによれば全て作品の副主人公 (*upanāyaka*) であり、副主人公について描写している場合でも、それは *vastunirdeśa* と見なしようということである。たがいずれにせよ、*Meghadūta* においてヤクシャは主人公 (*nāyaka*) であり、*Meghadūta* 1.1 は *vastunirdeśa* としての機能を果たしているから、*Meghadūta* のカーヴィアとしての体裁は得られている。なお、ランガチャルヤラッディも *vastunirdeśa* の *vastu* を「物語の主人公」(*kathānāyaka*) と説明している。Prabhā on KĀ 1.14: *vasati prastutavṛttānto 'sminn iti vastu kathānāyakaḥ /* (「主題である出来事が依拠する基体が *vastu* であり、物語の主人公のことである。)」ただし、*vastunirdeśa* の *vastu* は「主題」(*prakṛta*) もしくは主題の一部 (*tadamaśa*) と解釈される場合がある点にも留意しなければならない。本稿ではプールナサラスヴァティーの解釈に従っている。

なお、マッリナータは *Kumārasambhava* 1.1 に対しても同様の説明をしている。

KS 1.1: *asty uttarasyāṃ diśi devatātmā himālayo nāma nagādhirājah / pūrvāparau toyanidhī vagāhya*

を置いた<sup>62</sup>。

kaścit 以下について。己の務めを (svādhi-kārāt=svaniyogāt) 怠った (pramattaḥ=anavahitaḥ) [ヤクシャ]。アマラ (Amara) は「pramāda, anavadhānātā は同義語である」と言う<sup>63</sup>。「嫌悪 (jugupsā)・停止 (virāma)・怠慢 (pramāda) を表示する動詞語根が追加されるべきである」[という Vārttika の規定]に基づいて [svādhikāra は]〈基点〉(apādāna) である<sup>64</sup>。よって第五格名詞接辞が起こる<sup>65</sup>。まさにこれ故に、過失を原因として [という意味である]。

愛する妻との別離 [をもらす] 故に重い、即ち耐え難い [呪い]。この上ない [呪い] という意味である。Śabdārṇava には「一方 guru は、賢者 (gīṣpati)・王 (śreṣṭha)・師 (guru)・父 (pitṛ)・耐え難い (durbhara) を意味する」とある<sup>66</sup>。一年間 (varṣam=samvatsaram) 耐えねばならぬ [呪い]。kālādhvanor atyantasaṃyoge [という A 2.3.5] に基づいて第二格名詞接辞が起こる<sup>67</sup>。atyantasaṃyoge ca [という A 2.1.29]

sthitaḥ pṛthivyā iva mānadaṇḍaḥ //

ヒマラーヤとして名高き、神の姿をした山々の至高なる王が北方にあり。彼は東西の大海にまで達し、恰も大地の測定棒の如くそびえ立つ。

Samjivini on KS 1.1: tatrābhavān kālidāsaḥ kumārasaṃbhavaṃ kāvyam cikīrṣuḥ āśir namaskriyā vastunirdeśo vāpi tanmukham iti śāstrāt kāvyādaḥ vakṣyamānārthānugunaṃ vastu nirdiśatai—(「敬愛するカーリダーサ殿は『クマールの誕生』というカーヴィアを作ろうと欲して、「祈願、敬礼、または物語の主人公 [あるいは副主人公] の提示がその冒頭をなす」という論書 [の言葉] に基づき、カーヴィアの最初に、先に述べるであろう事柄に適した [副] 主人公を示す。)

<sup>62</sup>MD 1.1: kaścit kāntāvirahaguruṇā svādhikārāt pramattaḥ śāpenāstaṃgamitamahimā varṣabhogyeṇa bhartuḥ / yakṣaś cakre janakatanayāśnānapuṇyodakeṣu snigdhačchāyātaruṣu vasatiṃ rāmagiryāśrameṣu //

<sup>63</sup>AmK 1.7.30.

<sup>64</sup>Vt 1 on A 1.4.24.

cf. A 1.4.24 dhruvam apāye `pādānam // 「離別が実現されるべき時、出発点となる〈行為参与者〉(kāraḥ) は〈基点〉と呼ばれる」

<sup>65</sup>A 2.3.28 apādāne pañcamī // 「〈基点〉が表示されるべき時、第五格名詞接辞が起こる」

<sup>66</sup>Vogel[1979: 307]によれば、ヴァーチャスパティ (Vācaspati) による辞典 Śabdārṇava は完全な形では現存していないが、写本の断片からかなり膨大な書であったことが知られる。

<sup>67</sup>A 2.3.5 kālādhvanor atyantasaṃyoge // 「行為 (kriyā)・

に基づいて複合語を形成している<sup>68</sup>。kumati ca [という A 8.4.13] に基づいて [n 音に] n 音が代置される<sup>69</sup>。主の (bhartuḥ=svāmināḥ) 呪いで。

能力を失った者 (astamgamito mahimā sāmartyaṃ yasya saḥ) が astamgamitamahiman である。astam という語は m 音で終わる不変化詞である<sup>70</sup>。それは dvitīyā 云々 [という A 2.1.24 を] 規則分割することで複合語を形成する<sup>71</sup>。

属性 (guṇa)・実体 (dravya) との、時間・空間の不断の結合が理解されるべき時、時間・空間を表示する語の後に第二格名詞接辞が起こる」

<sup>68</sup>A 2.1.29 atyantasaṃyoge ca // 「第二格名詞接辞で終わる、時間 (kāla) を表示する語は、不断の結合が理解されるべき時、名詞接辞で終わる項目と任意に複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

<sup>69</sup>A 8.4.13 kumati ca // 「複合語の後続要素が kU をもつ場合にも、複合語の先行要素にある r, ṣ に後続する、〈名詞語基〉末 (prātipadikānta)・nUM・接辞 (vibhakti) の n 音に n 音が代置される。aT, kU, pU, āN, nUM が介在する場合でも」

<sup>70</sup>cf. A 1.4.68 astam ca // 「m 音で終わる不変化詞 (avyaya) であり、知覚されないことを意味する astam という語も、gati という術語で呼ばれる。」

cf. A 2.2.18 kugatiprādayaḥ // 「不変化詞 (avyaya) である ku, gati という術語で呼ばれる項目、及び pra 群の項目は、意味的繋がりのある他の語と必ず複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

<sup>71</sup>cf. A 2.1.24 dvitīyā śrītātītapatitagatātyastaprāptāpannaiḥ // 「第二格名詞接辞で終わる項目は、意味的繋がりのある śrita, atīta, patita, gata, atyasta, prāpta, āpanna と複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

cf. 2.4.82 avyayād āpsupah // 「不変化詞 (avyaya) に後続する女性接辞 āP と名詞接辞 (sUP) にゼロが代置される」

マッリナータは A 2.1.24 を規則分割 (yogavibhāga) することで、astam という不変化詞 (avyaya) の gamita との複合語形成を説明しようとしている。A 2.1.24 からは次の二規則が規則分割により導出されると考えられる。

1. dvitīyā [subantena samasyate] // 「第二格名詞接辞で終わる項目は、意味的繋がりのある名詞接辞で終わる項目と複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」
2. śrītātītapatitagatātyastaprāptāpannaiḥ [ca] // 「第二格名詞接辞で終わる項目は、意味的繋がりのある śrita, atīta, patita, gata, atyasta, prāpta, āpanna と複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

A 2.1.24 が規定するのは śrita 等の項目との複合語形成のみであるが、この規則分割により、第二格名詞接辞で終わる項目 (dvitīyānta) はそれ以外の名詞接辞で終わる項目 (subanta) と複合語を形成することが可能になり、A 2.1.24 だけではカヴァーしきれない事例を説明できるようになる。マッリナータが直前で述べているように astam は不変化詞 (avyaya) であり、第二格名詞接辞で終わる項目ではないが、それを第二格名詞接辞で終わる項目とみ

或る、即ち名前が提示されないヤクシャは、即ちある種の半神は<sup>72</sup>。アマラは「vidhyādhara, apsaras, yakṣa, rakṣas, gandharva, kimnara, piśāca, guhyaka, siddha, bhūta」というこれらは

なし(vibhaktipratirūpanipāta)、A 2.1.24を規則分割することで、マッリナータは当該の *asmatamgamita* という複合語を説明しようとしている。A 2.1.24の規則分割は *Nyāsa* でも提案されている。Nyāsa on KV ad A 2.1.24: *dvitīyā iti yogavibhāgaḥ kriyate / tena gamigāmiprabhrtibhir api samāso bhavati /* (「*dvitīyā* と [A 2.1.24] は」規則分割される。それにより、*gamin* や *gāmin* 等とも複合語が形成される。)

さて以上のように、マッリナータの説明に従えば、*astam* という不変化詞を第二名詞接辞で終わる項目と見なし、A 2.1.24を規則分割することで当該の *astamgamita* という複合語は説明できる。だがここで一つの疑問が生じる。A 1.4.68により不変化詞 *astam* は *gati* という術語で呼ばれる。そして A 2.2.18により、*gati* という術語で呼ばれる項目は他の語と複合語を形成する。つまり A 1.4.68 と A 2.1.18に依拠し、*astamgamita* を *gati-samāsa* として説明すれば文法的に何の問題もないのである。マッリナータ自身、*astam* を *m* 音で終わる不変化詞と説明しているから、彼が A 1.4.68を念頭に置いていることは間違いない。それにもかかわらず何故、*astamgamita* という複合語を説明するために上述したような複雑な手続きを踏む必要があったのだろうか。マッリナータの解釈に従うならば、彼は A 2.2.18が規定する *gati-samāsa* を意図的に無視したか、それに気付かなかったことなる。それとも A 2.2.18を当該の事例には適用できない理由があったのだろうか。この問題については稿を改めて論じたい。

なお *Vārttika* や *Mahābhāṣya* では当該規則に対する規則分割は提案されておらず、*śrita* 等の項目に *gamin* や *gāmin* 等の項目を追加すべきとして、A 2.1.24がカヴァーしきれない事例、例えば *grāmagamin*, *grāmagāmin* 等の事例を説明しようとしている。Vt 1 on A 2.1.24 *śritādiṣu gamigāmyādīnām upasamkhyānam //* (「*śrita* 等の項目に *gamin* や *gāmin* 等の項目が追加されるべきである。’) MBh on Vt 1 ad A 2.1.24: *śritādiṣu gamigāmyādīnām upasamkhyānam kartavyam / grāmaṃ gamī grāmagamī / grāmaṃ gāmī grāmagāmī //* (「*śrita* 等の項目に *gamin* や *gāmin* 等の項目が追加されるべきである。【例】村へ行く者 (*grāmaṃ gamī*) が *grāmagamin* である。村へ行く者 (*grāmaṃ gāmī*) が *grāmagāmin* である。’) )

<sup>72</sup>*Meghadūta* 中で主人公の名前が提示されない理由をプールナサラスヴァティーは次のように述べている。VL on MD 1.1: *kaścid iti sāmānyanirdeṣo rasasamrambhityā kavē tadānupayuktayakṣa-viṣeṣapratipādane tātparyābhāvaṃ dhvanayati / yathā raghuvamśe—mataṅgaśāpād avalepamūlād ity avalepa-prakāra-viṣeṣānuktiḥ /* (「*kaścit* というような一般的な提示は、〈情調〉(*rasa*) を喚起するものとして、詩人(カーリダーサ)が、それ(〈情調〉)に相応しくない特定のヤク

半神 (*devayoni*) である」と言う<sup>73</sup>。

ジャナカ (*Janaka*) の娘が、即ちシーターが沐浴したことで (*snānaiḥ=avagāhanaiḥ*) 神聖な (*puṇyāṇi=pavitrāṇi*) 水がある [ラーマギリ]。清浄なる [ラーマギリ] という意味である。陰を与える樹々 (*chāyāpradhānāḥ taravaḥ*) が *chāyātarava* である。*śākapārthiva* 群に含まれることに基づき、複合語を形成している<sup>74</sup>。

シャの説明を意図していないことを示唆している。例えば *Raghuvamśa* では「高慢を原因とする、マタンガ仙の呪いによって—」というように、高慢というものに関する特定の様態は述べられていない。つまりプールナサラスヴァティーによれば、カーリダーサがあえて主人公の名前を述べなかつたのは、それにより〈情調〉(*rasa*) を掻き立てるためである。

またスマティヴィジャヤは *Meghadūta* に対する注釈の冒頭部で次のように述べている。SGAV on MD 1: *iha kāvyē kartrā pūrvaṃ kathānyakasya noktaṃ nāma / etat kāvyasya dūṣaṇam / tad yathā—bhurtur ājñām na kurvanti ye ca viśvāsaghātakāḥ / teṣāṃ nāmāpi na grāhyam śāstrasyādau viṣeṣataḥ // ataḥ kāraṇāt noktaṃ atra nāma /* (「【反論】このカーヴィアでは、はじめに作者は物語の主人公の名前を述べていない。このことはカーヴィアに欠陥をもたらす。【答論】そのことについて例えば次のように言われる。『主人の命令を実行せず、信頼を損なつた者はその名前すら言及されてはならない。特に作品のはじめでは。』この理由から、この作品では [主人公] 名前は述べられていないのである。’) スマティヴィジャヤが引用する詩節の典拠は不明であるが、彼によれば、*Meghadūta* ではクベーラの命令を守らなかつたヤクシャを主人公としているので、カーリダーサはそのような者の名前を作品の冒頭では述べなかつたのである。

<sup>73</sup>AmK 1.1.11.

<sup>74</sup>cf. Vt 8 on A 2.1.69 *samānādhikaraṇādhikāre śākapārthivādīnām upasamkhyānam uttarapadalopaś ca // samānādhikaraṇa* 複合語の支配下で、*śākapārthiva* 群が追加されるべきであり、複合語の後続要素は脱落すると定式化されるべきである。)

MBh on Vt 8 ad A 2.1.69: *samānādhikaraṇādhikāre śākapārthivādīnām upasamkhyānam kartavyam uttarapadalopaś ca vaktavyaḥ / śākabhojī pārthivaḥ śākapārthivaḥ / kutapavāsāḥ sauśrutah kutapasauśrutah / ajāpaṇyas taulvalir ajātaulvaliḥ / yaṣṭipradhāno maudgalyo yaṣṭimaudgalyaḥ //* (「*samānādhikaraṇa* 複合語の支配下で、*śākapārthiva* 群が追加されるべきであり、複合語の後続要素は脱落すると定式化されるべきである。【例】野菜を食す王 (*śākabhojī pārthivaḥ*) が *śākapārthiva* である。クタパ毛布を纏うサウシュルタ (*kutapavāsāḥ sauśrutah*) が *kutapasauśruta* である。雌ヤギを売るタウルヴァリ (*ajāpaṇyas taulvaliḥ*) が *ajātaulvali* である。主として杖を特徴とする (もしくは杖の助けを借りて歩く) マウドガルヤ (*yaṣṭipradhāno maudgalyaḥ*) が *yaṣṭimaudgalya* である。’) )

cf. A 2.1.49 *pūrvakālaikasarvajaratpurāṇanavakevalāḥ samānādhikaraṇena //* 「名詞接辞で終わる (*subanta*)、時間的に先行するもの (*pūrvakāla*) を表示する項目、及び *eka*, *sarva*, *jarat*, *purāṇa*, *nava*, *kevala* は、意味的繋がりがあり、

陰を与える樹々が、即ちナメール樹 (Nameru) が生い茂る (snigdhaḥ=sāndrāḥ) [ラーマギリ]。住むのに適した [ラーマギリ] という意味である。Śābdārṇava には「snigdha は、潤沢な (masṛṇa)・生い茂る (sāndra) を意味する」とあり、また「chāyāvṛkṣa とはナメール樹のことであろう」とある。ラーマギリの、即ちチトラクータ (Cit-rakūta) の草庵に居住を。vahivasyartibhyaś ca [という US 4.62] に基づいて、uṇādi 接辞 ati が起こる<sup>75</sup>。なした (cakra=kṛtavān)。

このカーヴィアでは、様々な箇所では山・都・海等の描写がなされるから、『雲の使者』はマハーカーヴィアと見なされる<sup>76</sup>。〈情調〉(rasa) は〈別離〉(vipralambha) と呼ばれる〈恋情〉(śṛṅgāra) であり、その内でも〈狂乱〉(unmāda) の状態である<sup>77</sup>。まさにこれ故に、āsrameśu というように [住む場所が] 複数形で表されることで、[住む場所が] 一つの場所にとどまらない

同一対象を指示する名詞接辞で終わる項目と複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

cf. A 2.1.69 varṇo varṇena // 「特定の色を表示する名詞接辞で終わる項目 (subanta) は、意味的繋がりがあり、同一対象を指示し、特定の色を表示する名詞接辞で終わる項目 (subanta) と複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

<sup>75</sup>US 4.62 vahivasyartibhyaś cit // 「動詞語根 vah (「運ぶ」), vas (「住む」), ṛ (「進む」) の後に ati 接辞と cit 接辞が起こる」

<sup>76</sup>解題部 1.3.1 を見よ。

<sup>77</sup>バラタ (Bharata, 年代不詳) の Nāṭyaśāstra では八つの〈情調〉(rasa) が挙げられている。

NS 6.15: śṛṅgārahāsyakarūṇā raudravīrabhaya-nakāḥ /

bībhatsādbhutasamjñau cety aṣṭau nāṭye rasāḥ smṛtāḥ //

〈恋情〉・〈滑稽〉・〈悲愴〉・〈憤激〉・〈勇武〉・〈驚愕〉・〈増悪〉・〈奇異〉という八つが演劇における〈情調〉として伝承されている。

〈別離の恋情〉(vipralambhaśṛṅgāra) は〈恋情〉の下位区分であり、〈狂乱〉(unmāda) は〈別離の恋情〉を上演する際の〈外的感情表現〉(anubhāva) の一つである。NS, p. 246.13-14: vipralambhakṛtas tu nirvedaglāniśankāsūyāśramacintautsukyānidrāsuptasvapnavibodhavyādhyunmādāparasmārajādyamohamaraṇādibhir anubhāvair abhinetaṅgāḥ / (「一方、別離によりもたらされる [〈恋情〉] は、〈厭世〉・〈倦怠感〉・〈憂慮〉・〈嫉妬〉・〈疲労〉・〈物思い〉・〈切望〉・〈眠気〉・〈睡眠〉・〈夢見〉・〈覚醒〉・〈病〉・〈狂乱〉・〈記憶喪失〉・〈愚鈍〉・〈気絶〉・〈死〉等の〈外的感情表現〉によって上演されるべきである」)

いことが示唆されている。

ラーマがシーターに対して送ったハヌーマットの音信を心に浮かべて、詩人 (カーリダーサ) は『雲の音信』をつくったと人々は言う<sup>78</sup>。

このカーヴィアでは全詩節においてマンダークラウンター韻律が使用される。それは次のように言われる。

四・六・七 [音節ごとに中間休止がなされ、] ma, bha, na, ta, ta の後に二つの guru が置かれたならば、マンダークラウンター韻律である<sup>79</sup>。

と。

1.2. か弱い妻と別れた愛深き彼は、腕から黄金の腕輪も抜け落ち、その山で幾月かを過ごした後、アーシャダ月の最初の日、山頂を抱いた雲、土手打ち遊びの際に身を屈める象のように美しい雲を目にした<sup>80</sup>。

tasmin 以下について。その山で、即ちチトラクータ山で。か弱い妻と離れた、即ち愛する妻と離れた [彼]。黄金の腕輪 (valayaḥ=kaṭakam)。アマラは「男性と中性の kaṭaka と valaya は同義語である」と言う<sup>81</sup>。それ (黄金の腕輪) が抜け落ちて (bhraṃsena=pātena)、腕に、即ち肘から下の部分に何もなくなった (riktaḥ=sūnyaḥ) 者がそのように言われる。シャージュヴァタ (Śāśvata) は「prakoṣṭa は私的な部屋 (kākṣāntara) を意味する場合と、肘から下の部分 (kūrparād adhaḥ) を意味する場合があるだろう」と言う<sup>82</sup>。別離の苦しみでやせ細った [腕] という意味である。愛深き (kāmi=kāmukha) 彼は、即ちヤクシャは。幾月かを。八ヶ月を、という意味である。何故なら「残る四ヶ月を過ご

<sup>78</sup>解題部 1.4.1 を見よ。

<sup>79</sup>VR 3.97.

<sup>80</sup>MD 1.2: tasminn adrau katicid abalāvīprayuktaḥ sa kāmi nītvā māsān kanakavalayabhraṃśarikṭapakoṣṭaḥ / aśāḍhasya prathamadvise megham āśliṣṭasānuṃ vapra-kṛdāparinatagajaprekṣanīyaṃ dadarśa //

<sup>81</sup>Amk 2.6.107.

<sup>82</sup>AAS 445ab.

せ」と先に述べられるだろうから<sup>83</sup>。過ごして(nītvā=yāpayitvā)。

アーシャーダー宿(āṣādhānakṣatra)と結びつく満月の日がアーシャーデー(āṣādhī)である。nakṣatreṇa yuktaḥ kālah [という A 4.2.3]に基づいて taddhita 接辞 aN が起こる<sup>84</sup>。ṭiḍḍhānañ 云々 [という A 4.1.15]に基づいて、NīP 接辞が起こる<sup>85</sup>。そのアーシャーデーがその月において満月の日であるから、[その月は]アーシャーダ(Āṣādha)月 [と呼ばれる]。sāsmīn paurṇamāsīti sañjñāyām [という A 4.2.21 の規則に基づいて] taddhita 接辞 aN が起こる<sup>86</sup>。その最初の日、山頂を抱いた、即ち山頂を覆った[雲を目にした]。

<sup>83</sup> Meghadūta 2.47 において、ヤクシャの追放期間は蛇の上で眠るヴィシュヌが目覚めるまでであることが語られている。シェーシャ蛇(Śeṣa)の上で眠るヴィシュヌが起き上がるのは一般的にカールティカ月(Kārtika)(10月から11月に相当)の第11番目の日とされるから、Meghadūta 2.47 の記述により、ヤクシャがクペーラから呪いを受けて神都アラカーを追放されたのはまさにその日だったことが分かる。そしてマツリナータのテキストに従えば、現在はそれから八ヶ月が過ぎたアーシャーダ月(6月から7月に相当)の最初の日である。

MD 2.47: śāpanto me bhujagaśayanād utthite  
śārngapāṇau  
śeṣān māsān gamaya caturo locane mīlayitvā /  
paścād āvīm virahagaṇitam taṃ taṃ ātmābhilā-  
ṣaṃ  
nirvekṣyāvah pariṇataśaraccandrikāsu kṣapāsu  
//

シャールンガ弓を手を持つ者(ヴィシュヌ)が蛇という寝床から起き上がる時、我が呪いは終わりを告げる。お前は目を閉じて残る四ヶ月を過ぎなさい。その後、別離の間に幾度も[心に]抱いた自身の欲望の何もかもを我らは楽しむだろう。成熟した秋の月光が降る夜に。

<sup>84</sup> A 4.2.3 nakṣatreṇa yuktaḥ kālah // 「星宿を意味する、第三格名詞接辞で終わる語の後に、その星宿が月と結びつく時(kāla)を表示するため、taddhita 接辞 aN が起こる」

<sup>85</sup> A 4.1.15 ṭiḍḍhānañdvayasajdaghnajmātractayapthaktha-  
ñkāñkvarapkyunām // 「T を IT とする接辞、及び接辞 dha,  
aṅ, aṅ, dvayasaC, daghnaC, mātraC, tayaP, thaK, thaṅ,  
Kaṅ, KvaraP, KHyaN で終わる〈名詞語基〉(prātipadika)  
の後に、女性形で NīP 接辞が起こる」

<sup>86</sup> A 4.2.21 sāsmīn paurṇamāsīti sañjñāyām // 「第一格名詞接辞で終わる、満月の日を意味する項目の後に、月の名称を派生するため、第七格名詞接辞の意味で taddhita 接辞 aN が起こる」

土手を突く戯れとは、大地を掘り起こす遊びのことである。Śabdārṇava には「角等で大地を掘り起こす遊びが vaprakrīḍā と呼ばれる」とある。それ(土手を突く戯れ)の際に身を屈めている、即ち曲がった牙で[土手を]打つ[象]。ハラユダ(Halāyudha)は「一方、曲がった牙で攻撃する象は身を屈めると考えられる」と言う<sup>87</sup>。その(身を屈めた)象(saḥ cāsau gajaḥ ca) [が parinatagaja であり]、それ(身を屈めた象)のように美しい(prekṣaṇīyam=darśaṇīyam)雲を目にした。gajaprekṣaṇīyam というこの表現には iva が欠落しているので、[これは]〈欠落した直喩〉(luptopamā) である<sup>88</sup>。

「アーシャーダ月の最初の日」(āṣādhasya prathamadvise) というこの表現に関して、「シュラーヴァナ月の間近な時」<sup>89</sup>と先に述べられるであろうシュラーヴァナ月(Śrāvaṇa)との近接を示すために、「最後の日」(praśamadivise) という読みを或る人達は想定する<sup>90</sup>。[しかし]

<sup>87</sup> ARM 2.65cd.

<sup>88</sup> マツリナータが頻繁に引用する文学理論書 Pratyāparudrayaśobhūṣaṇa によれば、まず〈完備した直喩〉(pūrṇopamā) とは、1. 〈比喩手段〉(upamāna), 2. 〈比喩対象〉(upameya), 3. 〈共通属性〉(sādhāraṇadharmā), 4. 〈類似性標示語〉(sādrśyapratipādaka) の四要素全てが表現されているものである。その内一つでも欠けている場合、その〈直喩〉は〈欠落した直喩〉(luptopamā) と見なされる。当該詩節では〈比喩手段〉は象(gaja)、〈比喩対象〉は雲(megha)、〈共通属性〉は美しい(prekaṇīya) ことであり、これらはすべて詩節中に表現されているが、〈類似性標示語〉は直接的には表現されていない。よって当該詩節で使用される〈直喩〉は〈欠落した直喩〉となる。PYBh, arthālamkāra, p. 355.9-10: sā prathamam dvidhā / pūrṇā luptā cety / upamānopameyasādhāraṇadharmasādrśyapratipādakānām caturṇām prayoge pūrṇā / ekasya dvayos trayānām vā lope luptā / (「まず始めに、それ(〈直喩〉)は二種である。即ち〈完備したもの〉と〈欠落したもの〉である。〈比喩手段〉・〈比喩対象〉・〈共通属性〉・〈類似性標示語〉の四つが使用される場合、〈完備したもの〉である。[これらの四要素の内、]一つ、二つ、あるいは三つが欠落している場合、〈欠落したもの〉である)」

<sup>89</sup> Meghadūta 1.4 を見よ。

<sup>90</sup> Meghadūta 1.4 で「シュラーヴァナ月の間近な時」(pratyāsanne nabhasi) とカーリダーサは述べるから、「最初の日」(prathamadvise) と読むよりも「最後の日」(praśamadivise) と読んだ方がアーシャーダ月とシュラーヴァナ月(8月から9月に相当)の近接を示すことができ、カーリダーサの言葉との矛盾をきたさない、というのが「或る人達」の考えである。なおヴァツラバデーヴァは「最後の日」(praśamadivise) で当該詩節を読んでいる。

それは不適切である。何故なら *prathama* [という読み] よりも [*praśama* という読みの方が] 優れている理由がないから。

【反論】シュラーヴァナ月との近接を示すためだと言っているではないか。

【答論】それは間違いである。何故なら、近接一般はまさに月 [同士] の近接により、「最初の日」 [と読んだ場合] にも当てはまるから<sup>91</sup>。適合性がないので、過度の近接は話者に意図されていないから。あるいは話者に意図されていたとしても、自分達の見解の場合にも、最後の日の最後の刹那に雲を見ることの想定には根拠がないので、それ (想定) はありえないから<sup>92</sup>。一方、我々の見解の場合にのみ、まさに前もって、将来の不幸を取り除くための無事を伝える音信を推理したことが述べられたことになるから、適合性が確立する<sup>93</sup>。

【反論】狂乱した者にこのような思慮はない<sup>94</sup>。

【答論】それは間違いである。何故なら、狂乱した者が不幸を取り除くために行動することも [ないことになる] から、他ならぬ音信はあってはならない。そしてそのような場合、まさにカーヴィアが開始できなくなるから、[作品の] 根底を揺るがす驚くほどのなんと優れた学識か！<sup>95</sup>

<sup>91</sup>シュラーヴァナ月はアーシャーダ月の直後に来るので、月同士の近接という意味では、「最初の日」(*prathamadivase*) と読んだ場合でもアーシャーダ月とシュラーヴァナ月の近接は確立される。

<sup>92</sup>もしシュラーヴァナ月との本当の過度の近接をカーリダーサが意図していたとするならば、ヤクシャはアーシャーダ月のまさに「最後の日の最後の刹那」に雲を見たことになるが、そのように都合よく雲が現れるはずがない。よって過度の近接を意図することに適合性はない。

<sup>93</sup>ヤクシャが音信を託すため雲に語り始める時期を考慮するならば、「最初の日」という読みの場合にのみ、妻を支えるために音信を送ることを計画する時間、あるいはその音信の内容を吟味する時間が確保される。「最後の日」という読みでは、ヤクシャは雲を見てすぐに雲に語りかけることになるので、そのような時間は確保されない。

<sup>94</sup>*Meghadūta* において、主人公ヤクシャは妻を想うあまり狂乱している (*unmāda*) と注釈家達に解釈される。狂乱した者が妻の安否を気遣って音信を送ることを計画したり、あるいはその音信の内容を吟味したりするはずがない、というのが反論者の意図である。

<sup>95</sup>もし、ヤクシャの狂乱を理由に音信の計画やその内容の吟味を否定するならば、妻の安否を気遣って音信を

【反論】 その場合、「ヴィシュヌが蛇という寝床から起き上がる時、我が呪いは終わりを告げる」<sup>96</sup>云々というように、神の目覚めに終わる呪いが四ヶ月残っていることがどうして言われるのか。[呪いの期間が] 十日間余分になってしまうのに。

【答論】自分達の見解の場合でも二十日間不足してしまうのにそれはどうして [言われるのか]、と考へて [貴方達は] 納得せねばならない。それ故、多少の [日数の] 不揃いさを話者は意図していないから、「最初の日」と正しく述べられたのである<sup>97</sup>。

### 1.3. ヤクシャ達の王 (クペーラ) の従者は涙を内に抑え、想いを掻き立てるそれ (雲) の前に何とか立ち、長い間黙念としていた。雲を目にすれば幸福な者でも心が騒ぐのだから、遠方において [妻の] 首を抱きたいと願う人にとってはましてのこと<sup>98</sup>。

送ろうと行動することは狂乱した者にはありえないことになる。だとすれば *Meghadūta* というカーヴィア自体が成り立たなくなってしまう。そのような考えを持つ反論者に対してマツリナータは皮肉の言葉を浴びせている。

<sup>96</sup>*Meghadūta* 2.47 については注 83 を見よ。

<sup>97</sup>一般的にヴィシュヌはアーシャーダ月の第 11 番目の日からシェーシャ蛇の上で眠りはじめ、カールティカ月の第 11 番目の日に目覚めるとされるから、当該詩節をアーシャーダ月の「最初の日」で読んだ場合はヤクシャの追放期間が 10 日間超過し、「最後の日」で読んだ場合は 20 日不足することになる。ヤクシャの追放期間が一年であることは *Meghadūta* 1.1 で述べられている。「最初の日」の読みの方が誤差が少ないので、その意味で「最初の日」と読む方が適切だと言えるかもしれないが、マツリナータによれば多少の誤差は考慮されない。だが、結局ヤクシャが雲を目にしたのが「最初の日」であろうが「最後の日」であろうが、マツリナータの解釈でもヴァッラバデーヴァの解釈でもヤクシャが雲に語り始めるのは「シュラーヴァナ月の間近き時」(*pratyāsanne nabhasi*)、即ちアーシャーダ月の終わり頃なので、いずれにせよヤクシャの呪いの期間は二十日不足することになる。

「最初の日」(*prathamadivase*) と「最後の日」(*praśamadivase*) という読みに関して、多くの注釈家達が実に多種多様な解釈を提示しているが、それら注釈家の解釈を簡潔にまとめ、*Meghadūta* の内容を考慮して最も合理的な読みと解釈を考察した小論として Bhattacharya[1975] がある。なお、ヴィシュヌの眠りと目覚めについては Kane[1974: 109-112] を参照。

<sup>98</sup>MD 1.3: *tasya sthitvā kathamapi puraḥ kautukādhānahetor antarbāspās ciram anucaro rājarājasya dadhyau / meghāloke bhavati sukhino 'py anyathāvatī cetah kanṭhāsleṣapraṇayini jane kiṃ punar dūrasamṣthe //*

**tasya** 以下について。[rājarājasya という複合語の先行要素である] rājan とはヤクシャのことである。ヴィシュヴァ (Viśva) は「rājan は、支配者 (prabhu)・王 (nṛpa)・月 (candra)・ヤクシャ (yakṣa)・クシャトリヤ (kṣatriya)・インドラ (śakra) を意味する」と言う<sup>99</sup>。ヤクシャ達の王 (rājñam rājā) が **rājarāja** であり、クペーラのことである。アマラは「rājarāja (ヤクシャ達の王) と dhānādhipa (富の神) は同義語である」と言う。rājāhaṣṣakhibhyaḥ tac [という A 5.4.91] に基づいて TaC 接辞が起こる<sup>100</sup>。彼 (クペーラ) の従者は、即ちヤクシャは。涙を内に抑え、即ち志操堅固かつ高潔なる主人公であるから<sup>101</sup>、涙を内に押しとどめて。

切望を起こす原因である (**kautukā-dhānahetoḥ=abhilāṣotpādakāraṇasya**) [雲]。ヴィシュヴァは「そして kautuka は、切望 (abhilāṣa)・祝祭 (utsava)・娯楽 (narman)・歓喜 (harṣa) を意味するだろう」と言う<sup>102</sup>。その、即ち雲の前に (**purā=agre**) 何とか [立ち]。多大な努力を払って、という意味である。

知の原因を話者が意図する場合にも、最初の katham という不変化詞が使用される。katham に始まり tathāpi に終わる語までは、努力の重さ (yatnagaurava) と強い (bādha) を意味する。

とウツジュヴァアラ (Ujvala) は言う<sup>103</sup>。

立ち、長い間黙念としていた (**dadhyau=cintayām āsa**)。「動詞語根 dhyai は物

<sup>99</sup>N の prabho では解釈が困難であるため Ā, K の prabhau に従う。マツリナータは *Kirātārjunīya* 3.30 に対する注釈中でも同様の引用を見せているが、そこでは prabhau となっている。また Roodbergen[1984: 456] が述べるように、当該箇所は *Viśvaparakāśa* には見当たらない。

<sup>100</sup>A 5.4.91 rājāhaṣṣakhibhyaḥ tac // 「複合語の最終要素である rājan, ahan, sakhi の後に TaC 接辞が起こる」

<sup>101</sup>*Kāvyaadarśa* では、マハーカーヴィアの主人公 (nāyaka) は練達かつ高潔である (caturōdāta) ことが規定されている。*Kāvyaadarśa* でなされるマハーカーヴィアの定義については解題部 1.3.1 を見よ。

<sup>102</sup>ViP, katrika 107ab.

<sup>103</sup>典拠不明。ウツジュヴァアラダッタ (Ujvaladatta, おそらく 13 世紀中頃) による *Uṇādisūtravṛtti* からの引用の可能性があるが、今回筆者はその刊本を入手することができなかった。

思い (cintā) を意味する」(dhyai cintayām)<sup>104</sup>と説明される動詞語根の後に IIT 接辞が起こっている<sup>105</sup>。「心の変化を鎮めるまで」(manovikāropaśamanaparyantam) と補うべし。

変化の原因を **meghāloke** 云々と述べる。雲を目にすれば (**meghāloke=meghadarśane**)、幸福な者でも、即ち愛する妻等と一緒にいる者でも、心が (**cetaḥ=cittam**) 別様な働き (**vṛttiḥ=vyāpāraḥ**) を持つに至る。変化に至るという意味である。首を抱きたいと願う (**kañṭhāśleṣapraṇayini=kañṭhāliṅganārthini**) 人が。遠方にいる (samsthā=sthitih) 者 (dūre samsthā sthitih yasya tasmin) というのが [dūrasamsthe である]。遠方にいる場合にはまじりのことである。愛する人と別離する者に何をか言わん、という意味である。愛する人と別離する者達は雲を見ると感情を駆り立てられる、ということが意図されている。

〈他事例提示〉(arthāntaranyāsa) という修辭が使用されている。ダンディンは次のように言う。

或る事柄を描写して、それを成立させられる他の事柄を提示するのが〈他事例提示〉であると理解すべし<sup>106</sup>。

と。

心が落ちついた時に彼は何をしたのか。このような問いゆえに述べる。

1.4. シュラーヴァナ月の間近き時、彼は妻の命を支えるため自身の無事を伝える音信を雲に運ばせようと、咲き初めのクタジャの花々をそれ (雲) に捧げ、喜びながら愛情ある言葉で歓迎した<sup>107</sup>。

<sup>104</sup>DhP 1.957.

<sup>105</sup>A 3.2.115 parokṣe lit // 「今日 (話者が当該の発話をなす日) を除く過去に属し、話者が目撃していない〈行為〉を表示する動詞語根の後に IIT 接辞が起こる。」

<sup>106</sup>KĀ 2.169.

<sup>107</sup>MD 1.4: pratyāsanne nabhasi dayitājīvitalambanārthi jīmūtena svakuśalamayim hārayiṣyan pravṛttim / sa pratyagraiḥ kuṭajakusumaiḥ kalpitārghāya tasmai prītaḥ prītipramukhavacanam svāgatam vyājahāra //

pratyāsanne 以下について。彼は、即ちヤクシャは。長い間黙念としていた彼は、という意味である<sup>108</sup>。ナバスマ月 (Nabhas) の、即ちシュラーヴァナ月の。アマラは「中性形の nabhas と kha は[「空」を意味する]同義語であり、śrāvāna と男性形の nabhas は[「シュラーヴァナ月」を意味する]同義語である」と言う<sup>109</sup>。間近き時、即ちアーシャダ月直後の[ナバスマ月]間近き時。[シュラーヴァナ月]が到来した時という意味である<sup>110</sup>。

妻の命を支えようと欲して。雨季には別離の苦しみが生じるから、「訪れた不幸への対処よりも、まさに不幸が訪れることを阻止する方が優れている」という道理に基づき、まさに前もって最愛の妻の命を支える手段を講じようと欲した[ヤクシャ]という意味である。

水の (jīvanasya=udakasya)、衣の帯 (mūtaḥ=paṭabandhaḥ=vastrabandhaḥ) が jīmūta である。pṛṣodara 群に含まれるから正しい語である<sup>111</sup>。ルドラ (Rudra) は「mūta は衣の帯 (paṭabandha) を意味するだろう」と言う<sup>112</sup>。その雲に (jīmūtena=jaladhareṇa)、即ち被使役者に、自身の無事[の伝達を]を主とする (svakuśalamayīm=svakṣemapradhānām) 音信を (pravṛttim=vārtām)。アマラは「vārtā, pravṛtti, vṛttānta は同義語である」と言う<sup>113</sup>。運ばせる、即ち到達せしめる。Iṛṣeṣa ca [という A 3.3.13] の ca 音に基づき、〈行為〉<sub>1</sub> を目的とする 〈行為〉<sub>2</sub> を表示する動詞語根が共起項目なので、IRT接辞が起こる<sup>114</sup>。命の糧

のための行為はまさに命の糧を与える者がなすべきである、という考えが意図されている。hrkror anyatarasyām [という A 1.4.53] に基づいて、〈目的〉(karman) という術語[の適用]は任意なので、当該の事例では〈行為主体〉を表示する第三格名詞接辞が起こっている<sup>115</sup>。

咲き初めの (pratyagraiḥ=abhinavaiḥ) クタジャの花々で (kuṭajakusumaiḥ=girimallikābhīḥ)。ハラユダは「kuṭaja と girimallikā は同義語である」と言う<sup>116</sup>。kalpitārghya について。崇拜行為が (arghaḥ=pūjāvidhiḥ) なされた (kalpitaḥ=anuṣṭhitaḥ) [雲]。アマラは「argha は、価値 (mūlya) と崇拜行為 (pūjāvidhi) を意味する」と言う<sup>117</sup>。それに、即ち雲に。「〈行為〉(kriyā) という語もまた言及されるべきである」[という Mahābhāṣya の言明]に基づいて[雲は]〈受益者〉(saṃpradāna) なので、第四格名詞接辞が起こる<sup>118</sup>。

愛情ある言葉で (pṛītipramukhāni pṛītipūrvakāni vacanāni yasmin karmaṇi tat) というのが pṛītipramukhavacana であり、[これは]副詞である。順調な到来 (śobhanam āgatam) が svāgata である。歓迎の言葉を喜びながら述べた。無事に到着したかを問うた、という意味である。

ところでナータ (Nātha) はこの詩節に関して、「シュラーヴァナ月の間近き時」(pratyāsanne nabhasi) というこの読みを熟考して「心が近くなった時」(pratyāsanne manasi) という読みを

当該詩節では、動詞語根 hr が未来時に属する 〈行為〉<sub>1</sub> という対象を表示する動詞語根であり、動詞語根 vi-ā-hr が 〈行為〉<sub>1</sub> を目的とする 〈行為〉<sub>2</sub> を表示する動詞語根である。よって A 3.3.13 により動詞語根 hr への IRT 生起が確立する。

<sup>115</sup> A 1.4.53 hrkror anyatarasyām // 「動詞語根 hr, kr が Ni を後続しない場合の 〈行為主体〉は、それらが Ni を後続する場合、任意に 〈目的〉という術語を得る」

<sup>116</sup> ARM 2.38d.

<sup>117</sup> AmK 3.3.27.

<sup>118</sup> MBh on A 1.4.32 kriyāgrahaṇam api kartavyam // 「〈行為〉(kriyā) という語もまた言及されるべきである」

cf. A 1.4.32 karmaṇā yam abhipraiti sa saṃpradānam // 「贈与行為の 〈目的〉によって 〈行為主体〉が自己に 〈行為参与者〉<sub>x</sub> を結びつける、或いは結びつけようと意図するその 〈行為参与者〉<sub>x</sub> は 〈受益者〉と呼ばれる」

cf. A 2.3.13 caturthī saṃpradāne // 「〈受益者〉が表示されるべきとき、第四格名詞接辞が起こる」

<sup>108</sup> Meghadūta 1.3 を見よ。

<sup>109</sup> AmK 3.3.232.

<sup>110</sup> この説明から、マッリナータもヤクシャが雲に語り始めるのは「シュラーヴァナ月の間近き時」、即ち「シュラーヴァナ月が到来した時」と考えていることが分かる。

<sup>111</sup> A 6.3.109 pṛṣodarādīni yathopadiṣṭam // 「pṛṣodara 群の語は教示された通りに受け入れるべし」

<sup>112</sup> おそらくルドラの辞典 Rudraśa からの引用だと考えられるが、現在の所その刊本は存在しない。Meghadūta 1.54 に対する注釈中でもマッリナータはルドラの言葉を引用している。

<sup>113</sup> AmK 1.6.7.

<sup>114</sup> A 3.3.13 Iṛṣeṣa ca // 「〈行為〉<sub>1</sub> を目的とする 〈行為〉<sub>2</sub> を表示する動詞語根が共起項目としてある場合もそうでない残余の場合も、未来時に属する 〈行為〉<sub>1</sub> という対象を表示する動詞語根の後に IRT 接辞が起こる」

想定している。近くなった時とは、本来の状態に戻った時という意味である。しかし同じ彼(ナータ)が示した、前者の読み(=「シュラーヴァナ月の間近き時」)の矛盾は、「アーシャーダ月の最初の日」(āśādhasya prathamadivase)というこの読みに対する疑惑にまさに答えることで<sup>119</sup>、我々が解決した<sup>120</sup>。

<sup>119</sup> *Meghadūta* 1.2 に対するマッリナータの注釈を見よ。

<sup>120</sup> ここでマッリナータがいうナータ (Nātha) とはダクシナーヴァルタナータ (Dakṣiṇāvartanātha) のことである。彼は当該詩節の問題箇所を *pratyāsanne manasi* と読んでおり、その読みについて次のように説明している。

Pradīpa on MD 1.4: *pratyāsanne prakṛtisthe manasi cetasi / dhyānavyākulite hr̥daye punaḥ pratiṣṭhite satīty arthaḥ / pratyāsanne nabhasi iti pāṭhe nabhaḥśabdāḥ śrāvāṇamāsavacanāḥ / nabhaḥ khaṃ śrāvāṇo nabhaḥ ity amarasiṃhvacanāt / tadā prastutam āśādhām vihāya vilambanam ayuktam iti mantavyam / kiñca śrāvāṇamāse māsān anyān gamaya caturo locane mīlayitvā iti vacanam syād ayuktam iti / anye tv āhuḥ—nabhaḥśabdo varṣartuvācakah / varṣāsamaye samāgate dayitājīvitāmbanārhām svapravṛtīm jīmūtena hārayiṣyann iti varṣāsamayāt prāg eva tasya cinteti / tad apy asaṅgam / ity utsukyād apariganayan guhyakas tam yayāce iti tātkālikakāryacintānirdeśāt / (「心が (manasi=cetasi) 近くなった時、即ち本来の状態に戻った時。考え事をして乱れていた心が再び正常になった時、という意味である。pratyāsanne nabhasi という読みの場合、nabhas という語はシュラーヴァナ月を表示している。「中性形の nabhas と kha は「空」を意味する」同義語であり、śrāvāṇa と男性形の nabhas は「シュラーヴァナ月」を意味する」同義語である」というアマラシンハの言葉に基づいて。その場合、[*Meghadūta* 1.2 で] アーシャーダ月のことが述べられたにもかかわらず、[一ヶ月近く時間が] 遅延するのは合理的でない、と考えねばならない。さらに [作品の時期が] シュラーヴァナ月だとすると、「貴方は残る四ヶ月を目を閉じて過ごせ」という言葉が合理的でなくなってしまう、と考えねばならない。一方他の者達は「nabhas という語は雨季を表示する。雨季が到来した時に、[ヤクシャは] 妻の命を支えるための自身の音信を雲に運ばせようとしていたから、まさに雨季の到来前にそれ(音信)を考えていた」と言う。それも間違いである。「ヤクシャはこのようにことを切望ゆえに深く考えず、それに頼んだ」というように、[ヤクシャは] なすべきこと (=音信) をすぐさま考えついたことが示されているから。)*

ダクシナーヴァルタナータは「シュラーヴァナ月の間近き時」(*pratyāsanne nabhasi*) という読みを認めていない。何故なら、もしアーシャーダ月の最初の日にヤクシャが雲を目にして、シュラーヴァナ月の間近き時、即ちアーシャーダ月の終わり頃に雲に語り始めるのだとすれば、ヤクシャは約一ヶ月近くも黙念としていたことになってしまうからである。またヤクシャが雲に語り始めるのがシュラーヴァナ月だとすれば、*Meghadūta* 2.47 のヤクシャの言葉と矛盾をきたす。マッリナータが *Meghadūta* 1.2

どうして彼(ヤクシャ)は生物が達成すべき事柄を無生物にさせようとするのか。

このような期待に対して詩人(カーリダーサ)は答える。

### 1.5. 煙、光、水、風が集積した雲というものと、鋭敏な感官を備えた生物が届けるべき音信というものとの間にはなんと大きな違いがあること

に対する注釈中で説明するように、アーシャーダ月の最後の日から計算するとヤクシャの呪いの期間が二十日不足してしまうのである。また「アーシャーダ月の最初の日に雲を目にしたヤクシャは、雨季が到来した時に、即ちシュラーヴァナ月が到来した時に雲に音信を依頼しようと思ひ、前もって音信を考えていた」という意見もダクシナーヴァルタナータによって退けられる。何故なら、ヤクシャはすぐさま音信を考えついたことが *Meghadūta* 1.5 で示されているからである。ダクシナーヴァルタナータはヤクシャの心が正常になるのに要した時間を述べていないが、常識的に考えて長くても二、三日であろう。よってダクシナーヴァルタナータによれば、アーシャーダ月の最初の日(ダクシナーヴァルタナータは *Meghadūta* 1.2 を「最初の日」(*prathamadivase*) で読んでいる)に雲を目にしたヤクシャが雲に語り始めるのは、遅くてもアーシャーダ月の初頭でなければならない。

ここで当該の問題に対するヴァツラバデーヴァ、ダクシナーヴァルタナータ、マッリナータの見解とその問題点をまとめておこう。

- ヴァツラバデーヴァのテキストと解釈によれば、ヤクシャが雲を目にしたのも雲に語り始めるのもアーシャーダ月の最後の日、即ちシュラーヴァナ月の間近き時である。この解釈の場合、屁理屈をこねずしてアーシャーダ月とシュラーヴァナ月の近接を確保でき、一ヶ月近くもヤクシャは黙然としていたという不合理にも落ち入らない。また、作品の主題である雨季 (*varṣā*) にも添うことができる。ただヤクシャが雲に語り始める時期がこの時期である以上、ヤクシャの呪いの期間は二十日不足する。
- ダクシナーヴァルタナータのテキストと解釈によれば、アーシャーダ月の最初の日に雲を目にしたヤクシャが雲に語り始めるのは、その当日もしくは遅くてもアーシャーダ月の初頭である。この解釈の場合でもヤクシャの呪いの期間が幾らか余分になってしまいが、ヴァツラバデーヴァの解釈に比べれるとその誤差は少ない。一ヶ月近くもヤクシャは黙然としていたという不合理にも落ち入らない。ただし、アーシャーダ月の最初の日、もしくはアーシャーダ月の初頭はインドの暦の上ではまだ夏 (*grīṣma*) であり、この解釈では作品の主題である雨季に添うことはできない。
- マッリナータのテキストと解釈によれば、ヤクシャが雲を目にしたのはアーシャーダ月の最初の日であり、実際に雲に語り始めるのはシュラーヴァナ月の間近き時、即ちアーシャーダ月の終わり頃である。この解釈の場合、ヤクシャが雲を目にする時期はまだ夏であるが、語り始めるのは雨季が始まる時期な

か! ヤクシャはこのようなことを切望ゆえに深く考えず、それ(雲)に頼んだ。実に、恋に病む者は本性として、生物と無生物を区別できない<sup>121</sup>。

dhūma 以下について。煙、光、水、風 (marut=vāyuh) が集積した (saṃnipātaḥ=samghātaḥ) 雲が一方にある。無生物だから[雲に]音信は適合しないという意味である。鋭敏な感官を備えた、即ち有能な感官を備えた[生物]。アマラは「karaṇa とは卓越した扶助者 (sādhakatama) のことであり<sup>122</sup>、また、耕地 (kṣetra)・身体 (gātra)・感官 (indriya) のことも意味する」と言う<sup>123</sup>。生物が (prāṇibhiḥ=cetanaiḥ)。アマラは「一方、prāṇin, cetana, janmin は同義語である」と言う<sup>124</sup>。届けることができる (prāpaṇīyāḥ=prāpayitavyāḥ)。送られるもの (saṃdiśyante) が saṃdeśa であり、それ(音信)というものが一方にある。

切望ゆえに、即ち望みの対象に心酔しているから、このように (iti=evam) [深く考えずに]。アマラは「utsuka は、望みの対象に心酔している (iṣṭārthodyukta) を意味する」と言う<sup>125</sup>。深く考えずに (aparigaṇayan=avicārayan) ヤクシャは (guhyakaḥ=yakṣaḥ) それに、即ち雲に頼んだ (yayāce=yācitavān)。動詞語根 yāc は依頼 (yācñā) を意味する<sup>126</sup>。

ので作品の主題に添うことができる。さらに、雲を見てから語り始めるまで一ヶ月の猶予があり、音信を計画し、その内容を吟味する時間も確保される。ただ常識的に考えて一ヶ月近くも黙念としているのは合理的ではない。またマッリナータの解釈の場合でも、結局ヤクシャが雲に語り始めるのはシュラヴァナ月の間近き時なので、ヤクシャの呪いの期間はヴァッラバデーヴァの場合と同じく二十日間不足する。

<sup>121</sup>MD 1.5: dhūmajyotiḥsalilamarutāṃ saṃnipātaḥ kva meghaḥ saṃdeśārthāḥ kva paṭukaraṇaiḥ prāṇibhiḥ prāpaṇīyāḥ / ity autsukyād aparigaṇayan guhyakas taṃ yayāce kāmārtā hi prakṛtikṛpaṇāś cetanācetanēṣu //

<sup>122</sup>A 1.4.42 sādhakatamaṃ karaṇam // 「〈行為〉の実現 (kriyāsiddhi) に対して、卓越した扶助者として意図される〈行為参与者〉(kāraṇa) は、〈手段〉という術語を得る」

<sup>123</sup>AmK 3.3.54.

<sup>124</sup>AmK 1.5.30.

<sup>125</sup>AmK 3.1.9.

<sup>126</sup>DhP 1.916.

即ち、恋に病む者達は (kāmārtāḥ=madanāturāḥ) 生物と無生物という対象を、本性として区別できない (prakṛtikṛpaṇāḥ=svabhāvadīnāḥ)。恋で盲目となった者達は、[音信を任せるに] 適した者とそうでない者に対する思慮を欠いているから、無生物に [音信を] 頼むことは矛盾しないという意味である。

ここで、雲と音信という不自然なものが組み合わせられているから、〈不調和〉(viśama) という修辞が使用されている。それは次のように言われる。

[原因と] 矛盾する結果が起こる場合、無意味なことが起こる場合、および二つの不自然なものが組み合わせられる場合、〈不調和〉という修辞があるだろう。それには三種ある<sup>127</sup>。

そしてそれ(〈不調和〉という修辞)は〈他事例提示〉(arthāntaranyāsa) に補助されている。まさにそれ(〈不調和〉という修辞)を確認するものとして、第四詩行でそれ(〈他事例提示〉)が提示されているから<sup>128</sup>。

さて次に、頼み事の有り様を述べる。

1.6. 貴方が世に名高きプシュカラ族とアーヴァルタカ族の家系の生まれであり、思うがまま姿を変えられ、インドラの重臣たることを私は知っている。それ故、運命のせいで妻と遠く離れて暮らす私は貴方に請う。卑賤なる者へ願い事をして望みが叶うぐらいなら、優れた美点を有する者への願い事が叶わない方がましだから<sup>129</sup>。

<sup>127</sup>PYBh, arthālamkāra, p. 426.1-2.

<sup>128</sup>abc 句で語られた事柄は d 句で語られる事柄により確認されているので、〈他事例提示〉(arthāntaranyāsa) という修辞が成立する。〈他事例提示〉の定義については Meghadūta 1.3, 1.8 に対するマッリナータの注釈を見よ。

<sup>129</sup>MD 1.6: jātaṃ vaṃśe bhuvanavidite puṣkarāvartakānāṃ jānāmi tvāṃ prakṛtipuruṣaṃ kāmārupaṃ maghonaḥ / tenārthitvaṃ tvayī vidhivaśād dūrabandhur gato 'haṃ yācñā moghā varam adhiguṇe nādhame labdhakāmā //

**jātam** 以下について。おお、雲よ。貴方は。世に名高い (bhuvaneṣu vidite) というのが **bhuvanavidite** である。niṣṭhā [という A 3.2.102] に基づいて、過去時制の意味で kṛt 接辞 Kta が起こる<sup>130</sup>。matibuddhi 云々 [という A 3.2.188] に基づき現在時制の意味になったとしても<sup>131</sup>、ktasya ca vartamāne [という A 2.3.67] に基づいて、bhuvana という語が第六格名詞接辞で終わる語として制限されるから、複合語にはなり得ない<sup>132</sup>。ktena ca pūjāyām [という A 2.2.12] に基づいて、[複合語形成は] 禁止されるから<sup>133</sup>。

プシュカラ族 (**puṣkara**) とアーヴァルタカ族 (**āvartaka**)、即ち雲達の中の或る最高の者達の家系に生まれた [雲]。高貴な家系に生まれた [雲] という意味である。思うがまま姿を変えられる (**kāmarūpam=icchādhīnavigraham**) [雲]。進み難い場所等も進むことができる [雲] という意味である。インドラの (**maghonaḥ=iन्द्रasya**) 大臣であることを、即ち重臣であることを私は知っている。

それ故、即ち貴方が支配力や高貴な生まれ等の美点を備えていることを理由として。運命のせいで、即ち運命に左右され。アマラは「vidhi は、行い (vidhāna)・運命 (daiva) を意味する」と言う<sup>134</sup>。ヴィシュヴァは「vaśa は、依拠 (āyatta)・願い (icchā)・支配力 (prabhutva) を意味する」と言う<sup>135</sup>。妻が遠方に住む者 (dūre bandhuḥ yasya saḥ) が **dūrabandhu** であり、即

ち妻と別離する私は貴方に請うにいたった。

懇願者が頼み事をする際、頼まれる側の卓越した美点はどんな場合に適合するのか。

このようなことを懸念して、運命のせいで頼み事が失敗した場合にも、まさに軽卒な過失はないという適合性があることを **yacñā** 云々と述べる。

即ち [以下が道理である]。優れた美点を有する (**adhiguṇe=adhikaguṇe**) 者に対する願い事が叶わない (**moghā=niṣphalā**) としても [それは] 僅かに好ましい (**varam=iṣatpriyam**)。与え手 (頼まれる側) が美点を豊富に備えているから好ましいのであり、願い事が叶わないから僅かに好ましい、ということが意図されている。卑賤なる者に、即ち美点の無い者に願い事をして、望みが叶った (**labdhakāmā=saphalā**) としても、[それは] 少しも好ましくない。好ましが僅かもないという意味である<sup>136</sup>。アマラは「vara は、[男性形で] 神からの恵み (devavṛta)、形容詞で優れている (śreṣṭha)、中性形で僅かに好ましい (manākpriya) を意味する」と言う<sup>137</sup>。

〈他事例提示〉(arthāntaranyāsa) に補助された〈お世辞〉(preyas) という修辭が使用されている。ダンディンは次のように言う。

〈お世辞〉とは非常に愛想の良い言葉である<sup>138</sup>。

<sup>130</sup> A 3.2.102 niṣṭhā // 「過去時制の意味で、動詞語根の後に niṣṭhā と呼ばれる接辞が起こる」

cf. A 1.1.26 ktaktavatū niṣṭhā // 「kṛt 接辞 Kta と KtavatU は niṣṭhā と呼ばれる」

<sup>131</sup> A 3.2.188 matibuddhipūjārthebhyas ca // 「願望・知識・尊敬を意味する動詞語根の後にも、現在時制の意味で kṛt 接辞 Kta が起こる」

<sup>132</sup> A 2.3.67 ktasya ca vartamāne // 「現在時制の意味で導入された kṛt 接辞 Kta で終わる項目と結びつく時にも、第六格名詞接辞が起こる」

<sup>133</sup> A 2.2.12 ktena ca pūjāyām // 「第六格名詞接辞で終わる項目は、願望 (mati)・知識 (buddhi)・尊敬 (pājā) の意味で導入された kṛt 接辞 Kta で終わる項目と複合語を形成しない」

cf. A 3.2.188 matibuddhipūjārthebhyas ca // 「願望・知識・尊敬を意味する動詞語根の後にも、現在時制の意味で kṛt 接辞 Kta が起こる」

<sup>134</sup> AmK 3.3.100.

<sup>135</sup> ViP, śadvika lab.

<sup>136</sup> この理屈に従えば、願い事や頼み事をする際には次のような優劣関係が確立されることになる。1. 優れた美点を有する者にした願い事が叶う → 2. 優れた美点を有する者へした願い事が叶わない → 3. 卑賤なる者へした願い事が叶う → 4. 卑賤なる者へした願い事が叶わない。

<sup>137</sup> AmK 3.3.173. なお、ヴァツラバデーヴァが説明するように当該詩節の varam は副詞である。

<sup>138</sup> KĀ 2.275. ヴァツラバデーヴァも当該詩節をヤクシャから雲へのお世辞 (cātu) を描いたものとして理解している。音信の運搬を引き受けてもらうため、ヤクシャは雲に気に入られようとお世辞を述べるのである。ダンディンは *Kāvyaḍarsā* 2.275-279 で具体例 (udāharaṇa) を挙げながら 'preyas' という修辭について論じている。注釈書 *Prabhā* に従えば、相手に喜びをもたらすものと自身の喜びや愛情を示すもの、そのどちらも 'preyas' と呼ばれる。ここでは、*Meghadūta* の物語の流れ及びヴァツラバデーヴァの注釈を考慮して前者の意味で理解し、'preyas' を〈お世辞〉と訳す。cf. *Prabhā on KĀ* 2.275: teṣu priyataram bhāvābhivyaktyā boddhavyasya

と。最初の三詩行において、これ(〈お世辞〉)は第四詩行で使用される〈他事例提示〉に支えられている。このことは極めて明らかである<sup>139</sup>。

1.7. 水を与える者よ、貴方は苦しむ者達の守護者なのだから、富の神(クペーラ)の怒りで別離させられた私の音信を妻の下へ運んでほしい。ヤクシャ達の御主のアラカーと呼ばれる神都へ貴方は行かねばならぬ。外苑にいるシヴァの頭上で輝く月光に清められた宮殿がある〔神都へ〕<sup>140</sup>。

saṃtaptānām 以下について。おお、水を与える者よ、貴方は苦しむ者達の、即ち熱さ、あるいは旅の別離に苦しむ者達の〔守護者である〕。アマラは「saṃtāpa と saṃjvara は同義語である」と言う<sup>141</sup>。守護者、即ち水を与えるから、貴方は熱さに苦しむ者達の守護者であり、また帰郷を急ぎ立てるから旅人達の守護者である。アマラは「śaraṇa は家 (gṛha) と守護者 (rakṣitr) を意味する」と言う<sup>142</sup>。それ故 (tat=tasmāt kāraṇād)、富の神の、即ちクペーラの怒りで別離させられた、即ち妻と別離させられた私の (me=mama) 音信を (saṃdeśam=vārtām) 妻の下へ運んでほしい。妻の下へ運んでほしい (priyām prati naya) という意味である。関係一般を表示する第六格名詞接辞が起こっている<sup>143</sup>。貴方は音信を

prītyaśayakaram vaktur vā prītyādhiyasūcakam ākhyānam preyaḥ preyonāmālamkārah / (「それらの内、非常に喜ばしい、即ち感情を露にすることで知覚対象に卓越した喜びをもたらす言葉が、あるいは感情を露にすることで話者の多大な喜びを示す言葉が preyas, 即ち preyas と呼ばれる修辞である。)」

<sup>139</sup>abc 句で語られた事柄は d 句で語られる事柄により確証されているので、〈他事例提示〉(arthāntaranyāsa) という修辞が成立する。なお、〈他事例提示〉の定義については Meghadūta 1.3, 1.8 に対するマツリナータの注釈を見よ。

<sup>140</sup>MD 1.7: saṃtaptānām tvam asi śaraṇam tat payoda priyāyāḥ saṃdeśam me hara dhanapatikrodhaviśleṣitasya / gantavyā te vasatir alakā nāma yakṣeśvarāṇām bāhyodyānasthitaharaśiraścandrikādhautaharmyā

<sup>141</sup>AmK 1.1.57.

<sup>142</sup>AmK 3.3.53.

<sup>143</sup>A 2.3.50 saṣṭhī śeṣe // 「〈残余〉(目的) (karman) 等や〈名詞語基〉の意味 (prātipadikārtha) とは異なる、所有関係 (svasvāmibhāva) 等の関係 (sambandha) が表示されるべきとき、第六格名詞接辞が起こる」

運んで我々の苦痛を取り去ってほしい、という意味である。

どの場所に彼女(妻)はいるのか、あるいは彼女がいる場所の特徴は何か。

それに対して gantavyā 云々と述べる。外側に生じるもの (bahirbhava) が bāhya である。「bahis, deva, pañcājana の後にも taddhita 接辞Ñya が起こる」[という Vārtika の規定]に基づいて taddhita 接辞Ñya が起こる<sup>144</sup>。外苑にいるシヴァの頭上で輝く月光に清められた、即ち汚れがなくなった宮殿、即ち財ある者達の大邸宅がある場所がそのように言われる。アマラは「財ある者達の住居は harmya 等と呼ばれる」と言う<sup>145</sup>。この表現により、〔神都アラカーの〕特徴が述べられている。アラカーと呼ばれる、即ちアラカーという名で周知の、ヤクシャ達の御主の住居へ (vasatīḥ=ssthānam) 貴方は (te=tava) 行かねばならぬ<sup>146</sup>。貴方は行かね

<sup>144</sup>この Vārtika は Mahābhāṣya には含まれていないが Kāśikāvṛtti 中で引用されている。Mahābhāṣya が記録していない Vārtika を Kāśikāvṛtti が記録している場合がしばしばあるが、これもその一例である。KV on A 4.3.58: gambhīraśabdād nīyaḥ pratyayo bhavati tatra bhavaḥ ity etasmin viṣaye / aṅo 'pavādah / gambhīre bhavaṃ gāmbhīryam / bahirdevapañcājanebhyas ceti vaktavyam / bāhyam / daivyam / pañcājanyam / (「gambhīra という語の後に、「そこに生じる」という意味で taddhita 接辞Ñya が起こる。[本規則は] taddhita 接辞 aN [の導入を規定する規則] に対する例外規則である。深いものに生じるもの (gambhīre bhavam) が gāmbhīrya である。「bahis, deva, pañcājana の後にも taddhita 接辞Ñya が起こる」と定式化されるべきである。【例】 bāhya, daivya, pañcājanya.)

cf. A 4.3.58 gambhīrañ nīyah // 「gambhīra という語の後に、「そこに生じる」という意味で taddhita 接辞Ñya が起こる」

<sup>145</sup>AmK 2.2.9.

<sup>146</sup>yakṣeśvarāṇām という複合語解釈とこの複数形 (bahuvacana) が何を意味するかについては、マツリナータとヴァツラバデーヴァは説明してくれない。プールナサラスヴァティーとパラメーシュヴァラ (Parameśvara, 15 世紀後半) は、yakṣeśvarāṇām という複数形によって、ヤクシャ達の主クペーラと彼に付き添う兄弟マニバドラ (Mañibhadra) 等のことが示されると説明する。VL on MD 1.7: yakṣeśvarāṇām vaiśvaṇasya tadanuvartinām ca mañibhadrādīnām vasatīḥ / (「ヤクシャの主達の、即ちクペーラと彼に付き添うマニバドラ等の住居」) SM on MD 1.7: mañibhadrādīn upānteśvarān apekṣya bahuvacanaprayogaḥ / (「[クペーラの] そばにいるマニバドラ等といった主達を期待して、複数形が使用されている」)

マハーラーヂュ (Mahārāj) は yakṣeśvarāṇām を mahāyākṣāṇām と言い換えていることから (Kātyāyanī on MD 7)、この複合語を karmadhāraya として理解している。

ばならぬ (tvayā gantavyā) という意味である。krtyānām kartari vā [という A 2.3.71] に基づいて第六格名詞接辞が起こる<sup>147</sup>。

私のために貴方が出発すれば旅人の妻達の心は必ず安らぐ、ということ述べる。

1.8. 旅人の妻達は [夫の帰郷を] 信じて心安らぎながら、巻き毛の先を掻き揚げ、風道 (空) を昇る貴方を見上げるだろう。貴方の仕度ができた時、別離に悲しむ妻を他の誰が見捨てようか。その人が私のように行動を他に支配された者でないならば<sup>148</sup>。

tvām 以下について。風道を、即ち空を昇る貴方を。道を行く者達 (panthānaṃ gacchanti) が pathikāḥ である。pathaḥ śkan [という A 5.1.75] に基づいて、taddhita 接辞 ŚkaN が起こる<sup>149</sup>。彼ら (旅人達) の妻達は、即ち夫が旅立った女達は<sup>150</sup>。信じて、即ち夫の帰郷を信じて。アマラは「pratyaya は、依存する (adhīna) ・誓い

一方、スマティヴィジャヤは yakṣeśvarāṇām という複数形をクペーラに対する尊敬 (guru) の意味で理解しており (SGAV on MD 7)、木村 [1965: 222] と同様に筆者もその解釈に従った。

<sup>147</sup> A 2.3.71 krtyānām kartari vā // 「krtya と呼ばれる krt 接辞で終わる項目と結びつくとき、〈行為主体〉を表示する第六格名詞接辞が任意に起こる」

cf. A 3.1.96 tavyattavyāniyarah // 「動詞語根の後に tavyaT, tavya, anīyaR が起こる。これらの接辞は krtya と呼ばれる」

<sup>148</sup> MD 1.8: tvām āruḍhaṃ pavanapadavīm udgrhītālākāntāḥ prekṣisyante pathikavanitāḥ pratyayād āśvasatyāḥ kaḥ samnaddhe virahavidhurāṃ tvayy upekṣeta jāyāṃ na syād anyo 'py aham iva jano yaḥ parādhīnavrttiḥ //

<sup>149</sup> A 5.1.75 pathaḥ śkan // 「第二格名詞接辞で終わる pathin という語の後に、「行く者」という意味で taddhita 接辞 ŚkaN が起こる」

<sup>150</sup> 〈夫が旅立った女〉(proṣitabhartṛkā) は、文学作品中で扱われる女主人公 (nāyikā) の一種として古くは Nāyaśāstra に挙げられている。

NŚ 24.218: gurukāryāntaravaśād asyā viproṣitāḥ priyah /  
sā rūḍhālākakeśāntā bhavet proṣitabhartṛkā //

或る大変な仕事 (あるいは義務) のために夫が他国で暮らしており、巻き毛の先が伸びた女性は、〈夫が旅立った女〉であろう。

なお、〈夫が旅立った女〉が各文学理論書でどのように定義されるかについては上村 [1990a] に詳しい。

(śapatha) ・知識 (jñāna) ・信頼 (viśvāsa) ・原因 (hetu) を意味する」と言う<sup>151</sup>。心安らぎながら (āśvasatyāḥ=viśvasitāḥ)。ŚatR で終わる動詞語根śvas の後に、ugitāś ca [という A 4.1.6] に基づいてNīP 接辞が起こっている<sup>152</sup>。さらに、巻き毛の先を掻き揚げて、即ち視界を広げるため掻き揚げ、巻き毛の先を支えながら見上げるだろう。多大な切望を持って見るだろう、という意味である。

どうして私 (雲) が到来することで旅人達は帰ってくるのか。

これに対して述べる。即ち [以下が道理である]。貴方の仕度ができた時、即ち従事する時、別離に苦しむ、即ち自立できない妻を誰が見捨てられようか。誰も [見捨てることはできない] という意味である。他の者も、即ち私以外の者も、もし私のように行動を他に支配された者、即ち命を他に預けた者でないならば [見捨てることはできない]。一方、自立した者は誰も [妻を] 見捨てることはできない、ということが意図されている<sup>153</sup>。

〈他事例提示〉(arthāntaranyāsa) という修辭が使用されている。次のように言われる、

因果 [関係] あるいは一般と特殊 [の

<sup>151</sup> AmK 3.3.147.

<sup>152</sup> A 4.1.6 ugitāś ca // 「uK (u, ṛ, l) を IT とする接辞で終わる項目の後にも、女性形でNīP 接辞が起こる」

cf. A 3.2.124 laṭaḥ śatṛśānacāv aprathamāsamānādhikaraṇe // 「IAT が第一格名詞接辞以外の名詞接辞で終わる項目と指示対象を同じくする場合、IAT に ŚatR と ŚānaC が代置される」

ヴァッラバデーヴァのテキストでは 'āśvasatyāḥ' ではなく 'āśvasantyaḥ' となっており、Kale [1987: 20] は、付加辞 (āgama) nUM をとったその 'āśvasantyaḥ' という語形は文法的に間違っていると指摘している。動詞語根śvas は第二類 (adādi) に属する動詞語根として Dhātupāṭha 中に挙げられているが (DhP 2.60)、Maurer [1965b: 34] は、動詞語根śvas が第一類 (bhūvādi) の動詞語根と同様の活用をしている例は文学作品中には豊富に見られるとして、Kale [1987: 20] の説明を退けている。なお、ヴァッラバデーヴァとマッリナータは両者ともこの問題については触れていない。

<sup>153</sup> 雨季の到来を告げる雨雲は、旅人を帰郷へと駆り立て、その妻達には夫の帰郷を確信させて安堵をもたらす。そして妻の下へ帰り着いた夫は幸せに雨季を過ごす。だがクペーラの呪いに縛られ、一年間の追放を命じられているヤクシャは、妻の下へ帰りたくても帰れないのである。

関係] が相互に [主題を] 確証する場合、それは〈他事例提示〉と呼ばれる<sup>154</sup>。

という定義に基づいて。

貴方 (雲) にとっての吉兆も見られることを述べる。

1.9. 順風がとても緩やかに貴方を運ぶ。左側ではこの誇り高きチャータカ鳥が甘く鳴く。そして、懐妊の喜びが習慣付いているため雌バラカ鳥は空に列をなし、目を魅する貴殿に必ずや付き添うだろう<sup>155</sup>。

**mandam mandam** 以下について。順風が (**pavanah**=vāyuh) 貴方をとても穏やかに [押す]。とても緩やかに (**atimandam**) [押す] という意味である。ここで、他ならぬ普及 (**vīpsā**) の意味で反復表現 (**dvirukti**) が何とか達成され得る<sup>156</sup>。一方、**prakāre guṇavacanasya** [という A 8.1.12] に依拠する場合、**karmadhāraya** 同様に扱われて名詞接辞にゼロが代置され、**mandamandam** となってしまうだろう<sup>157</sup>。同じそのこと

<sup>154</sup>PYBh, arthālamkāra, p. 449.8-9.

<sup>155</sup>MD 1.9: mandam mandam nudati pavanaś cānukūlo yathā tvāṃ vāmaś cāyaṃ nadati madhuraṃ cātakas te sagandhaḥ / garbhāhānaśaṅaparicayān nūnam ābaddhamālāḥ seviṣyante nayanāsubhagaṃ khe bhavantaṃ balākāḥ //

Nandargikar[1979: 11] によれば、いくつかの写本では当該の *Meghadūta* 1.9 と次の *Meghadūta* 1.10 の順序が入れ替わっている。両詩節の順序の問題については Nandargikar[1979: 11-12] 及び Kale[1987: 21] を参照されたい。

<sup>156</sup>cf. A 8.1.4 nityavīpsayoḥ // 「行為の反復 (nitya)、もしくは行為が属性による物事の普及 (vīpsā) を表示するため、反復表現が起こる」

<sup>157</sup>A 8.1.12 prakāre guṇavacanasya // 「属性間の類似性が表示されるべき時、属性表示語 (guṇavacana) の反復表現が起こる。そしてそれは **karmadhāraya** 同様に扱われる」

cf. A 1.2.46 kṛttaddhitasamāsāś ca // 「kṛt 接辞で終わる項目、taddhita 接辞で終わる項目及び複合語も〈名詞語基〉 (prātipadika) と呼ばれる」

cf. A 2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ // 「〈動詞語根〉という術語で呼ばれるものと〈名詞語基〉という術語で呼ばれるものの内部に含まれる名詞接辞にゼロが代置される」

cf. A 8.1.11 karmadhārayavad uttareṣu // 「この先、反復表現 (dvirvacana) には **karmadhāraya** 同様の文法操作が起こると理解すべし」

をヴァーマナ (Vāmana) は「mandam mandam というこの表現は、類似性 (prakāra) を意味しない場合に反復表現 (dvirbhāva) となる」と述べている<sup>158</sup>。類似して (**yathā**=sadrśam)。未来の結果にふさわしく、という意味である。ヤーダヴァ (Yādava) は「yathā は、類似性 (sadrśya)・適合性 (yogyatva)・普及 (vīpsā)・ありのまま (svārtha)・超えないこと (anatikrama) を意味する」と言う<sup>159</sup>。押しやる (**nudati**=prerayati)。

誇り高き (**sagandhaḥ**=sagarvaḥ) この [チャータカ鳥]。親族である (**saṃbandhī**) [チャータカ鳥] と或る人達は説明する。ヴィシュヴァは「**gandha** は、イオウ (**gandhaka**)・香料 (**āmoda**)・少量 (**leśa**)・親族 (**saṃbandha**)・誇り (**garva**) を意味する」というように、どちらについても述べている<sup>160</sup>。貴方の (**te**=tava) 左側にいる (**vāmaḥ**=vāmabhāgasthaḥ) [チャータカ鳥]。Śabdārṇava には「一方 **vāma** は、曲がった (**vakra**)・魅力的な (**ramya**) を意味し、また左 (**savya**)・左側にある (**vāmagata**) も意味

<sup>158</sup>ヴァーマナ (Vāmana, 8世紀) は *Kāvyālamkārasūtra* とその *Vṛtti* の中でマツリナータと全く同様の議論を展開している。A 8.1.4 に依拠し、**mandam mandam** という反復表現を普及 (vīpsā) の意味で解釈すれば、この形は正当化させる。一方、この反復表現を A 8.1.12 に依拠して属性間の類似 (prakāra) の意味で解釈する場合には、A 8.1.11 に基づき、それは **karmadhāraya** 同様に扱われて名詞接辞にはゼロが代置されるので、**mandamandam** という形にならなければならない。よって、当該の **mandam mandam** という反復表現が表示する意味は、属性間の類似ではなく普及であると解釈される。

KAS 5.2.87: mandam mandam ity aprakārārthe //

mandam mandam という表現は、類似性を意味しない場合に起こる。

KASV on KAS 5.2.87: mandam mandam nudati pavana ity atra mandam mandam ity aprakārārthe sati bhavati / prakārārthatve tu prakāre guṇavacanasyeti dvirvacane kṛte karmadhārayavadbhāve mandamandam iti prayogaḥ / mandam mandam ity atra tu nityavīpsāyō iti dvirvacanam / (『風がとても緩やかに運ぶ』 (mandam mandam nudati pavanah) というこの mandam mandam という表現は、類似性を意味しない場合に起こる。一方、類似性を意味する場合、prakāre guṇavacanasya [という A 8.1.12] に基づいて、反復表現 (dvirvacana) がなされた時には **karmadhāraya** 同様に扱われ、**mandamandam** という表現が使用される。しかし **mandam mandam** というこの箇所では、nityavīpsāyōḥ [という A 8.1.4] に基づいて反復表現となっている) )

<sup>159</sup>Vaijayantī, śeṣakāṇḍa, anekārthavyādhya 27cd.

<sup>160</sup>ViP, dhadvika 8ab.

するだろう」とある。チャータカ鳥 (*cātaka*) は、即ちある種の鳥は、甘く、即ち心地よく鳴く (*nadati=vyāharati*)。

この二つの前兆が起こる。さらに別の前兆が起こるだろうということを *garbha* 云々と述べる。

子、即ち子宮にいる生き物。ヤーダヴァは「実に、*garbha* は産屋 (*apavaraka*)・炎 (*agni*)・子 (*suta*)・ジャックフルーツの棘 (*panasakaṅṭaka*)・子宮 (*kakṣi*)・子宮にいる生き物 (*kakṣisthajantu*) を意味する」と言う<sup>161</sup>。それ(子)の授かり、即ち誕生という喜び (*kṣaṇaḥ=utsavaḥ*)。[子を授かることは] 幸福の原因だから、ということが意図されている。アマラは「*kṣaṇa* は、することがない状態 (*nirvyāpārasthiti*)・時間の一種 (*kālavīṣeṣa*)・喜び (*utsava*) を意味する」と言う<sup>162</sup>。それ(懐妊の喜び)の繰り返しを原因として (*paricayāt=abhyāsāt hetoḥ*)、空に (*khe=vyomni*) 列をなした[雌バラカ鳥]。子の授かりという幸福を得るために、貴方の傍らで列をなした[雌バラカ鳥]という意味である。そして *Karṇodaya* では次のように言われる<sup>163</sup>。

雌バラカ鳥 (*balākā*) は、天空で周囲に列をなして雲に付き添うことで子を授かる。

と。雌バラカ鳥は (*balākāḥ=balākāṅganāḥ*) 目を魅する (*nayanasubhagam=dr̥ṣṭipriyam*) 貴殿に必ずや (*nūnam=satyam*) 付き添うだろう。

順風とチャータカ鳥の鳴き声と雌バラカ鳥を見ることが吉祥を示唆することは古い論書に見られるから、煩を恐れて説明は省いた<sup>164</sup>。

<sup>161</sup> *Vaijayantī*, *dvyakṣarakāṇḍa*, *puṁliṅgādhyāya* 21cd-22a.

<sup>162</sup> *AmK* 3.3.47.

<sup>163</sup> *Karṇodaya* という作品は、マッリナータが当該詩節に対する注釈中で引用することからその名が知られるのみで、その詳細は不明である。

<sup>164</sup> ヴァラーハミヒラ (*Varāhamihira*, 6世紀前半) の *Brhatsamhitā* には次のような記述が見られる。

BS 24.17: *taḍiddhaimakakṣyair balākāgrada-  
ntaiḥ  
sraadvāridānaiś calatprāntahastaiḥ /*

そして彼女の死、あるいは彼女が誓戒からはずれることで貴方の努力が無駄になることはない、ということを述べる。

1.10. そして貴方は旅路を遮られることなく、日数の計算に明け暮れて生きながらえる、兄弟(私)の貞節な妻たる彼女を必ずや目にするだろう。概して希望という絆は、愛情深く、別離の間に突然沈んでしまう花の如き女達の命を支えるのだ<sup>165</sup>。

*tām ca* 以下について。おお、雲よ。日数の、即ち残りの日数の計算に (*gaṇanāyām=samkhyāne*) 明け暮れる (*tatparām=āsaktām*) [彼女]。アマラは「*prasita* と *āsakta* は明け暮れる (*tatpara*) を意味する」と言う<sup>166</sup>。まさにこれ故に、生きながらえる (*avyāpannam=amṛtam*) [彼女]。呪いが終わった時の私の帰郷に対する希望をもって生きている [彼女]、という意味である。一人の夫を持つ女性 (*ekāḥ patiḥ yasyāḥ sā*) が *ekapatnī* であり、彼女を。貞節な [彼女] という意味である。 *nityam sapatnyādiṣu* [という A 4.1.35] に基づいて、*NīP* 接辞が起こり

*vicitrendracāpadhvajocchrāyaśobhais  
tamālālinīlair vṛtam cābdanāgaiḥ //*

また、雷光という黄金の腹帯を着け、バラカ鳥を前にある牙とし、流れ出る雨水をマダ液とし、揺れ動く先端を鼻とし、色彩豊かな虹という輝く旗を掲げ、タマラ樹と蜜蜂の如く黒い雲という象に覆われた [空は雨をもたらず]。

BS 24.19: *saśikhicātakadarduraniḥsvanair  
yadi vimiśritamandrapaṭusvanāḥ /  
kham avatatyā digantavilambināḥ  
saliladāḥ salilaughamucaḥ kṣitau //*

孔雀、チャータカ鳥、蛙の鳴き声と混ざった甘く巧みな音を轟かせ、空を覆い、地平に垂れ下がる時、雲々は大地に一群の水を放つ。

なお、風に関する吉凶については *Brhatsamhitā* 中の至る所で語られている。

<sup>165</sup> MD 1.10: *tām cāvāśyaṃ divasagaṇanātatparām eka-  
patnīm avyāpannām avihaṭagatir drakṣyasi bhrātrjāyām  
/ āśābandhaḥ kusumasadr̥śaṃ prāyaśo hy aṅganānām  
sadyaḥpāti praṇayi hr̥dayaṃ viprayoge ruṇaddhi //*

<sup>166</sup> *AmK* 3.1.9.

n 音が代置される<sup>167</sup>。兄弟の、即ち私の妻を (bhrātuḥ me jāyām) というのが **bhrātrjāyām** である。兄弟 [を見るのと] 同様、恐れることなく見ることのできる [彼女]、ということが意図されている<sup>168</sup>。彼女を、即ち我が妻を貴方は進行を遮られることなく (**avihatagatiḥ**=**avicchinagatiḥ**)、必ずや目にするだろう (**avaśyam drakṣyasi**=**ālokayīṣyasa eva**)<sup>169</sup>。

即ち [以下が道理である]。āsā とは多大な渴愛のことである。ヤーダヴァは「āsā は方位 (diś) と多大な渴愛 (atitrṣṇā) を意味する」と言う<sup>170</sup>。結びつける手段が **bandha** であり、絆のことである。ようするに主軸のことである。希望という絆 (āśaiva bandhaḥ) が **āsābandha** であり、[支える] 〈行為主体〉 (karṭṛ) である。愛のある (**praṇayi**=**premayuktam**) [命]。まさにこれ故に花のような [命]。とても繊細な [命] という意味である。まさにこれ故に、別離の間に (**viprayoge**=**virahe**) 突然沈んでしまいやすい (**sadyaḥpāti**=**sadyobhramśanaśīlam**)、女達の命を (**hr̥dayam**=**jīvitam**)。Śabdārṇava には「hr̥daya は、命 (jīvita)・心 (citta)・胸 (vakṣas)・意図 (ākūta)・愛 (hr̥dya)<sup>171</sup>を意味する」とある。概して (**prāyaśaḥ**=**prāyeṇa**) 支える、即ち繋ぎ止める。〈他事例提示〉 (arthāntaranyāsa) が使用されている<sup>172</sup>。

さて次に、豊富な旅仲間にも恵まれることを述べる<sup>173</sup>。

<sup>167</sup>A 4.1.35 nityam sapatnyādiṣu // 「sapatnī群に含まれ、NīP 接辞を後続する pati の最終音に、必ず n 音が代置される」

<sup>168</sup>Ā, N は mātrvan (母 [を見るのと] 同様) となっているが、文脈に合わないので K のテキストに従う。

<sup>169</sup>当該詩節の ca は、ヴァツラバデーヴァの説明に従って接続 (samuccaya) の意味で理解した。

<sup>170</sup>Vaijayantī, dvyakṣarakāṇḍa, strīlingādhya 3b.

<sup>171</sup>N では ākūtaḥ となっているが、意味が通じず韻律も合わないため誤植であろう。Ā のテキスト ākūtaḥr̥dayaḥ に従う。

<sup>172</sup>ab 句で語られた事柄は cd 句で語られる事柄により確証されているので、〈他事例提示〉 (arthāntaranyāsa) という修辞が成立する。なお〈他事例提示〉の定義については Meghadūta 1.3, 1.8 に対するマツリナータの注釈を見よ。

<sup>173</sup>sahāyasampatti を「旅仲間の完全性」という意味で解釈

1.11. マーナサ湖を切望する水鳥達は、耳に心地よく、カンダリーの花を満たして大地を豊かにする貴方の雷鳴を聞きつけて、蓮茎の芽の小片を食糧とし、カイラーサまで貴殿の空の旅仲間となろう<sup>174</sup>。

**karutum** 以下について。〈行為主体〉 (karṭṛ) である或る雷鳴は大地にシリンドウラ (**śilīndhra**) を、即ちカンダリーの花を満たす [ことができる]。Śabdārṇava には「そして śilīndhrā<sup>175</sup> はカンダリーの花 (kandalī) を意味するだろう」とある。まさにこれ故に、[大地を] 実りあるもの (**avandhyām**=**saphalām**) とすることができる (**prabhavati**=**śaknoti**)。シリンドウラは将来穀物が豊かに実ることを示唆するから、という考えが意図されている。そのことは *Nimittanidāna* で次のように言われる<sup>176</sup>。

黒雲と結びついて生じたシリンドウラは、大地の豊かな実りを物語る。

と。その、耳に心地よい (**śravaṇasubhagam**=**śrotrasukham**) [雷鳴]。「世間の人々にとって」 (lokasya) と補うべし。貴方の (**te**=**tava**) 雷鳴を聞きつけて、マーナサ湖を切望する (**mānasotkāḥ**=**mānase sarasy unmanasaḥ**) [水鳥達は]。ようするに熱望する [水鳥達] という意味である。utka unmanāḥ [という A 5.2.80] に基づいて [utka は] 不規則形 (nipāta) なので正しい語である<sup>177</sup>。他の時期

すれば、当該詩節を、目的地カイラーサまで (**ā kailāsāt**) 付き添ってくれる旅仲間のことを語る詩節としても理解できる。Meghadūta 1.9 でも雌バラカ鳥が雲に付き添うことが語られているが、彼女らがどこまで付き添ってくれるかは語られていない。

<sup>174</sup>MD 1.11: kartuṃ yac ca prabhavati mahīm ucchilīndhrām avandhyām tac chrutvā te śravaṇasubhagam garjitaṃ mānasotkāḥ / ā kailāsād bisakīsalayacchedapātheyavantaḥ sampatsyante nabhasi bhavato rājahamśāḥ sahāyāḥ //

<sup>175</sup>śilīndrā という語形は、筆者が調べた限りでは辞書や文献中には見つけられない。Ā では śilīndraḥ となっている。

<sup>176</sup>マツリナータは Meghadūta 1.11, 1.17, 2.32, 2.33 に対する注釈中でこの作品を引用しているが、その詳細は不明である。

<sup>177</sup>A 5.2.80 utka unmanāḥ // 「utka は「切望する」を意味する不規則形である」

にはマーナサ湖は雪に害されており、ハンサ達にとって雪は病気の原因であるから別の場所に行っていたハンサ達は、みな雨季になると再び他ならぬマーナサ湖へ行く。このことは周知である。

蓮の茎の芽の、即ち蓮の茎の繊維の先端の小片ゆえに (**chedaiḥ=śakalaiḥ**) [旅の食糧を持つ]<sup>178</sup>。 **pātheyavantah** について。旅に相応しいもの (**pathi sādhu**) が **patheya** であり、旅の食料のことである。 **pathin, atithi, vasati, svapati** の後に **taddhita** 接辞 **dhañ** が起こる<sup>179</sup>。それ(旅の食糧)を持つ [水鳥達]。蓮の茎の繊維の先端の小片ゆえに旅の食糧を持つ [水鳥達] という意味である。ラージャハンサ (**rājahamsa**) 達は、即ち或る種のハンサ鳥達は。アマラは「一方、赤い嘴と足を特徴とし、白い [体をしている] のがラージャハンサである」と言う<sup>180</sup>。空で (**nabhasi=vyomni**) 貴殿の (**bhavataḥ=tava**)、カイラーサまでの (**ā kailāsāt=kailāsaparyantam**) [旅仲間となろう]。そして、これ (**ā kailāsāt**) は二語である<sup>181</sup>。旅仲間と (**sahāyāḥ=sayātrāḥ**)。 *Śabdārṇava* には「一方、 **sahāya** と **sayātra** は同義

<sup>178</sup> この具格は同伴・付随や様相・特徴を表すものとしても理解できなくはないが、当該箇所に対するヴァッラバデーヴァの注釈を考慮すれば、原因・理由を表す具格として理解するのが最も妥当である。

<sup>179</sup> A 4.4.104 **pathyatithivasatisvapater dhañ** // 「**pathin, atithi, vasati, svapati** という語の後に、「x に精通している」 (**pravīṇa**) ・「x に相応しい」 (**yogya**) という意味で、**taddhita** 接辞 **dhañ** が起こる」

cf. A 4.4.98: **tatra sādhuḥ** // 「第七格名詞接辞で終わる項目の後に、「x に精通している」 (**pravīṇa**) ・「x に相応しい」 (**yogya**) という意味で、**taddhita** 接辞 **yaT** が起こる」

<sup>180</sup> AmK 2.5.24. *Amarakośa* の注釈家リンガヤスーリ (**Liṅgayasūri**) とマッリナータ (**Mallinātha**) は、当該箇所をそれぞれ次のように説明している。APV on 2.5.24ab: **hamsesu śreṣṭhatvād rājahamsaḥ / raktacāñcupādasya śvetadehasya hamsasya nāma** / (「ハンサ鳥の中でも卓越した存在であるから **rājahamsa** と言われる。 [**rājahamsa** とは] 嘴と足が赤く、体は白いハンサ鳥の名である。)」) APP on 2.5.24ab: **raktacāñcucaranaviśiṣṭās taditarāṅgadhavalā rājahamsā ity ucyante** / (「赤い嘴と足を特徴とし、それ以外の部分は白色をしているのがラージャハンサだと言われる」)

<sup>181</sup> cf. A 2.1.13 **ān maryaḍābhividhyoḥ** // 「始点と終点の限界を示す時、**ān** は、意味の繋がりのある第五格名詞接辞で終わる項目と任意に複合語を形成し、その複合語は **avyayībhava** と呼ばれる」

A 2.1.13 が規定する複合語形成は任意なので、**ā kailāsāt, ākailāsāt** の両形がありうるが、マッリナータは **ā kailāsāt** で読んでいる。

語であろう」とある。なるだろう (**sampatsyante=bhaviṣyanti**)。

1.12. 貴方の親友であり、斜面には人々が崇拜を惜しまぬラグ家の主(ラーマ)の足の跡が残るその高山を抱いて、別れを告げよ。雨季の度に貴殿と出会い、長き別れを思って熱い涙を流し、愛情を顕にする彼に<sup>182</sup>。

**āpṛcchvasva** 以下について。親愛なる友を (**priyaṃ sakhāyam**) が **priyasakham** である。**rājāhaṣsakhibhyaḥ ṭac** [という A 5.4.91] に基づいて、複合語の最終要素である接辞 **ṭaC** が起こる<sup>183</sup>。高く (**tuṅgam=unnatam**)、人々が崇拜を惜しまぬ (**pumśam vandyaiḥ=narārādhaniyaiḥ**)、ラグ家 (**Raghu**) の主の足で、即ちラーマの足の動きで山の斜面に (**mekhalāsu=katakeṣu**) [印が付けられた山]。ヤーダヴァは「さて次に **mekhalā** は、臀部 (**śroniṣṭhāna**) ・山の斜面 (**adrikaṭaka**) ・腰帯 (**kaṭibandha**) ・象の腹帯 (**ibhabandha**) を意味する」と言う<sup>184</sup>。印が付けられた (**añkitam=cihñitam**) [山]。以上のように、[雲の] 友であること・偉大さ・神聖さに基づいて、尊敬に値する [山]。その山を、即ちチトラクータ山を抱いて別れを告げよ、即ち「聖者よ、我は行く」と別れを告げて敬意を払うのだ。アマラは「**āpṛcchana** は、別れを告げること (**āmantraṇa**) と敬意を払うこと (**sabhājana**) を意味する」と言う<sup>185</sup>。「**ān** に先行される動詞語根 **nu** と **pracch** が追加されるべきである」[という *Vārttika* の規定] に基づいて **ātmanepada** が起こる<sup>186</sup>。

<sup>182</sup> MD 1.12: **āpṛcchvasva priyasakham amuṃ tuṅgam āliṅgya śailaṃ vandyaiḥ pumśam raghupatipadair añkitam mekhalāsu / kāle kāle bhavati bhavato yasya saṃyogam etya snehavyaktiś ciravirahajam muñcato bāspam uṣṇam** //

<sup>183</sup> A 5.4.91 **rājāhaṣsakhibhyaḥ ṭac** // 「複合語の最終要素である **rājan, ahan, sakhi** という〈名詞語基〉 (**prātipadika**) の後に、**ṭaC** 接辞が起こる」

<sup>184</sup> *Vaijayantī*, **tryakṣarakāṇḍa, strīliṅgādhyāya** 18bcd.

<sup>185</sup> AmK 3.2.7.

<sup>186</sup> Vt 6 on A 1.3.21 **āni nupracchyoḥ** // 「**ān** に先行される動詞語根 **nu** と **pracch** が追加されるべきである」

MBh on Vt 6 ad A 1.3.21 **āni nupracchyor upasamkhyānam kartavyam / ānute śrgālah / āpṛcchte gurum iti**

[雲と山が] 友であることを *kāla* 云々と確立する。時期の度に、即ち雨季の度に。そして友と出会う時期が *kāla* という語により述べられている。普及 (*vīpsā*) の意味で反復表現 (*dvirukti*) がなされている<sup>187</sup>。貴殿との出会いを (*saṃyogam*=*saṃparkam*) 得て、長き別れから生じる熱い涙を、即ち蒸気と涙を。ヴィシュヴァは「*bāṣpa* は涙 (*netrajala*) と蒸気 (*uṣman*) を意味する」と言う<sup>188</sup>。流して彼は、即ち山は愛情を顕に (*snehavyaktiḥ*=*premāvīrbhāvaḥ*) している。実に、愛情深き人達は長い別れがある時に涙を流す、という考えが意図されている。

さて次に彼 (雲) の道を語る。

1.13. 水を与える者よ、まず貴方の旅に相応しい道を私から聴くのだ。その次に耳に心地よい我が音信を聴くことになろう。そこ (旅路) では、疲労が止まぬ時には山で足を休め、衰弱が止まぬ時には体に良い河水を飲み、貴方は進み行くだらう<sup>189</sup>。

*mārgam* 以下について。おお、水を与える者よ、まず初めに、即ち今、語る私から [道を聴くのだ]。「私から」(*mattah*) と補うべし。貴方の旅に相応しい、即ち良好な道を (*mārgam*=*adhvānam*)。ヤーダヴァは「*mārga* は、鹿の足跡 (*mṛgapada*)<sup>190</sup>・月 (*mās*)・月の星宿 (*saumyarkaṣa*)・調査 (*anveṣaṇa*)・道 (*adhvan*) を意味する」と言う<sup>191</sup>。貴方は聴くのだ。その

// 「āN に先行される動詞語根 *nu* と *pracch* が追加されるべきである。【例】「ジャッカルが吠える」(*ānute śṛgālah*)・「彼は師に問う」(*āpṛcchte gurum*)」

cf. A 1.3.21 *krīdo 'nusaṃparibhyaś ca* // 「*anu*, *sam*, *pari*, *āN* に先行される動詞語根 *krīd* に *ātmanepada* が起こる」

<sup>187</sup>A 8.1.4 *nityavīpsayoḥ* // 「行為の反復 (*nitya*)、もしくは行為が属性による物事の普及 (*vīpsā*) を表示するため、反復表現が起こる」

<sup>188</sup>VīP, *padvika* 9b.

<sup>189</sup>MD 1.13: *mārgam tāvac chṛṇu kathayatas tvatprajānānurūpaṃ saṃdeśam me tadanu jalada śroṣyasi śrotapeyam / khinnāḥ khinnāḥ śikhariṣu padaṃ nyasya gantāsi yatra kṣīṇaḥ kṣīṇaḥ parilaghu payaḥ srotasāṃ copabhujya //*

<sup>190</sup>Ā の *mṛgamada* (「麝香」という読みの方が適当かと思われるが、*Vaijayanī* 原典も N の *mṛgapada* という読みを支持する。

<sup>191</sup>*Vaijayanī*, *dvyakṣarakāṇḍa*, *pumliṅgādhyāya* 46ab.

後に、即ち道を聴いたすぐ後に、両耳で飲むに値する (*peyam*=*pānārham*) [我が音信を聴くことになろう]。多大な渴愛をもって聴くに値する [音信] という意味である。peya の言及により、音信と甘露の同等性が理解される。我が音信を (*saṃdeśam*=*vācīkam*)。アマラは「*saṃdeśavāc* と *vācīka* は同義語であろう」と言う<sup>192</sup>。貴方は聴くことになろう。

そこで、即ち道で疲労が止まぬ時には、即ち繰り返しが弱まる時には。nityavīpsayoḥ [という A 8.1.4] に基づいて、行為の反復 (*nitya*) の意味で反復表現 (*dvīrbhāva*) が起こる<sup>193</sup>。山々に (*śikhariṣu*=*parvateṣu*) 足を置いて (*nyasya*=*niksipyā*)。再び力を得るためにどこかで休んで、という意味である。衰弱が止まぬ時には、即ち繰り返しが衰弱する時には。ここでも、[*kṣīṇa* は] *kṛt* 接辞で終わるから、先の場合と同様に反復表現 (*dvīrukti*) が起こっている。河のとても軽い、即ち重さという欠点のない [水]。石に打たれて攪拌されているから体に良い [水] という意味である。そしてさらにヴァーグバタ (*Vāgbhaṭa*) は言う。

ヒマラーヤ山とマラヤ山 (*Malaya*) から流れ出し、石に打たれ、動かされ、分裂させられて水が攪拌されているその河は体に良い<sup>194</sup>。

と。水を (*payah*=*pānīyam*) 飲んで、即ち体を養うために飲んで、進み行くだらう (*gantāsi*=*gamiṣyasi*)<sup>195</sup>。動詞語根 *gam* の後に IUT 接辞が起こっている<sup>196</sup>。

1.14. 潤う葦が生育するこの地より、北を向いて空を駆け上がれ。「風が山の峯を運んでしまわないかしら」と

<sup>192</sup>AmK 1.6.17.

<sup>193</sup>A 8.1.4. *nityavīpsayoḥ* // 「行為の反復 (*nitya*)、もしくは行為が属性による物事の普及 (*vīpsā*) を表示するため、反復表現が起こる」

<sup>194</sup>AAH, *sūtrasthāna* 5.9cd-10ab.

<sup>195</sup>*ca* は *nyasya* と *upabhujya* を並列させるものとして理解した。

<sup>196</sup>A 3.3.15 *anadyatane lut* // 「今日 (話者が当該の発話をなす日) を除く未来に属する対象である (行為) を表示する動詞語根の後に IUT 接辞が起こる。」

顔を上げた無垢なシッダの妻達にと  
ても怯えながらその尽力を見られつ  
つ。旅路では方処の象達の巨大な鼻  
の攻撃を避けながら<sup>197</sup>。

adreh以下について。風が (pavanaḥ=vāyuh)  
山の、即ちチトラクータの峰を運んでしまわ  
ないかしら。kimsvid という語は、推測や ca  
等の意味で語られる。と懸念して、顔を上げ  
た (unmukhībhiḥ=unnatamukhībhiḥ) [シッダ  
の妻達]。svāngāc copasarjanād asamyogopadhāt  
[という A 4.1.54] に基づいて NiS 接辞が起  
こる<sup>198</sup>。無垢な、即ち当惑する [シッダの妻  
達]。アマラは「mugdha は、愛らしい (sun-  
dara) と当惑する (mūḍha) を意味する」と言  
う<sup>199</sup>。シッダ (siddha) 達の、即ちある種の半  
神達の妻達に。とても怯えながら (cakitacaki-  
tam=cakitaprakāram)。prakāre guṇavacanasya  
[という A 8.1.12] に基づいて、反復表現  
(dvirbhāva) がなされている<sup>200</sup>。尽力を見られ

<sup>197</sup>MD 1.14: adreh śṛṅgam harati pavanaḥ kimsvid  
ity unmukhībhir dṛṣṭotsāhaś cakitacakitam mugdha-  
siddhāṅganābhiḥ / sthānād asmāt sarasaniculād utpa-  
todaṅmukhaḥ kham diñnāgānām pathi pariharan sthūla-  
hastāvalepān //

マッリナータによればこの詩節には別の意味が込めら  
れており、彼の注釈及び Kale[1987: 32] の説明に従えば、  
この詩節を以下のように訳出することが可能である。

1.14. 詩情を解する詩人ニチュラがいるこの  
地より、[誇り高く] 顔をあげて気高くあれ。  
「[カーリダーサの名声という] 風が山 [にも  
似たディグナーガ] の優越を取り去るだろう  
から、[感動に] 震えて顔を上げた公平な詩  
聖達と女達に尽力を見られつつ。文学の道  
では、ディグナーガが巨大な手で非難するの  
を反駁しながら。

Meghadūta 1.14 を通じてカーリダーサはライヴァルで  
あった仏教論理学者ディグナーガ (Dignāga, ca. 480-540)  
を風刺しているとするマッリナータの解釈は、一般的に  
は受け入れられていない。なお、この解釈はマッリナー  
タの独創ではなく、彼以前の注釈家であるダクシナーヴァ  
ルタナータの解釈を受けたものである。詳細は注 205 を  
見よ。

<sup>198</sup>A 4.1.54 svāngāc copasarjanād asamyogopadhāt // 「結  
合子音を upadhā とせず、upasarjana (複合語の第二要素)  
である肢分語で終わる〈名詞語基〉(prātipadika) の後に、  
女性形で NiS 接辞が任意に起こる」

<sup>199</sup>マッリナータは ity amaraḥ と述べているが、筆者が確  
認しえた種々の Amarakośa の刊本には当該箇所は見当た  
らない。

<sup>200</sup>A 8.1.12 prakāre guṇavacanasya // 「属性間の類似性が

るから (dṛṣṭotsāhaḥ=dṛṣṭodyogah)。

潤う (sarasāḥ=ārdrāḥ) 葦が、即ち陸に生息  
する葦がある [この地から]。Śabdārṇava には  
「nicula は、ヴァーニーラ植物 (vānīra) ・或る詩  
人 (kavibheda) ・陸に生息する葦 (sthalavetasa)  
を意味するだろう」とある。この地から、即  
ち草庵から、旅路では、即ち空の道では、方処  
の象達の (diñnāgānām=diggajānām) 巨大な鼻  
(hastāḥ=karāḥ) の攻撃を、即ち投げ掛けを避け  
ながら。ヴィシュヴァは「hasta は、星宿の一種  
(nakṣatrabheda) ・手 (kara) ・象の鼻 (ibhakara)  
を意味するだろう」と言う<sup>201</sup>。北を向いて。神  
都アラカーは北に位置しているから、というこ  
とが意図されている。空を (kham=ākāśam) 駆  
け上げられ (utpata=udgaccha)。

この詩節で、以下の別の意味も [カーリダー  
サは] 暗示している。カーリダーサの詩人仲間  
であり、カーリダーサの作品に対して他人が  
なす非難を退ける者であり、詩情を解するニ  
チュラ (Nicula) という名の偉大詩人がいる場所  
から、北を向いて、即ち [作品の] 完全性ゆえに  
顔を上げて、旅路では、即ち文学の道では。師  
ディグナーガ (Dignāga) の。崇拜の意味で複  
数形となっている。カーリダーサの敵である師  
ディグナーガの手の攻撃を、即ち手で指し示し  
て非難するのを反駁しながら。ヴィシュヴァは  
「avalepa は、誇り (garva) ・塗油 (lepana) ・非難  
(dūṣaṇa) を意味するだろう」と言う<sup>202</sup>。山の、  
即ち山に匹敵する師ディグナーガの峰を、即ち  
優越を。アマラは「śṛṅga は、優越 (prādhānya)  
と峰 (sānu) を意味する」と言う<sup>203</sup>。取り去る  
ので (iti=hetunā)、シッダ達により、即ち文学  
の完成者である偉大なる詩人達と女達に尽力を  
見られるから、空を駆け上げられ、即ち気高くあ  
れ。このように自身の作品に対して、あるいは

表示されるべき時、属性表示語 (guṇavacana) の反復表現  
が起こる。そしてそれは karmadhāraya 同様に扱われる」

<sup>201</sup>ViP, tadvika 28ab. Ā, K ではこの後「また「avalepa  
は、誇り (garva) ・投げ掛け (kṣepaṇa) ・非難 (dūṣaṇa) を  
意味するだろう」と言う」(avalepas tu garve syāt kṣepaṇe  
dūṣane 'pi ca iti ca) という ViP, pacatuṣka 23cd からの引  
用が続く。

<sup>202</sup>ViP, pacatuṣka 23cd.

<sup>203</sup>AmK 3.3.26.

自身に対して詩人(カーリダーサ)は表現している。

親交に基づいて善し悪しがあるというのは偽り。池の中でも、葦(nicula)は優しげに佇んで、揺れ動く自分を海の勢いから守るから<sup>204</sup>。

というこの詩節をつくったから、その詩人はニチュラと呼ばれるようになったと言われる<sup>205</sup>。

<sup>204</sup>典拠不明。詩節の意味も明瞭ではない。

<sup>205</sup>Maurer[1965: 59-60]が指摘するように、マッリナータによるこの詩節の第二解釈はダクシナーヴァルタナータの解釈を受けたものであると考えて間違いない。ただダクシナーヴァルタナータがcd句のみに関して二重の説明をするのに対し、マッリナータは詩節全体に関して二重の説明を行っている。当該詩節に対するダクシナーヴァルタナータの注釈は以下の通りである。

Pradīpa on MD 1.14 **adrer** iti / **kimśvid** iti vitarke / atredam anusandheyam—śrīparvatarāmagiryādayaḥ siddhānām nivāsasthānam iti prasiddham / ata eva rāmagirivartinīnām siddhānganānam aunmukhyaṃ sambhavati / khecaratvat tasya / vakṣyati—siddhadvandvair jalakaṇabhayād vñibhir muktamārgam iti / **sthānād** / anenāsthānam ca vivakṣitam / **sarasaniculād** ārdraṇānīravataḥ / sarasaniculād ity atra niculapadena niculābhidhānaḥ kaścana kavir vivakṣitaḥ / yasya sūktiḥ subhāṣite śrūyate—samsargajā doṣaḡuṇā bhavanti etan mṛṣā yena jalāśrayo 'pi / sthitvānukūlaṃ niculaś calantam ātmānam āraḡṣati sindhuvegāt // iti / anayā niculopavarṇanayā tasya kaver niculābhidhānatvam āśīd ity anusandheyam / sa tu niculakavir āsthānagataḥ kālidāsyasya sūktiḥ sambhāvayati / tasmā sarasapadena taṃ kavim stauti / **kham utpata** / anena svakāvyaśocchritasthānavijrmbhaṇam ca vivakṣitam / ayam abhiprāyaḥ—kim anyair asūyubhiḥ—āsthānagato rasikaḥ sa nicula eva tavocchrāyaṃ karotīti durjan-abhīṣaṇabhītaṃ meghasandesābhidhānam svaprabandham meghacchadmanā samāśvāsayati / tava kāvyam ke nāma dūṣayanti apekṣam hrdi kṛtvāha—**dinnāgānām** diggajānām / anena dinnāgācāryaś ca vivakṣitaḥ / **pariharan** varjayan **sthūlahastāvalepān** utpatantaṃ megham ālokya sajātīyabhramaṇa sthūlahastāvātādanāni sambhāvītāni / anena prabandhadūṣaṇasamaye sthūlahastābhīnayaś ca vivakṣitaḥ / ayam abhiprāyaḥ—dinnāga iti ko 'py ācāryaḥ kālidāsaprabandhān anyatrokto 'yam artha iti sthūlahastābhīnayaḥ dūṣayati / tān ācāryaṃ svaprabandhasyāpūrvārthābhīdhāyitvam āśritya meghopadeśavyājena kavir upālabhata iti // (**adreh**以下について、**kimśvit**という語は推測を意味する。この詩節では以下のことが考察されるべきである。聖なる山であるラーマギリ等がシッダ達の住処であることは周知である。まさにこれ故、ラーマギリにいるシッダの女達が顔を上げるのである。彼(雲)は空を飛んでいるから。[カーリダーサは]『ヴィーナーを手にしたシッダの夫妻達は雨水の滴を恐れて道をあけるから—』と先に述べるだろう。地より。この[語]により、[詩人達の]集会場(āsthāna)のこ

1.15. 宝石の光彩が織り交ざったかのよう  
に美麗なる、このインドラの神弓(虹)の一部が蟻塚の頂上から眼前に現れる。それにより、貴方の黒き体は素晴らしい美を纏うことだろう。光彩放つ孔雀の羽飾りにより、牛飼いの装いをしたヴィシュヌの黒き体が美を纏うように<sup>206</sup>。

**ratna** 以下について。宝石の光彩が、即ち紅玉等の宝石の光彩が織り交ざった(**vyatikaraḥ=miśraṇam**)かのように美麗なる(**prekṣyam=darśanīyam**)、インドラの(**ākhaṇḍalasya=indrasya**)この弓の一部が。

とも話者に意図されている。潤う葦が生育する、即ち潤うヴァーニーラが生育する[地]。sarasaniculātというこの表現において、niculaという語により、ニチュラ(nicula)という名の或る詩人のことが話者に意図されている。彼(ニチュラ)の秀句は詩歌[集]で聞かれる。『親交に基づいて善し悪しがあるというのは偽り。池の中にいても、葦(nicula)は優しげに佇んで、揺れ動く自分を海の勢いから守るから』と。葦(nicula)を詳細に描写したこの[秀句]により、その詩人はniculaと呼ばれるようになったと考察されるべきである。そして、そのニチュラという詩人は[詩人達の]集会場にいる時、カーリダーサの諸秀句に敬意を払った。それ故、sarasaという語により、その詩人(ニチュラ)を[カーリダーサは]賞賛しているのである。空を駆け上げられ。これにより、自身のカーヴィアが高尚な場で花咲かすも話者に意図されている。次のことが意図されている—嫉妬する他の者達(=当該詩節で賞賛されたニチュラ以外の詩人)に何の意味があろうか—[詩人達の]集会場にいた、まさに詩情を解するそのニチュラが貴方(カーリダーサ)の高尚をもたらすから、低俗な者達をもたらす恐怖に戦く『雲の音信』という名の自身の作品を、雲で隠して元気づける。貴方(カーリダーサ)のカーヴィアを一体誰が非難するだろうか、という期待を念頭において述べる。方処の象達の(**dinnāgānām=diggajānām**)。これにより、師ディグナーガのことも話者に意図されている。巨大な鼻の攻撃を、即ち飛ぶ雲を目にして、[象達が]似たような動きで巨大な鼻の下向きの攻撃をしてくるのを避けながら(**pariharan=varjayan**)。これにより、作品を非難する時に[ディグナーガが]巨大な手で指し示すことも話者に意図されている。次のことが意図されている。ディグナーガという或る師が「他の場所でこの事柄は述べられているぞ(=お前は盗作しているぞ、あるいはお前はすでに扱われた事柄を扱っているぞ)」と巨大な手で指し示してカーリダーサの諸作品を非難する。詩人(カーリダーサ)は、自分の作品が前例の無い事柄を描いていることに依拠し、雲への[旅路の]指示を装ってその師(ディグナーガ)を非難している。)

<sup>206</sup>MD 1.15: ratnacchāyavyatikara iva prekṣyam etat purastād valmīkāgrāt prabhavati dhanuḡkhaṇḍam ākhaṇḍalasya / yena śyāmaṃ vapur atitarāṃ kāntim āpatsyate te barheṇeva sphuritarucinā gopaveśasya viṣṇoḥ //

「この」(etat) というように、手で指し示すことを話者は意図している。蟻塚の頂上から、即ち蟻塚の割れ目から眼前に (**prastāt=agre**)。アマラは「男性形の vāmalūra, nāku と中性形の valmīka は同義語である」と言う<sup>207</sup>。現れる (**prabhavati=āvirbhavati**)。

それにより、即ち弓の一部により、貴方の (**te=tava**) 黒き体は。光彩放つ (**sphuritarucinā=ujjvalakāntinā**) 孔雀の羽飾りにより (**barheṇa=picchena**)。アマラは「中性形の piccha と barha は同義語である」と言う<sup>208</sup>。牛飼いの装いをしたヴィシュヌの、即ち牛飼いであるクリシュナ (Kṛṣṇa) の黒き体が [美を得る] ように、素晴らしい美を (**kāntim=śobhām**) 得るだろう (**āpatsyate=prāpsyate**)<sup>209</sup>。

<sup>207</sup> AmK 2.1.14.

<sup>208</sup> AmK 2.5.31.

<sup>209</sup> この詩節では、虹を掛けた雲の黒い体が美を獲得する様が、牛飼いの装いをして、孔雀の羽飾りを着けたヴィシュヌ (=クリシュナ) の黒い体が美を獲得する様に比喻されている。虹と孔雀の羽飾りの間には「光彩 (chāyā, ruci) がある」という共通属性、雲とヴィシュヌの間には「黒色」(śyāmā) あるいは「素晴らしい美を獲得する」(atitarāṃ kāntim āpatsyate) という共通属性がある。詩節では「アーカンドラ (インドラの異名) の神弓の一部」(ākhaṇḍalasya dhanuḥkhaṇḍam) と表現されているが、詩節の内容と indracāpa, indradhanus (いずれも原義はインドラの神弓) 等が虹を意味することを考慮すれば、「アーカンドラの神弓」という表現も「虹」を意図していると考えて良い。ヴァッラバデーヴァは当該詩節に対する注釈中で、蟻塚の中にいる蛇が雨季に虹をもたらすという神話を紹介している。当該詩節の比喻構造を表にまとめると以下のようなになる。

	比喻対象	比喻手段
MD 1.15	宝石が織り交ざったかのように華麗な虹 (ratnacchāyavyatikariva prekṣya-dhanuḥkhaṇḍa)	光彩煌めく孔雀の羽飾り (sphuritaruci-barha)
	雲の黒い体 (śyāmavapus)	ヴィシュヌの黒い体 (viśṇu-śyāmavapus)
	雲の体が素晴らしい美を纏う様 (atitarāṃ kāntim āpatsyate)	ヴィシュヌの体が素晴らしい美を纏う様 (atitarāṃ kāntim āpatsyate)

なお、ヴィシュヌの化身 (avatāra) とクリシュナ伝説に関しては上村 [2003: 265-326] を参照されたい。

### Meghadūtavivṛti

1. 一連の分泌液に輝く首の周りを舞う黒蜂の列が、恰も数珠の如きである群衆の主(ガネーシャ)が、我らをお守りくださらんことを<sup>210</sup>。
2. カーリダーサの言葉と我ら注釈家の間にはなんと大きな差があることか！ それ故これ(注釈)は、儂い灯火による王宮の光照に他ならない。
3. だか私は『雲の使者』の注釈をつくる。偉大なる抛り所の高尚さの本質を知らせんと願って。

さて、貴殿はこのように説明するが、何故そのように言われるのか<sup>211</sup>。

<sup>210</sup>ヴァッラバデーヴァが冒頭部に掲げる三詩節の韻律は全て正規形 anuṣṭbh (pathyā) である。Raghuvamśa, Kumārasambhava, Meghadūta 及び Śiśupālavadha に対する注釈の冒頭部でヴァッラバデーヴァが掲げる詩節については、Goodall and Isaacson[2003: 263-264] で論じられている。Goodall and Isaacson[2003: 263-264] は、Raghuvamśa に対する注釈の冒頭部に掲げられた詩節がオリジナルのものであり、それらが後世にヴァッラバデーヴァの他の注釈書に挿入された可能性を想定している。Raghuvamśa 冒頭部に掲げられた詩節は以下の通りである。

Vallabhadeva's opening verse 1 on RV: yasya  
bhṛṅgāvaliḥ kaṅṭhe dānāmbhorājirājite /  
bhāti rudrākṣamāle sa naḥ pāyād gaṇādhīpaḥ  
//

一連の分泌液に輝く首の周りを舞う黒蜂の列が、恰も数珠の如きである群衆の主(ガネーシャ)が、我らをお守りくださらんことを。

Vallabhadeva's opening verse 2 on RV: kāli-  
dāsoktayaḥ kutra vyākhyātāro vyaṃ kva ca /  
tad idaṃ mandāpīna nātyaveśmaprakāśanam  
//

カーリダーサの言葉と我ら注釈家の間にはなんと大きな差があることか！ それ故これ(注釈)は、儂い灯火による劇場の光照に他ならない。

Vallabhadeva's opening verse 3 on RV: tathāpi  
kriyate 'smābhiḥ pañcīkā raghuvarṇane /  
ṭīkāvirahakhedārtasādhūthapravartitaiḥ //

だが、注釈との別離の苦しみに苛まれる正しい人々の集団に駆り立てられ、私はラグの物語に対する注釈をつくる。

<sup>211</sup>この議論導入の仕方の意図するところは不明である。

政策協議、使者、聴聞等 [の描写] がないので<sup>212</sup>、[『雲の使者』は] カンダカーヴィアの如きものではなく<sup>213</sup>、マハーカーヴィアでもない<sup>214</sup>。また、アーキアイカー (ākhyāyikā) という名称もこの作品に関しては全くの論外である<sup>215</sup>。

この作品で、雨季に依拠した〈旅の別離〉(pravāsavipralambha) を詩人は描こうとしてい

ヴァッラバデーヴァの注釈書がカーリダーサの作品のみならずカーヴィアへの現存する最古の注釈書であるが、ヴァッラバデーヴァ以前もしくは同時代に Meghadūta 及びカーヴィアへの注釈がなされていたことは確実である。それ故、ヴァッラバデーヴァ以前もしくは同年代の Meghadūta の注釈家に対する反論とも考えられる。

<sup>212</sup>ここでヴァッラバデーヴァが挙げる śravaṇa という項目は、文学理論家達が挙げる、マハーカーヴィア中で扱われるべき項目の中には含まれていない。Kāvyaśāstra でなされるマハーカーヴィアの定義中の政策協議 (mantra) 云々の箇所を時系列と見なせば、使者が何らかの話の聞く、あるいは使者からの報告を王が聞くという意味で śravaṇa という語を理解できるので、「聴聞」と訳すことにする。Kāvyaśāstra でなされるマハーカーヴィアの定義については解題部 1.3.1 を見よ。なお、各文学理論書で挙げられる、マハーカーヴィアで扱われるべきとされる項目については Trynkowska[2000] に詳しい。

<sup>213</sup>この 'khaṇḍakāvya' という用語は、筆者が調べた限り文学理論書中では Sāhityadarpaṇa で初めて扱われたものであり、その著者ヴィシュヴァナータに時代的に先行するヴァッラバデーヴァのカンダカーヴィア観は定かでない。なお、カンダカーヴィアについては解題部 1.3 を見よ。

<sup>214</sup>あるいは「カンダカーヴィアの如きマハーカーヴィアですらない」、「マハーカーヴィアであってもカンダカーヴィアの如きものではない」とも訳せるが、その場合意味不明である。

ヴァッラバデーヴァは Śiśupālavadha 19.41 に対する注釈中でマハーカーヴィアについて説明しており、それは彼のマハーカーヴィア観を探る手がかりとなる。SVO on ŚV 19.41: yatra sarve rasālamkārah sarvāṇi ca kāvyasthānāni caturvargabandhās ca kriyante tan mahākāvyaṃ śiśupālavadhādikam // (「あらゆる〈情調〉と修辞、カーヴィアのあらゆる要素、そして人生の四目的と結びつく諸々のものが達成されるのが、『シシュパーラの殺戮』等のマハーカーヴィアである) 』) なお、Kāvyaśāstra でなされる有名なマハーカーヴィアの定義については解題部 1.3.1 を見よ。

<sup>215</sup>ヴァーマハヤダンディンはアーキアイカーについて次のように説明している。

KA 1.25: saṃskṛtānākulaśravaśabdārthapadavṛtīnā  
/  
gadyena yuktodāttārthā socchvāsākhyāyikā ma-  
tā //

規則正しく耳に心地よい語と意味と文体を備えた散文と結びつき、高潔な人物の所行を描き、ウッチュヴァーサ [と呼ばれる章] によつ

る<sup>216</sup>。しかしそれ(旅の別離)は主人公に依拠せずに描かれるから、そのようには(=詩人が望むようには)美的経験(rasavattā)を伴わ

て分たれ、サンスクリット語で書かれたものはアーキアーイカーと見なされる。

KĀ 1.23-24: apādaḥ padasamtāno gadyam ākhyāyikā kathā /

iti tasya prabhedau dvau tayor ākhyāyikā kila //  
nāyakenaiva vācyānyā nāyakenetareṇa vā /  
svaguṇāviṣkriyā doṣo nātra bhūtārthaśaṁsinah //

詩行を欠く語の連続が散文である。それにはアーキアーイカーとカターという二種がある。その内アーキアーイカーは主人公だけが語ることができ、もう一方(カター)は主人公と他の人物が語ることができるとされる。こ(アーキアーイカー)の中で事実を語る[主人公]が自らの美質を明らかにしても欠陥とはならない。

<sup>216</sup> 〈恋情〉(śṛṅgāra)の下位区分として〈飲びの恋情〉(sambhogaśṛṅgāra)と〈別離の恋情〉(vipralambhaśṛṅgāra)があり、さらに〈別離の恋情〉の下位区分の一つに〈旅の別離〉(pravāsavipralambha)がある。ヴァッラバデーヴァと近い時代に彼と同じくカシュミールで活躍したアーナンダヴァルダナ(Ānandavardhana, 9世紀後半)は、*Dhvanyāloka* 中で次のように述べている。DhĀ, p. 54.9-12: tathā hi śṛṅgārasyāṅginas tāvad ādya dvau bheda—sambhogo vipralambhaś ca / sambhogasya ca parasparapremadarśanasuratavirahaṇādīlakṣaṇāḥ prakārāḥ / vipralambhasyāpy abhilāṣeśyāvīrahapravāsavipralambhādayaḥ / (「即ち、主要なるものである〈恋情〉には、まず最初に〈飲び〉(sambhoga)と〈別離〉(vipralambha)という二種の区別がある。そして〈飲び〉には、〈愛の眼差しの交わり〉(parasparapremadarśana)・〈快楽〉(surata)・〈行楽〉(virahaṇa)等の種類がある。〈別離〉にも、〈切望〉(abhilāṣa)・〈嫉妬〉(īrṣyā)・〈別居〉(viraha)・〈旅〉(pravāsa)等がある。)」

なお、本田[2005: 35, fn.18]によれば、〈恋情〉の下位区分である〈飲びの恋情〉と〈別離の恋情〉は、ボージャ(Bhoja, 11世紀)の*Śṛṅgāraprakāśa* 第23章から第25章で主要テーマとして取り上げられている。ボージャによれば、〈飲びの恋情〉は恋人達が望む抱擁等が達成されている場合の恋情で、それはさらに〈恋の始まりののちのもの〉(prathamānurāgānantara)、〈怒りののちのもの〉(mānānantara)、〈別れて暮らしたのちのもの〉(pravāsānantara)、〈悲しみののちのもの〉(karuṇānantara)という四つに分類される。一方、〈別離の恋情〉は、恋人達が望む抱擁等が達成されていない場合の恋情であり、〈恋のはじまり〉(prathamānurāga)、〈怒り〉(māna)、〈は

ない<sup>217</sup>。そして〈恋情〉(śṛṅgāra)が実現されることはない<sup>218</sup>。

この作品でヤクシャは主人公と見なされる。そして彼は別離のせいで狂乱しているから、雲を使者に任用することも適合しなくはない<sup>219</sup>。よって、ケーリカーヴィア(kelikāvya)というこの[名称]があらゆる点で適している。

1. 或るヤクシャは己の務めを怠った為、愛する妻との別離[をもたらず]故に重い、一年間耐えねばならぬ主の呪いで力を失い、シーターの沐浴した神聖な水があり、穏やかな陰を与える樹々生い茂るラーマガリの草庵に身を置いた<sup>220</sup>。

或るヤクシャは(yakṣaḥ=puṇyajanaḥ)、ラーマガリの草庵に、即ちチトラクータ山の苦行林に住んだ(cakra=vyadhāt)。

自らの都アラカーを離れてそこ(草庵)に住むことになった原因を述べる。主人の(bhartuḥ=prabhoḥ)、即ち富を与える神クペーラの呪いで力を失った(astamgamitamahimā=naṣṭatejāḥ)[ヤクシャ]。

なればなれ(pravāsa)、〈悲しみ〉(karuṇa)というように、〈飲びの恋情〉の場合と同じく四つに分類される。〈別離の恋情〉の四つと〈飲びの恋情〉の四つは、その名が示すごとく、順に組み合わせられ、恋のはじまり、恋のはじまりののちのもの、怒り、怒りののちのもの、云々というように、徐々に恋情が高まっていく状態を分析説明したものである。

<sup>217</sup> この‘rasavattā’という語によって、いわゆる〈有情調修辞〉(rasavat-alamkāra)のことをヴァッラバデーヴァが意図しているかどうかは定かではない。〈有情調修辞〉(rasavat-alamkāra)については本田[2005]及び寺内[1979]で論じられている。

<sup>218</sup> この一文を素直に理解すれば、*Meghadūta* では〈旅の別離〉が主人公、即ちヤクシャに依拠せずに描かれるから、〈恋情〉が引き起こされることはないということである。確かに*Meghadūta* において描写の中心にあるのは常に雲であるが、*Meghadūta* 中でヤクシャは自らの悲しみや羨望を何度も語っており、ヴァッラバデーヴァの意図する所は定かではない。それとも*Meghadūta* はヤクシャと妻の再会までは描かれないから、〈恋情〉は実現されないという意味か。検討を要する。

<sup>219</sup> 〈狂乱〉(unmāda)については注77を見よ。

<sup>220</sup> MD 1: kaścit kāntāvīrahaguruṇā svādhikārapramattaḥ śāpenāstamgamitamahimā varṣabhogyeṇa bhartuḥ / yakṣaś cakre janakatanayāsnānapuṇyodakeṣu snigdhaḥchāyātaruṣu vasatiṃ rāmagiryāśrameṣu //

どのような [呪い] か。愛する妻との別離 [をもたらず] 故に耐え難い (*kāntā-virahagurunā=priyāvīrahaduḥsahena*) [呪い]。さらに、一年間耐えねばならぬ (*varṣabhogye-ṇa=saṃvatsaram anubhāvyena*) [呪い]。

何故この者 (ヤクシャ) は彼 (クペーラ) から呪いを受けたのか。

このような問いに対して述べる。己の務めを怠った為に、即ち自分のことに夢中になっていた為に [呪いを受けた]。実に、彼は妻に夢中になっていた為に己の務めのことを顧みず、王中の王クペーラから「お前は他ならぬ彼女と一年間別離せよ！ お前の能力は消えてなくなるがよい！」と呪いを受けた。これ故、彼 (ヤクシャ) はラーマの山にやって来たのである。

どのような草庵か。シーターが沐浴したことで神聖な水のある (*janakatanayā-snānapuṇyodakeṣu=sītāmajjanapavitratoyeṣu*) [草庵]。実に、賢者達が身を寄せた場所は聖地と言われる<sup>221</sup>。ラグの子孫 (ラーマ) が近くにいるのにシーターが賞賛されるのは、[この] カーヴィアが〈恋情〉 (*śṛṅgāra*) に依拠するものとして欲せられているからである。さらに、穏やかな (*snigdhaḥ=aparūṣaḥ*) 陰を与える樹々がある [草庵]。このように [草庵が] 享受に適した場所であることが語られている。

一年間耐えねばならぬもの (*varṣam bhogyah*) が *varṣabhogyā* である。kālā atyantasaṃyogē ca [という kālā が継起した A 2.1.29] に基づ

<sup>221</sup>cf. KS 6.56.

KS 6.56: adyaprabhṛti bhūtānām abhigamyo  
'smi śuddhaye /  
yad adhyāsitam arhadbhis tad dhi tīrtham  
pracakṣate //

今後、生物達が浄化を求めて私の下へやって来るだろう。賢者達が身を寄せた場所は聖地と呼ばれるのだから。

Vallabhadeva on KS 6.56: ita ārabhya janānām pāpānuttaye 'smy aham abhigamyah / yasmād yad arhadbhir vidvadbhir āsevitaṃ tat tīrtham āhuḥ / bhavadāgamanād dhi tīrthībhūto 'ham // (「今後、罪の除去のために生物達が私の下にやって来るだろう。何故なら、賢者達が (arhadbhiḥ=vidvadbhiḥ) 享受した場所は聖地と呼ばれるのだから。実に、貴殿達 (=北斗七星) がやって来たことで私は聖地となったのである」)

いて複合語を形成している<sup>222</sup>。

この詩節においてラーマギリとはチトラクータのことであり、リシュヤムーカ (*Rṣyamūka*) のことではない。シーターはそこ (リシュヤムーカ) には居住していないから。[この作品では] 全詩節においてマングークラントー韻律が使用される。〈旅の別離〉 (*pravāsavipralambha*) が〈情調〉 (*rasa*) である<sup>223</sup>。

2. か弱い妻と別れた愛深き彼は、腕から黄金の腕輪も抜け落ち、その山で幾月かを過ごした後、アーシャード月の最後の日、山頂を抱いた雲、土手打ち遊びのため身を屈める象のように美しい雲を目にした<sup>224</sup>。

その後このヤクシャは、幾らかの、即ち七つか八つの月を過ごして (*nītvā=ativāhya*)、その山で、即ちチトラクータで雲を目にした (*dadarśa=ālokitavān*)。

か弱い妻と別れた、即ち愛する妻と別れた [ヤクシャ]。そしてこれ故、衰弱して黄金の腕輪が抜け落ちたことで (*kanakavalayabhraṃśe-na=sauvarṇakatakapātena*) 腕に何もなくなった (*riktaprakoṣṭhaḥ=sūnyabhujah*) [ヤクシャ]。愛深き、即ち [妻を] 熱望する [ヤクシャ]。

どのような [雲] か。山頂を抱いた (*āśliṣṭasānum=āliṅgitādriprastham*) [雲]。そしてこれ故、土手打ち遊びのために (*vaprakrīḍārtham=taṭāghātakelinimittam*) 身を屈める、即ち打撃をなす象のように美しい (*prekṣanīyam=drśyam*) [雲]。山頂に佇む象のような [雲] という意味である。

<sup>222</sup>A 2.1.29 atyantasaṃyogē ca // 「第二格名詞接辞で終わる、時間 (kāla) を表示する語は、不断の結合が理解されるべき時、名詞接辞で終わる項目と任意に複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

cf. A 2.1.28 kālāḥ // 「第二格名詞接辞で終わる、時間を表示する語は、krt 接辞 Kta で終わる項目と任意に複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

<sup>223</sup>〈旅の別離〉 (*pravāsavipralambha*) と〈情調〉 (*rasa*) については注 216 と 77 をそれぞれ見よ。

<sup>224</sup>MD 2: tasminn adrau katicid abalāvīprayuktaḥ sa kāmī nītvā māsān kanakavalayabhraṃśariktaprakoṣṭhaḥ / āśāḥasya praśamadivase megham āśliṣṭasānum vaprakrīḍāparīṇatagajaprekṣanīyam dadarśa //

いつ[目にしたの]か。アーシャーダ月の最後の日(*praśamadivase=samāptidine*)、即ち夏の終わりに[目にした]。しかし或る人達はs音とth音の文字の類似性に惑わされて *prathama* と述べている。そして彼らは非常に苦勞して同じこの意味にたどり着いている。しかし雨季が目下の主題であるので、最初の日(*ādidine*)というこれは全く矛盾している<sup>225</sup>。

3. ヤクシャ達の王(クペーラ)の従者は涙を内に抑え、ケートカを咲かすそれ(雲)の前に何とか立ち、長い間黙念としていた。雲を見る時には幸福な者でも心が騒ぐのだから、遠方において[妻の]首を抱きたいと願う人にとってはましてのこと<sup>226</sup>。

その、即ち雲の前に(*purah=agratah*)何とか立ち、ヤクシャ達の王の、即ちクペーラの従者は(*anucarah=bhṛtyah*)涙を内に抑え、即ち涙を喉にため、知る由も無い物事を長い間考えていた(*dadhyau=acintayat*)。

どのような[雲]か。ケートカ(*ketaka*)を生み出す原因である、即ちケートカと呼ばれる花々を生み出す原因である[雲]。何故なら雨季にそれらは生じるから。

ただ雲を目にしただけでどうしてこの者(ヤクシャ)は内に涙を抑えて黙念としていたのか。

このような問いに対して述べる。幸福な者でも、即ち[愛する人と]別離していない者でも雲を見る時には、即ち雨季には、心が別様な状態となる、即ち変化する、即ち多大な切望に満ちる。[妻の]首を抱きたいと願う、即ち夫と呼

<sup>225</sup>インドの暦の上ではアーシャーダ月の次に来るシュラーヴァナ月から雨季(*varṣā*)に入る。アーシャーダ月の「最初の日」(*prathamadivase*)はまだ夏(*grīṣma*)であり、「最初の日」という読みでは *Meghadūta* の目下の主題である雨季との矛盾をきたす。よって、夏が終わりこれから雨季が到来するアーシャーダ月の「最後の日」(*praśamadivase*)と読むべきだとヴァッラバデーヴァは主張している。「最初の日」と「最後の日」に関する議論については、*Meghadūta* 1.2, 1.4 に対するマツリナータの注釈とそこに付した注を見よ。

<sup>226</sup>MD 3: *tasya sthivā kathamapi purah ketakādhānāhetor antarvāspāś ciram anucaro rājarājasya dadhyau / meghāloke bhavati sukhino 'py anyathāvr̥tti cetah kaṅthāśleṣapranayini jane kiṃ punar dūrasamsthe //*

ばれる人が遠方にいる場合にはましてのこと。幸福な者達すら雨季の到来を目にして切望の気持ちで湧くのに、別離している者達に何をか言わん、という意味である。

首を抱くことを願う者(*kaṅthāśleṣa eva prañayo 'rthitā vidyate yasya*)が[*kaṅthāśleṣapranayin*である]。雲が見られる季節が雨季である。本質から逸れた状態が *anyathāvr̥tti* である。

4. シュラーヴァナ月の間近き時、彼は妻の命を支えるため自身の無事を伝える音信を雲に運ばせようと、瑞々しいクタジャの花々を喜びながらそれ(雲)に捧げ、愛情ある言葉で歓迎した<sup>227</sup>。

その後、そのヤクシャはその雲に歓迎を述べた。即ち「貴方が無事に到着して何よりです」と語った。愛情ある(*prītipramukhāṇi=snehapūrvakāṇi*)言葉を歓迎の際に[述べた]。例えば次のように。「貴方は幸福で自立している。貴方の幸せは至る所にある。お休みください。この場所を浄めてください」と。

彼はどんな[ヤクシャ]か。雲に(*jīmūtena=meghena*)自分の無事を伝える(*svakuśalamayīm=ātmaśreyorūpām*)音信を(*pravṛttim=vārttām*)運ばせようとする、即ち[雲を妻の下へ]行かせようとする[ヤクシャ]。何故なら、彼は妻の命を支えることを(*jīvitāmbanam=prāṇasamdhāraṇam*)欲しているから。実に、主人の無事を知って妻達は安堵する。

それ(雲)はどのようなものか。瑞々しいクタジャの花々で崇拝がなされた(*kalpitārghāya=vihitapūjāya*) [雲]。まさにこれ故(=雲を崇拝するため)、彼(ヤクシャ)は喜んで<sup>228</sup>。

<sup>227</sup>MD 4: *pratyāsanne nabhasi dayitājīvitāmbanārthī jīmūtena svakuśalamayīm hārayiṣyan pravṛttim / sa pratyagraiḥ kuṭajakusumaiḥ kalpitārghāya tasmai prītaḥ prītipramukhavacanam svāgatam vyājahāra //*

<sup>228</sup>雲に音信を運んでもらうため、雲の機嫌をとろうと笑みを浮かべているという意味だろう。

「アーシャーダ月の最後の日」(āṣāḍhasya praśamadivase)<sup>229</sup>と述べられたのと全く同じことが「シュラーヴァナ月の間近き時」(pratyāsanne nabhasi)と再度述べられている。ナバスマとはシュラーヴァナ月のことである。あるいはむしろ雲に覆われていることに基づき、近い、即ち近くにあるかのような空で (nabhasi=gagane) [雲に音信を運ばせようとして]、と説明すべきだと或る人達は言う。他ならぬ空で雲は音信を運ぶ。

実に、彼(ヤクシャ)は喜びを与えて[雲を]進行させる。喜びを与えて[音信を]運ばせる、というようにNiCが起こる<sup>230</sup>。それから、Iṛt śeṣa

<sup>229</sup>Meghadūta 2 を見よ。

<sup>230</sup>A 3.1.26 hetumati ca // 「さらに、自主的な〈行為主体〉を使役する者の〈促進〉(preṣaṇa)等のハタラキ(vyāpāra)が表示されるべきとき、動詞語根の後にNiC接辞が起こる」

当該詩節で、ヤクシャは雲の機嫌を取り、雲を喜ばせて音信を運ぶよう雲を促している。〈行為主体〉である雲を使役するヤクシャの〈促進〉等のハタラキを表示すべく、A 3.1.26 が適用されてNiC接辞が起こっている。

なお、パーニニ文法家によれば、使役は被使役者がすでに〈行為〉に従事している(pravṛttakriya)ことを前提とする。或る〈行為〉に従事している被使役者にその行為を止めさせないのが使役である。この点が命令との違いである。IOT接辞は、未だ〈行為〉に従事していないもの(apravṛttakriya)に対する促進が表示されるべき時に導入される。そのことをバルトリハリ(Bhartrhari)は次のように述べている。小川[2010: 22, fn.55]参照。

VP 3.7.126: dravyamātrasya tu praiṣe pṛcchya-  
der loḍ vidhiyate /

sakriyasya prayogas tu yadā sa viṣayo ṇicah //

小川[2010: 22, fn.55]: しかしながら、単なる〈実体〉に対する促進が表示されるべきとき、pracch(「質問する」)などの[動詞語根]の後に、loḍが導入される。一方、〈行為〉を有するものが使役されるとき、その[使役]はṇic接辞の対象領域である。

ヘーラーラージャ(Helārāja)は注釈中で次のように述べている。Prakāśa on VP 3.7.126: apravṛttakriyasya dravyamātrasya apratilabdhakartṛbhāvasya kartṛtvārtha eva praiṣe dyotyē loḍ upadiśyate / pṛcchyanuuyujyāder dhātoḥ parah pratyayaḥ kartrādikārake vācye / pravṛttakriyasya tu virāmāśāṅkāyām mā virāmsīd ity abhisamdhāya kartur eva svatantrasya prayojakahetuvyāpāre ṇij vācaka upadiśyate / 「単なる〈実体〉(dravya)とは〈行為〉が未だ起こっていないものであり、〈行為主体性〉を未だ獲得していないものである。そのまさに〈行為主体性〉を目的とする〈促進〉が標示されるべきとき、IOT接辞が導入されることが教示されている。pracch, anuyuj等の動詞語根の後に、〈行為主体〉等の〈行為参与者〉が表示されるべきとき、[IOT

ca [という A 3.3.13] の ca 音に基づき、〈行為〉<sub>1</sub>を目的とする[〈行為〉<sub>2</sub>を表示する]動詞語根が共起項目の場合にIRT接辞が起こる<sup>231</sup>。音信を運んでもらうために歓迎を述べたという意味である。

jīmūtena について。hr̥kror anyatarasyām [という A 1.4.53]に基づいて、状況に応じて任意に〈行為主体〉性が[確立される]<sup>232</sup>。tasmai について。〈行為〉によって〈行為主体〉が自己にXを結びつける、或いは結びつけようと意図するそのXも〈受益者〉だから、〈受益者〉を表示する接辞が起こる<sup>233</sup>。

どうして無生物である雲を任用したのか。この問いに対して[カーリダーサは]述べる。

5. 煙、光、水、風が集積した雲というものと、鋭敏な感官を備えた人間が届けるべき音信というものとの間にはなんと大きな違いがあることか！ヤクシャはこのようなことを切望ゆえに深く考えず、それ(雲)に頼んだ。恋に病む者はその愛ゆえに生物と無生物を区別できないのだから<sup>234</sup>。

等の]接辞が起こる。一方、〈行為〉がすでに起こっているものに中止の懸念がある場合、「中止してはならない」ということを念頭において、まさに自主的な〈行為主体〉を使役するhetu(=使役者)にハタラキが起こり、そのハタラキを表示するものとしてNiC接辞が導入されると教示されている」

このようなパーニニ文法家の解釈を当該の事例に当てはめれば、ヤクシャはすでに空を進んでいる雲を使役して、途中で中断することなく音信運搬という任務を完了させようと、雲の機嫌を取って雲を促していると解釈することも可能である。

<sup>231</sup>A 3.3.13 Iṛt śeṣe ca // 「〈行為〉<sub>1</sub>を目的とする〈行為〉<sub>2</sub>を表示する動詞語根が共起項目としてある場合もそうでない残余の場合も、未来時に属する〈行為〉<sub>1</sub>という対象を表示する動詞語根の後にIRT接辞が起こる」

<sup>232</sup>A 1.4.53 hr̥kror anyatarasyām // 「動詞語根 hr̥, kṛがṇiを後続しない場合の〈行為主体〉は、それらがṇiを後続する場合、任意に〈目的〉という術語を得る」

<sup>233</sup>MBh on A 1.4.32: kriyāgrahanam api kartavyam // 「〈行為〉(kriyā)という語もまた言及されるべきである」

cf. A 1.4.32 karmaṇā yam abhipraiti sa sampradānam // 「贈与行為の〈目的〉によって〈行為主体〉が自己に〈行為参与者〉<sub>x</sub>を結びつける、或いは結びつけようと意図するその〈行為参与者〉<sub>x</sub>は、〈受益者〉と呼ばれる」

cf. A 2.3.13 caturthī sampradāne // 「〈受益者〉が表示されるべきとき、第四格名詞接辞が起こる」

<sup>234</sup>MD 5: dhūmajyotiḥsalilamarutām samnipāṭah kva me-

ヤクシャは (guhyakaḥ=puṇyajanaḥ)、切望ゆえに (autsukyāt=utkaṅthāvaśāt) このように (iti=evam) 深く考えずに (aparigaṇayan=vimṛśan)、それに、即ち雲に頼んだ (yayāce=prārthayata)。

何を [深く考えなかったのか]。

このような問いに対して述べる。雲というものと音信というもの (samdeśārthāḥ=vārtāvastūni) との間にはなんと大きな違いがあることか。まず雲というものは、煙、光、水、風の集まりである。実に、煙等からなる無生物が雲である。音信というものは、鋭敏な感管を備えた (patukaraṇaiḥ=caturendriyaiḥ) 生き物が、即ち人間が届けることができるものである (prāpaṇiyāḥ=netuṃ śakyāḥ)。しかし知性のない者にはできない。

その場合、どうして彼 (ヤクシャ) はこのことを深く考えなかったのか。

このような問いに対して述べる。何故なら恋に病む者達は、即ち恋という罠に苦しむ者達は、生物と無生物を、即ち獅子と樹等を愛ゆえに区別できない (praṇayakṛpaṇāḥ=prārthanādīnāḥ) から。実に、彼らは相手たる者か相手たる者でないか識別できない。このように、詩人 (カーリダーサ) は自らの弱点を間接的に取り除いている<sup>235</sup>。

お世辞を述べてから、まさにその頼み事を述べる<sup>236</sup>。

## 6. 貴方が世に名高きプシュカラーヴァルタカ族の家系の生まれであり、思うがまま姿を変えられ、インドラの大

ghaḥ samdeśārthāḥ kva patukaraṇaiḥ prāṇibhiḥ prāpaṇiyāḥ / ity autsukyād aparigaṇayan guhyakas taṃ yayāce kāmārtā hi praṇayakṛpaṇāś cetanācetanāṇaḥ //

<sup>235</sup>無生物であり、人間の言葉を話すはずがない雲を使者に任用することは常識的に考えてありえない。無生物が使者としての役目を果たせるはずがないからである。カーリダーサはその矛盾を当該詩節で解消している。つまりヤクシャはあまりに妻を想うがあまり、そのようなことを深く考えなかったのである。詳しくは解題部 1.5.1 を見よ。

<sup>236</sup>この詩節で使用される〈お世辞〉(preyas) という修辞についてはマッリナータの注釈を見よ。

臣たることを私は知っている。それ故、運命のせいで妻と遠く離れて暮らす私は貴方に請う。卑賤なる者へ願い事をして望みが叶うくらいなら、優れた美点を有する者への願い事が叶わない方がまだから<sup>237</sup>。

私は貴方が以下のような者であることを知っているから、請うにいたった。

どのような [雲] か。プシュカラーヴァルタカ族の、即ち世界崩壊の時に現れる雲達の家系に (vaṃśe=kule) 生まれた [雲]。このように [雲が] 高貴な家系の生まれであることが表現されている。さらに、インドラの (maghonaḥ=indrasya) 大臣である (prakṛtipuruṣam=amātyapurūṣam) [雲]。このように [雲の] 威厳が語られている。実に、国家の要素 (prakṛti) の中で大臣は主要な存在である。そしてインドラにとっては、雲達だけが喜びをもたらしてくれる者である。あるいは、国家の要素の内、主要なる人物 (prakṛtiś cāsāu puruṣaḥ) が prakṛtipuruṣa である。

王・大臣・領土・蔵・要塞・軍隊・友邦、これらは国家の七要素である。実に王国は七つの手足を持つと言われる<sup>238</sup>。

kāmarūpa とは美しき者、あるいは思うがままに姿を変えられる者のことである。雲達は多くの形態を有しているから。まさにそのことを彼 (カーリダーサ) は先に述べるだろう。「貴方は体を花の雲となし」と<sup>239</sup>。まさにこれ故に、運命のせいで私は妻と遠く離れている

<sup>237</sup>MD 6: jātaṃ vaṃśe bhuvanavidite puṣkarāvartakānām jānāmi tvāṃ prakṛtipuruṣam kāmarūpaṃ maghonaḥ / tenārthitvaṃ tvayi vidhivaśād dūrabandhur gato 'haṃ yācñā vandhyā varam adhiguṇe nādhame labdhakāmā //

<sup>238</sup>MS 9.294.

<sup>239</sup>MD 43: tatra skandaṃ niyatavasatiṃ puṣyameghī-kṛtātmā puṣpāsāriḥ snapayatu bhavān vyomagaṅgā-jalārdraiḥ / rakṣāhetor navaśaśibhr̥tā vāsavināṃ camūnām atyādityaṃ hutavahamukhe sambhr̥taṃ tad dhi tejaḥ // (「貴殿は体を花の雲となし、天界のガンガー河の水に濡れた花々の驟雨を、常にそこ (デーヴァギリ) にいるスカンダに浴びせよ。新月頂く者 (シヴァ) はインドラの軍勢を守るため、供物を運ぶ者 (火) の口に太陽をも凌ぐかの生源液を投じたのだから」)

から (dūrabandhuḥ=asaṃnihitadārah) 貴方に請うにいたった (arthitvaṃ gataḥ=yācñākarah saṃpannah)。

もし私 (雲) が以上のような美点を備えているならば、その場合、何故この限りのこと (上述の美点を備えていること) で私に頼み事をするのか。

このような問いに対して述べる。何故なら、優れた美点を有する者への、即ち家系等の美点に優れた者への願い事が叶わない (vandhyā=niṣphalā) 方が好ましい (varam=bhadram) から。恥じをもたらすものではないからである。しかし卑賤なる者に (adhame=nikṛṣṭe) [頼み事をして] 望みが叶うことは、即ち望みの物を得たとしても [好ましく] ない。

性の不一致がある場合にも、一般 [中] 性を意図して同格表現がなされる<sup>240</sup>。例えば「溜め池は百の井戸に勝る。」(varam kūpaśatād vāpī) 等のように<sup>241</sup>。

そして、貴方が我が要求を受け入れないことは道理に反するということを述べる。

7. 水を与える者よ、貴方が苦しむ者達の寄る辺であるならば、富の神 (クベーラ) の怒りで別離させられた私の音信を妻の下へ運んでほしい。ヤクシャ達の御主のアラカーと呼ばれる神都へ貴方は行かねばならぬ。外苑にいるシヴァの頭上で輝く月光に清められた楼閣がある [神都へ]<sup>242</sup>。

<sup>240</sup>ヴァッラバデーヴァは当該詩節の中性形 varam の性を性一般、即ち無性の性と理解している。それは即ち varam が副詞 (kriyāviśeṣaṇa) であることを意味する。よって限定対象 (viśeṣya) との性 (liṅga) や数 (vacana) の不一致があっても問題はない。何故なら、副詞の限定対象である行為 (kriyā) は性を持たず、特定の数が妥当することもないからである。副詞 (kriyāviśeṣaṇa) については小川 [1984] 参照。

<sup>241</sup>Mahābhārata 1.69.21: varam kūpaśatād vāpī varam vāpīśatāt kratuḥ / varam kratuśatāt putrah satyaṃ putraśatād varam // (「溜め池は百の井戸に勝る。祭式は百の溜め池に勝る。息子は百の祭式に勝る。真実は百の息子に勝る」)

<sup>242</sup>MD 7: saṃtaptānāṃ tvam asi śaraṇaṃ tat payoda priyāyāḥ saṃdeśaṃ me hara dhanapatikrodhaviśeṣitasya

おお、水を与える者よ、水を与えるゆえに、もし貴方が苦しむ者達の寄る辺 (śaraṇam=trāṇam) であるならば、その場合、私もまた別離に苦しんでいるのだから [私の] 音信を (saṃdeśam=vārtām) 妻の下へ運んでほしい (hara=naya)、即ち届けてほしい。

富の神の怒りで別離させられた [私]。このように [ヤクシャが] 苦しんでいることが示されている。

私 (雲) はどこへ向かえばいいのか。

このような問いに対して述べる。ヤクシャ達の御主の住居である、アラカーと呼ばれる都へ貴方は行かねばならぬ (gantavyā=yātavyā)。

そして、それ (神都アラカー) は知られ難いものではないということ述べる。外苑に、即ちカイラーサ山の園林に [いるシヴァ]。外にある遊園 (bāhyaṃ ca tad udyānaṃ ca) が [bāhyodyāna である]。そこ (外苑) にいるシヴァの頭上で輝く月光に宮殿が清められているそれ (神都アラカー)、即ち昼間でも白亜の大宮殿が清められている [神都アラカー]。

te について。krṭyānāṃ kartari vā [という A 2.3.71 の規則に基づいて、第六格名詞接辞が起こる。]<sup>243</sup>

8. 旅人の妻達は [夫の帰郷を] 確信して心安らぎながら、巻き毛の先を掻き揚げ、風道 (空) を昇る貴方を見上げるだろう。貴方の仕度ができた時、別離に悲しむ妻を他の誰が見捨てようか。その人が私のように行動を他に支配された者でないならば<sup>244</sup>。

/ gantavyā te vasatir alakā nāma yakṣeśvarānāṃ bāhyodyānasthitaharaśiraścandrikādhautaharmyā //

yakṣeśvarānāṃ という複数形については注 146 を見よ。

<sup>243</sup>A 2.3.71 krṭyānāṃ kartari vā // 「krṭya と呼ばれる krṭ 接辞で終わる項目と結びつく時、(行為主体) を表示する第六格名詞接辞が任意に起こる」

cf. A 3.1.96 tavyattavyānīyarah // 「動詞語根の後に tavyaT, tavya, anīyaR が起こる。これらの接辞は krṭya と呼ばれる」

<sup>244</sup>MD 8: tvām ārūḍham pavanapadavīm udgrhītālakāntāḥ prekṣiyante pathikavanitāḥ pratyaṃyād āśvasantyaḥ kaḥ saṃnaddhe virahavidhurāṃ tvayy upekṣeta jāyāṃ nā syād anyo 'py aham iva jano yaḥ parādhiṇavṛtīḥ //

風道を、即ち空を昇る貴殿を、旅人の妻達は、即ち別離する女達は巻き毛を掻き揚げて見上げるだろう。何故なら確信して(*pratyayāt=niścayotpādanāt*)心安らぐから。「この雲が現れた。必ずここに私達の夫は帰って来るに違いない」と考えて。

それ(雲)を目にしただけでどうして希望が生まれるのか。

このような問いに対して述べる。貴方の仕度ができるとき、即ち[貴方が]尽力する時、別離に悲しむ妻を誰が見捨てられようか(*upekṣeta=virahayet*)。他の人ももしそのような者でないならば[見捨てることはできない]。

どのような[人]か。私のように行動を他に支配された[人]。あるいはむしろ、どの他の人が妻を見捨てられようか(*ko'nyo jano jāyām upekṣeta*)、というのがこの箇所(の)の構文である。実に、自立する者達は妻達と共に喜びの中で雨季を過ごす。

*saṃnaddha* 等の語は、このような類いの者(雲等)に対する転義的用法である<sup>245</sup>。

次に一般的な教示を述べる<sup>246</sup>。

9. 貴方の親友であり、斜面には人々が崇拝を惜しまぬラグ家の主(ラーマ)の足の跡が残るその高山を抱いて、別れを告げよ。貴方と出会う度に長き別れを思って熱い涙を流し、愛情を顕にする彼に<sup>247</sup>。

<sup>245</sup>アーナンダヴァルダナは *Dhvanyāloka* 中で、*vyañjaka* (暗示表出するもの)を説明する際に当該詩節を引用し、*saṃnaddha* という語について論じている。詳細は上村 [1999: 175-176, 432] を参照されたい。

<sup>246</sup>旅立つ時には親友に別れの挨拶をするのが礼儀であり、当該詩節でヤクシャは雲にそのことを説いているとヴァッラバデーヴァは解釈している。

<sup>247</sup>MD 9: *āpṛcchasya priyasakham amuṃ tuṅgam āliṅgya śailaṃ vandyaiḥ puṃsāṃ raghupatipadair ankitam mekhalāsu / kāle kāle bhavati bhavatā yasya saṃyogam etya snehavyaktiś ciravirahajam muñcato vāspam uṣṇam //*

*kāle kāle* という反復表現は、マッリナータの注釈に従って普及(*vīpsā*)の意味で解釈した。なお、マッリナータは山が雲と出会う時期を雨季に限定している。*Meghadūta* の主題を考慮するならばそのように解釈するのが妥当であろうが、ヴァッラバデーヴァの注釈からは、彼が山と雲の出会う時期を雨季に限定していることは読み取れな

その山を、即ちチトラクータを抱いて別れを告げよ、即ち悲しみながら別れを告げよ。何故なら[山は]親友(*priyasakham=īṣṭamitram*)だから。実に雲達にとって山々は友である。そこ(山)から彼ら(雲達)は上昇するから。そして旅立つ時、友には別れが告げられる。

それはどのような[山]か。高い(*tuṅgam=unnatam*) [山]。さらに、一切の人々が崇拝を惜しまぬラーマの足で(*rāmapadaiḥ=rāmapādaiḥ*)、斜面に(*mekhalāsu=nitambabhāgeṣu*)印が付けられた(*ankitam=mudritam*) [山]。このように神聖さが表現されている。

友の性質を述べる。彼は、即ち山は時期の度に、即ち出会う全ての時に、貴方との出会いを得て、長き別れから生じる熱い涙を、即ち蒸気を放って愛情を顕にしている。彼は[貴方を]愛しているという意味である。実に、山々は雲達の降雨で潤い、蒸気を放出する。長い間友を見ていると涙と愛情が生まれる、これこそが友の証である。

*āpṛcchasya* について。「āN に先行される動詞語根 *nu* と *pracch* が追加されるべきである」[という *Vārttika* の規定]に基づいて *ātmanepada* が起こる<sup>248</sup>。親愛なる友(*priyaḥ cāsau sakhā ca*) というのが *priyasakha* である。*rājāhaṣsakhībhyas̄ tac* [という A 5.4.91 の規則に基づいて *ṬaC* 接辞が起こる。]<sup>249</sup> 出会いを得て(*saṃyogam etya*) について。[出会いは] 落涙に関して時間的に先行するもの、あるいは愛情表現に関して時間的に先行するものである。

また、貴方は一人きりではないだろうという

い。むしろ彼は、山は雲と出会った時にはいつでも涙を流して愛情を顕にしている、と解釈している。

<sup>248</sup>Vt 6 on A 1.3.21 *āni nupracchyoh //* 「āN に先行される動詞語根 *nu* と *pracch* が追加されるべきである」

MBh on Vt 6 ad A 1.3.21 *āni nupracchyor upasamkhyānam kartavyam / ānute śrgālah / āpṛcchte gurum iti //* 「āN に先行される動詞語根 *nu* と *pracch* が追加されるべきである。【例】「ジャッカルが吠える」(*ānute śrgālah*)・「彼は師に問う」(*āpṛcchte gurum*)」

cf. A 1.3.21 *krīdo 'nusamparibhyas̄ ca //* 「*anu*, *sam*, *pari*, *āN* に先行される動詞語根 *krīd* に *ātmanepada* が起こる」

<sup>249</sup>A 5.4.91 *rājāhaṣsakhībhyas̄ tac //* 「複合語の最終要素である *rājan*, *ahan*, *sakhi* という〈名詞語基〉(*prātipadika*)の後に、*ṬaC* 接辞が起こる」

ことを、吉兆を語って証明するために述べる。

10. 順風がとても緩やかに貴方を運び、左側ではこのチャータカ鳥が水を求めて甘く鳴いているから、懐妊に習慣付いた雌バラカ鳥は空に列をなし、目を魅する貴殿に必ずや付き添うだろう<sup>250</sup>。

以下の吉祥が見られるのだから、雌バラカ鳥達は目を魅する貴方に必ずや空で付き添うだろう (seviṣyante=śrayiṣyante) <sup>251</sup>。

何故か。このような問いに対して述べる。順風が貴方をとても緩やかに押しやり、また、このチャータカ鳥が、即ち孔雀が甘く鳴いているから。左側にいる (vāmaḥ=vāmapārsvasthaḥ)、あるいは魅力的に語る [チャータカ鳥]。水を切望する (toyagr̥dhnuḥ=jalam abhilāṣukaḥ) [チャータカ鳥]。雨季の兆しを見て雌バラカ鳥達もやって来るだろう。このこと (雌バラカ鳥達の到来) は雨季の性質である。

彼女らはどのようなものか。[雨季毎の] 懐妊ゆえに習慣が根付いている [雌バラカ鳥達]。実に雲の雷鳴で彼女達は懐妊するとされる<sup>252</sup>。列をなした

<sup>250</sup>MD 10: mandam mandam nudati pavanaś cānukūlo yathā tvām vāmaś cāyaṃ nadati madhuraṃ cātakas toyagr̥dhnuḥ / garbhādhānasthiraparicayā nūnam ābaddhamālāḥ seviṣyante nayanasubhagaṃ khe bhavantaṃ balākāḥ //

<sup>251</sup>マッリナータが順風・チャータカ鳥の鳴き声・雌バラカ鳥を見ることの三つそれぞれを、雲の吉祥を示唆するものとして解釈するのに対し、ヴァッラバデーヴァは順風・チャータカ鳥の鳴き声を雌バラカ鳥が付き添うことの吉祥として解釈している。

<sup>252</sup>'iti vārtā' という表現はあまり見慣れぬものであるが、この表現をヴァッラバデーヴァは Kumārasambhava 1.23 に対する注釈中でも用いている。

KS 1.23: tayā duhitrā sutarāṃ janitrī sphuratprabhāmaṇḍalayā cakāśe / vaiḍūryabhūmir navameghaśabdād udbhinnayā ratnaśalākayeva //

円光輝くその娘により、母は美しく輝いた。新たな雲の雷鳴で芽吹いた新芽のような宝石により、瑠璃の大地が美しく輝くように。

KST on KS 1.23: tayā putryā gauryā janitrī mātā suṣṭhu cakāśe reje / sphuratprabhāmaṇḍalayā lasatkāntipatalayā / prabhā hi mahatām abhyudayasūcikā / yathā

(ābaddhamālāḥ=racitapanktayaḥ) [雌バラカ鳥]。

mandam mandam は、過剰性の意味での反復表現 (dvitva) である<sup>253</sup>。

そして、貴方の苦勞は無駄にはならないだろうということ述べる。

11. そして貴方は旅路を遮られることなく、兄弟のその貞節な妻が日数の計算に明け暮れて生きながらえているのを必ずや目にするだろう。概して希望という絆は、別離の間に突然沈んでしまう女達の花の如き心を支えるのだから<sup>254</sup>。

兄弟のその妻が、即ち友の妻が生きながらえているのを (avyāpannam=amṛtam) 貴方は必ずや目にするだろう。

どのような [妻] か。日数の計算に明け暮れる、即ち「幾らかの時間が過ぎ、幾らかが残っている」というように、[呪いの] 期限の計算に明け暮れる [妻]。何故なら、一人の夫を持つ、即ち夫に貞節な [妻] だから。一人の夫を持つ女性 (ekāḥ patih yasyāḥ sā) が [ekapatnī] であり、彼女を [貴方は目にするだろう]。

もしこのような女性であるなら、その場合どうして生きながらえているのか。

vidū[dū]rākhyasyādrer vālavāyājāparanāmno bhūmir avanir dhanānagarjitotpannayā ratnaśalākayā maṇisūcyā kāntimatyā kāśate / tatra hi megharavena prāvṛṣi ratnāni jāyanta iti vārtā // (「その、即ち娘ガウリーにより、母は (janitrī=mātā) は美しく輝いた (cakāśe=reje)。円光輝く、すなわち光の覆いが輝く [娘]。実に、光 (prabhā) は偉大なる人達の繁栄を示唆するものである。ヴァーラヴァーヤージャという異名を持つ、ヴィドゥーラと呼ばれる山の大地が (bhūmiḥ=avaniḥ)、雨雲の雷鳴から生じた新芽のような宝石により、即ち光り輝く新芽のような宝石の先により、輝くように。実に、そこ (ヴィドゥーラ山) には雲の雷鳴により雨季に宝石が生じると言われる。)」

<sup>253</sup>過剰性 (ādhikya) の意味での反復表現については Meghadūta 13 に対するヴァッラバデーヴァの注釈を見よ。

<sup>254</sup>MD 11: tāṃ cāvaśyaṃ divasagaṇanātparām ekapatnīm avyāpannām avihatagatir drakṣyasi bhrātrjāyām / āśābandhaḥ kusumasadr̥ṣaṃ prāyaśo hy aṅganānām sadyaḥpātapraṇayi hṛdayaṃ viprayoge ruṇaddhi //

このような問いに対して述べる。何故なら女達が夫と別離している時、[女達の]心を希望という絆は概して支える(*ruṇaddhi=avalambate*)から<sup>255</sup>。まさに花の如き[心]だから、突然沈んでしまいやすい、即ちすぐに壊れてしまいやすい[心]。そのような類いの[心]さえも希望は支える。「私達は必ず夫と再会するだろう」と考えて。希望という絆は蜘蛛の巣のようなものである。例えば、蜘蛛の巣(*āsābandha*)が、即ち蜘蛛が作った糸の集まりが、風に飛ばされてきた枯れた花をもつかまえるように[希望という絆は、女達の萎れかかった花の如き心を支える]。

ca という語は前[詩節]の文章を考慮して、接続(*samuccaya*)の意味で使用されている。他の箇所でも同様である。*praṇaya*は、愛情(*prīti*)と専心(*unmukhatā*)を意味する。*ekapatnīm*について。*nityam sapatnyādiṣu*[という A 4.1.35]に基づいてNiP接辞が起こり、n音が代置される<sup>256</sup>。*bhrātrjāyā*という語に関して、*rto vidyāyonisambandhebhyah*[という A 6.3.23]に基づく *aluk* が起きていないのは一考を要する<sup>257</sup>。

<sup>255</sup> マリナータは *hrdaya* を「命」(*jīvita*)と解釈していたが、ヴァツラバデーヴァは特に説明しない。ここでは Mallinson[2006]の英訳に従って *hrdaya* を「心」と訳す。

<sup>256</sup> A 4.1.35 *nityam sapatnyādiṣu* // 「sapatnī群に含まれ、NiP接辞を後続する *pati* の最終音に、必ず n音が代置される」

<sup>257</sup> A 6.3.23 *rto vidyāyonisambandhebhyah* // 「複合語の先行要素であり、短音で終わり、知識との関係を適用根拠とする語(*vidyāsambandha*)と母体との関係を適用根拠とする語(*yonisambandha*)に後続する第六格名詞接辞に、*aluk* が起こる(=ゼロは代置されない)。複合語の後続要素が、知識との関係を適用根拠とする語か母体との関係を適用根拠とする語である場合に限り」

A 6.3.23は、或る条件化では、複合語の先行要素の第六格名詞接辞にゼロ(*luk*)が代置されないことを規定している。ここでヴァツラバデーヴァは、当該の '*bhrātrjāyā*' にはその規則が適用されるべきであり、本来ならば '*bhrātuhjāyā*' とならねばならないと指摘している。複合語の先行要素である *bhrātr* (兄弟)と後続要素である *jāyā* (妻)という語は、いずれも母体との関係を適用根拠とする語(*yonisambandhapravrttinimitaka*)なので(BM on SK)、A 6.3.23の条件を満たす。よって A 6.3.23が適用され、*bhrātr* の第六格名詞接辞にゼロは代置されず、'*bhrātuhjāyā*' という複合語が派生する。なお、*Manusmṛti* では *jāyā* について次のような語義解釈がなされている。

別の旅仲間の豊富さを述べる<sup>258</sup>。

12. マーナサ湖を切望する水鳥達は、大地にシリンドウラを満たす、耳に心地よく実りある貴殿の雷鳴を聞きつけて、蓮茎の芽の小片を食糧とし、カイラーサまで貴方の空の旅仲間となろう<sup>259</sup>。

その、貴方の雷鳴を聞きつけて、水鳥達はカイラーサ山まで貴方の旅仲間となろう。何故ならマーナサ湖を切望している(*mānasotkāḥ=mānasonmanasaḥ*)から。実に雨季には、彼ら(水鳥達)は休息のためにそこ(マーナサ湖)へ行く。

その雷鳴とはどのようなものか。このような問いに対して述べる。それは大地に(*mahīm=avanim*)シリンドウラ(*silindhra*)を満たすことが、即ちシリンドウラと呼ばれる花々を満たすことができる(*prabhavati=śaknoti*)。実にそれら(シリンドウラ)は雲の雷鳴によって生じる。まさにこれ故に、それ(雲の雷鳴)は実りあるもの(*avandhyam=saphalam*)である。耳を魅する、即ち耳に幸をもたらす[雷鳴]。このようにお世辞が述べられている<sup>260</sup>。

どのようなハンサ鳥達か。蓮の茎の芽の小片を(*chedaḥ=khandah*)旅の食糧とする(*pātheyam=adhvabhojanam*)者達がそのように言われる。あるいは、蓮の茎の芽の小片ゆえ

MS 9.8: *patir bhāryām sampraviśya garbho bhū-tveha jāyate / jāyāyās tad dhi jāyātvaṃ yad asyām jāyate punaḥ //*

夫は妻の中に入り、胎児となってこの世に生まれる。彼女の中に再び生まれるから、実に妻は *jāyā* と言われる。

<sup>258</sup> *sampatti* の解釈については注 173 を見よ。

<sup>259</sup> MD 12: *kartuṃ yac ca prabhavati mahīm ucchilī-ndhrām avandhyam tac chrutvā te śraṇaṣubhagam garjitaṃ mānasotkāḥ / ā kailāsād visakīśalayacchedapātheya-vantaḥ sampatsyante nabhasi bhavato rājahamsāḥ sahāyāḥ //*

<sup>260</sup> 「耳を魅する」(*śraṇaṣubhaga*)という表現は、*Meghadūta* 6でなされる表現と同様、ヤクシャから雲へのお世辞(*cātipada*)であるとヴァツラバデーヴァは解釈している。ヤクシャは音信の運搬を引き受けてもらうため、雲の機嫌をとっているのである。詳細は同詩節に対するヴァツラバデーヴァとマリナータの注釈を見よ。

に、旅の食糧を持つ者達 (**bisakisalayaçchedaiḥ pātheyavantah**) と分析される。

**ā kailāsāt** について。avyayībhāva が任意に形成される<sup>261</sup>。

13. 水を与える者よ、私が語る貴方の旅の良好な道をまず聴くのだ。その次に耳に心地よい音信を聴くことになろう。そこ (旅路) では、疲労困憊した時には山で足を休め、衰弱しきった時には河水を飲み、貴方は軽快に進み行くだろう<sup>262</sup>。

おお、水を与える者よ、私が語るから、貴方が行くに相応しい道をまず聴くのだ<sup>263</sup>。そのすぐ後に、耳で飲むに値する、即ち耳に楽しい音信を聴くことになろう (**śroṣyasi=niśamayīsyasi**)。

どのような道なのか。このような問いに対して [旅路の] 良好さを **khinnah khinnah** 云々と述べる。そこで、即ち旅路で、貴方は疲労困憊した時には山々に足を置いてから (**padam nyasya=kramam nikṣipyā**) 進み行くだろう (**gantāsi=yāsyasi**)。そして、衰弱しきった時には河の重くない水を味わって、即ち飲んで素早く進み行くだろう。実に、旅路では給水と休息が多くとられる。

**tadanu** や **tadupari** 等は、先行する詩人に使用例が認められるから正しい語である。実に、第六格名詞接辞で終わる項目と不変化詞との複合語形成は禁止されている<sup>264</sup>。 **śrotapeyam**

<sup>261</sup> cf. A 2.1.13 ān maryādābhividhyoḥ // 「始点と終点の限界を示す時、āN は、意味的繋がりのある第五格名詞接辞で終わる項目と任意に複合語を形成し、その複合語は avyayībhāva と呼ばれる」

<sup>262</sup> MD 13: mārṅam tāvac chṛṇu kathayatas tvatprāyānukūlam saṃdeśam me tadanu jalada śroṣyasi śrotapeyam / khinnah khinnah śikhariṣu padam nyasya gantāsi yatra kṣīṇah kṣīṇah parilaghu payah srotasām copayujya //

<sup>263</sup> マッリナータは詩節中の **kathayataḥ** を奪格で理解し、**me** は **saṃdeśam** にかけて読んでいたが、ヴァッラバデーヴァは **kathayataḥ** を属格で理解し、**me kathayataḥ** と読んでいるようである。

<sup>264</sup> A 2.2.11 pūraṅagunasuhitārthasadvayayatavyasamānādhikaraṇena // 「第六格名詞接辞で終わる項目は、序数を意味する項目・属性を意味する項目・満足を意味する項目・SAT (ŚatR, ŚānaC) で終わる項目・不変化詞・tavya

について。krtyair adhikārthavacane [という A 2.1.33 の規則に基づいて複合語を形成している。]<sup>265</sup> **khinnah khinnah** 等は過剰性の意味で反復表現 (dvitva) となっているから、karmadhāraya 同様に扱われて名詞接辞にゼロが代置されることはない<sup>266</sup>。そして、過剰性の意味で反復表現がなされることは、āmreḍita という〈大術語〉 (mahatī samjñā) によって知らしめられている<sup>267</sup>。 **gantāsi** について。[動詞語根 gam の後

で終わる項目・指示対象を同じくする項目とは複合語を形成しない。]

**tadanu** は tasya anu と分析される。tasya は第六格名詞接辞で終わる項目 (saṣṭhyanta) であり、anu は不変化詞 (avyaya) なので、通常 A 2.2.11 によりその複合語形成は禁止される。

<sup>265</sup> A 2.1.33 krtyair adhikārthavacane // 「賞賛 (stuti) あるいは非難 (nindā) を伝える誇張表現 (adhikārthavacana) が理解される時、〈行為主体〉あるいは〈手段〉を表示する第三名詞接辞で終わる項目は、krtya 接辞で終わる項目と任意に複合語を形成し、その複合語は tatpuruṣa と呼ばれる」

<sup>266</sup> cf. A 1.2.46 krttaddhitasamāsā ca // 「krt 接辞で終わる項目、taddhita 接辞で終わる項目及び複合語も〈名詞語基〉 (prātipadika) と呼ばれる」

cf. A 2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ // 「〈動詞語根〉という術語で呼ばれるものと〈名詞語基〉という術語で呼ばれるものの内部に含まれる名詞接辞にゼロが代置される」

cf. A 8.1.11 karmadhārayavad uttaraṣu // 「この先、反復表現 (dvirvacana) には karmadhāraya 同様の文法操作が起こると理解すべし」

<sup>267</sup> A 8.1.2 asya param āmreḍitam // 「反復表現 (punarukta) 中の第二番目の語形は āmreḍita という術語で呼ばれる」

マッリナータが Meghadūta 1.9 に対する注釈中で展開していた議論と同様の議論である。もし、A 8.1.11 の支配下にある規則に依拠して当該の **'khinnah khinnah'** や **'kṣīṇah kṣīṇah'** という反復表現を説明しようとすれば、不都合が生じる。何故なら、その場合それらには karmadhāraya 同様の文法操作がなされて、名詞接辞にゼロが代置され、**'khinnakhinnah'**、**'kṣīṇakṣīṇah'** となるはずだからである。ヴァッラバデーヴァによれば、当該の反復表現は過剰性 (adhikya) の意味でなされているので文法的に問題はない。過剰性の意味での反復表現をパーニニ自身は規定していないが、ヴァッラバデーヴァは A 8.1.2 で使用される āmreḍita という〈大術語〉 (mahatī samjñā) を根拠に、その意味で反復表現がなされることを導いている。つまり反復表現中の二番目の語形に対して単なる〈術語〉 (samjñā) でなく、「繰り返されたもの」という意味を持ち、〈術語〉対象の性格を表すことができる āmreḍita という〈大術語〉を使用しているということは、そこにパーニニは付加性を意図している、即ち過剰や余剰の意味での反復表現を認めているとヴァッラバデーヴァは解釈している。何か「繰り返されれば、そこに付加や余剰が発生するのは当然である。だからパーニニは、過剰性の意味でも反復表現がなされ得ることを意図して、反復表現中の二番目の語形に「繰り返されたもの」とい

に] IUT接辞が起こっている<sup>268</sup>。parilaghu は副詞である。

道の始まりを述べる。

14. 潤う葦が生育するこの地から、北を向いて空を駆け上がれ。「風が山の峯を運んでしまわないかしら」ととても怯えながら顔を上げた無垢なシッダの妻達に尽力を見られつつ。旅路では方処の象達の巨大な鼻の攻撃を避けながら<sup>269</sup>。

この地から、貴方は北を向いて空を駆け上がれ。潤う葦(niculāḥ=vetasāḥ)がある[この地]。このように雨季の描写がなされている。

貴方はどのような者か。とても怯えながら、即ち恐れながら顔を上げた、無垢なシッダの妻達に、このように尽力を見られる(dr̥ṣṭotsāhaḥ=dr̥ṣṭodyamaḥ) [貴方]<sup>270</sup>。

う意味を持つāmredita という〈大術語〉を使用した、とヴァッラバデーヴァは解釈しているのである。

なお Nyāsa でも、A 8.1.2 中のāmredita という語が過剰性の意味で反復表現が起こることを知らしめる指標(jñāpaka)であることが述べられている。Nyāsa on KV ad A 8.1.2: āmreḍitam iti mahatyāḥ samjñāyāḥ karaṇam anvarthasamjñāyijñānārtham / āmreḍyata ādhikyenocyata ity āmreḍitam / tenehāpi bhavati—aho darśanīyā aho darśanīyā / mahyaṃ rocate mahyaṃ rocata iti / darśanīyatvasya ruceś cādhikyaṃ dyotayitum atra draṣṭavyaṃ dvirvacanam / etad eva mahatyāḥ samjñāyāḥ karaṇam jñāpakam—ādhikyābhidhāne dvirvacanam bhavati // (「āmredita という語は、〈大術語〉の根拠であり、語源の意味を有する〈術語〉を示すことを目的とする。繰り返されるもの(āmreḍyate)、即ち付加的に述べられるもの(ādhikyaṃ ucyate)がāmredita である。よって次のような場合にも[反復表現が]起こる。「ああ、何と美しい女性だろう」(aho darśanīyā aho darśanīyā)、「彼は私のことが好きでたまらない」(mahyaṃ rocate mahyaṃ rocate)。美貌と熱意の過剰性を標示するためにここで見られるべきは反復表現(dvirvacana)である。まさにこれ(āmredita という語)は〈大術語〉の根拠であり、過剰性が表示されるべき時に反復表現が起こることを知らしめる指標である)」

<sup>268</sup>A 3.3.15 anadyatane lut // 「今日(話者が当該の発話をなす日)を除く未来に属する対象である〈行為〉を表示する動詞語根の後に IUT接辞が起こる。」

<sup>269</sup>MD 14: adreḥ śṛṅgaḥ harati pavanaḥ kiṃsvid ity unmukhībhīr dr̥ṣṭotsāhaś cakitacakitam mugdhasiddhāṅganābhiḥ / sthānād asmāt sarasaniculād utpatodaṇmukhaḥ khaṃ diṇnāgānām pathi pariharan sthūlahastāvalehān //

<sup>270</sup>siddhāṅganābhiḥの解釈はマッリナータの解釈に従う。

どのように[見られるのか]。このような問いに対して述べる。風が(pavanaḥ=vāyuḥ)山の峰を運んでしまわないかしら(harati=apanayati) [というように]。そしてこれ故、[山の峰の]落下を懸念して[シッダ女達は]怯えるのである。まさにこれ故に[彼女らは]無垢なのである。

何をなしながらか。旅路では、方処の象達が(diṇnāgānām=āśākariṇām)巨大な鼻で舐めてくるのを、即ち巨大な鼻でつかみ掛かってくるのを避けながら。実に、彼ら(象達)は、敵対する二本の牙を動かしてそれ(雲)を[鼻で]つかもうとする。また方処の象達は下界からやって来る。そのことを述べる<sup>271</sup>。「マンダーキニー河(Mandākinī)には方処の象達のマダ液で汚れた水[だけ]が残り—」<sup>272</sup>。さらにまた[次のように言われる]。「解き放たれた方処の象達の戯れる、天界のガンガー河の水流が音を立てていたから—」<sup>273</sup>。

cakitacakitam について。類似性(prakāra)の意味で反復表現がなされている<sup>274</sup>。

## 15. ここで、宝石の光彩が織り交ざっ

<sup>271</sup>以下に、天を流れるガンガー河へ水遊びをしにやって来た方処の象達を描いた詩節が Kumārasambhava と Raghuvamśa から引用されるが、この引用の意図は定かではない。単に下界の象達が天界の河に遊びに来ることを説明しただけであろうか。あるいはこのような詩節を引用することによって、地下世界にいる象達がなげ上空を飛ぶ雲を襲うことができるのかを説明しようとしている、即ち本来は地下世界にいる象達も天にやって来る場合があることを説明しようとしているとも考えられる。いずれの詩節の注釈中でも、ヴァッラバデーヴァは方処の象達は水遊び(jalakrīḍā)をしに河へやって来たとして述べるのみで、当該の問題に関する重要な説明は特になしていない。

<sup>272</sup>KS 2.44: mandākinyāḥ payaḥ śeṣaṃ digvāraṇa-madābilam / hemāmbhoruhasasyānām tadvāpyo dhāma sāmpratam // (「マンダーキニー河には方処の象達のマダ液で汚れた水[だけ]が残り、今や彼の池[だけ]が黄金の蓮の実る場である」)

<sup>273</sup>RV 1.77: sa śāpo na tvayā rājan na ca sārathinā śrutah / nadaty ākāśagaṅgāyāḥ srotasy uddāmadiggaje // (「王よ、解き放たれた方処の象達の戯れる、天のガンガー河の水流が音を立てていたから、貴方と馭者はその呪いを聞かなくなった」)

<sup>274</sup>A 8.1.12 prakāre guṇavacanasya // 「属性間の類似性が表示されるべき時、属性表示語(guṇavacana)の反復表現が起こる。そしてそれは karmadhāraya 同様に扱われる」

cf. A 8.1.11 karmadhārayavad uttareṣu // 「この先、反復表現(dvirvacana)には karmadhāraya 同様の文法操作が起こると理解すべし」

たかのように美麗なる、インドラの神弓(虹)の一部が蟻塚の頂上から眼前に現れる。それにより、貴方の黒き体は素晴らしい美を纏うことだろう。光彩放つ孔雀の羽飾りにより、牛飼いの装いをしたヴィシュヌの黒き体が美を纏うように<sup>275</sup>。

ここで、蟻塚の頂上から、即ち巨大な黒蟻が掘った土の塊の頂上から、インドラの(ākhaṇḍalasya=indrasya) 神弓の一部が(dhanuṣkhaṇḍam=cāpaikadeśaḥ) 眼前に(purastād=agre) 現れる(prabhavati=utpadyate)。「蟻塚の内部には蛇がいるから、雨季には神の弓(虹)が現れる」と伝承されている<sup>276</sup>。

それ(弓)はどのようなものか。色彩豊かであるから、宝石の光彩が織り交ざったかのように、即ち多種の宝石の光彩が織り交ざったかのように華麗なる(prekṣaṇīyam=ramyam) [弓]。そしてそれにより、貴方の黒き体は素晴らしい美を得ることだろう。牛飼いの姿をとったヴィシュヌの体が、光彩を放つ孔雀の羽飾りにより、美を得たように。実に、概して牛飼いは、シャバラ達と同様に孔雀の羽飾りを身に付けている。また、詩人は雨季の描写も関連さ

<sup>275</sup>MD 15: ratnacchāyavyatikara iva prekṣyam etat purastād valmīkāgrāt prabhavati dhanuṣkhaṇḍam ākhaṇḍalasya / yena śyāmaṃ vapur atitarāṃ kāntim āpatsyate te varheṇeva sphuritarucinā gopaveśasya viṣṇoḥ //

当該詩節の比喩構造については注 209 を見よ。

<sup>276</sup>Brhatsamhitā には、「虹」に関する次のような説明が見られる。

BS 35.1: sūryasya vividhavarṇāḥ  
pavanena vighattitāḥ karāḥ sābhre /  
viyati dhanuṣsamsthānā  
ye dr̥śyante tad indradhanuḥ //

種々の色をした太陽の光が雲のある空で風に散らされ、弓の如き形に見えるのが虹である。

BS 35.2: kecid anantakuloraga-  
niḥśvāsodbhūtam āhur ācāryāḥ /  
tad yāyināṃ nr̥pāṇām  
abhimukham ajayāvahaṃ bhavati //

蛇王安ナタの一族の蛇達の吐息から[虹は]生じると或る先生達は言う。それは出陣する王達の前に現れると敗北をもたらす。

せてなしているから、旅路を教える際にもこの詩節は時期はずれのものではない。

織り交ざったもの(vyatikaraḥ=miśrī-bhāvaḥ)。dhanuṣkhaṇḍa について。nityaṃ samāse 云々 [という A 8.3.45] に基づいて [h 音に] ṣ 音が代置される<sup>277</sup>。

(未完)

<sup>277</sup>A 8.3.45 nityaṃ samāsa anuttarapadaasthasya // 「複合語の領域で、k 系列音と p 系列音が後続する時、後続要素でない、is, us で終わる項目の visarga には常に ṣ 音が代置される」

A 8.3.45 によって dhanus の visarga、即ち h 音には必ず ṣ 音が代置されるので、マッリナータが与える 'dhanuṣkhaṇḍam' というテキストは文法的に間違っていることになるが、マッリナータ、Nandargikar[1979]、Kale[1987] 等はそのことについて全く言及しない。

## 参考文献及び略号

### (1) 一次文献

**A** Pāṇini. *Aṣṭādhyāyī*. See KV.

**Ā** Ācārya's edition of *Meghadūta*. See MD (1).

**AAH** Vāgbhāṭa. *Aṣṭāṅgahr̥daya*: Bhiṣagāchārya Hariśāstrī Prādkar Vaidya ed. *Aṣṭāṅgahr̥daya (a Compendium of the Ayurvedic System) Composed by Vāgbhāṭa with the Commentaries 'Sarvāṅgasundarā' of Arunadatta and 'Āyurvedarasāyana' of Hemādri*. Collated by Annā Moreśwar Kunte and Kriṣṇa Rāmchandra Sāstrī Navre. Reprint, Varanasi: Krishnadas Academy. 1995.

**AAS** Śāśvata. *Anekārthasamuccaya*: Narayan Nathaji Kulkarni ed. *The Anekārthasamuchchaya of Śāśvata. A lexicon of Sanskrit Words. Edited with Introduction discussing the Date of Sasvata, Critical Note, Glossary of Words and Ekākṣarakāṇḍaḥ of Another Lexicon named Nānārtharatnamālā*. Poona: Oriental Book Agency. 1929.

**AmK** Amarasiṃha. *Amarakośa: Nāmalingānuśasana alias Amarakośa of Amarasiṃha with the Vyākhyāsuddhā or Rāmāśramī of Bhānuji Dīkṣita*. The Brajajivan Prachyabharati Granthamala 1. 1st ed (reprinted from 1915 edition of Nirnaya Sagar Prese, Bombay), Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan. 1984.

**APP** Mallinātha. *Amarapadapārijāta*: A. A. Ramathan ed. *Amarakośa [I] with the Unpublished South Indian Commentaries. Amarapadavivṛti of Liṅgayasurin and Amarapadapārijāta of Mallinātha*. Madras: The Adyar Library and Research Centre. 1971.

**APV** Liṅgayasūri. *Amarapadavivṛti*. See APP.

**ARM** Halāyudha. *Abhidhanaratnamālā*: Th. Aufrecht ed. *Halayudha's Abhidhanaratnamala. A Sanskrit Vocabulary, edited with a Sanskrit-English Glossary*. Reprint, Delhi: Indian India. 1975.

**BM** Vāsudevadīkṣita. *Bālamānoramā*. See SK.

**BS** Varāhamihira. *Bṛhatsaṃhitā*: M. Ramakrishna Bhat ed. *Varāhamihira's Bṛhat Saṃhitā with English Translation, Exhaustive Notes and Literary Comments*. Part One. Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers. 1997.

**DhĀ** Ānandavardhana. *Dhvanyāloka*: K. Krishnamoorthy ed. *Dhvanyāloka of Ānandavardhana. Critically edited with Introduction, Translation*

& Notes by K. Krishnamoorthy, with a Foreword by K. R. Srinivasa Iyengar. 2nd ed, Delhi: Motilal Banarsidass. 1982.

**DhP** Pāṇini. *Dhātupāṭha*: Sumitra M. Katre ed. *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini. Roman Transliteration and English Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass. 1989.

**K** Kale's edition of *Meghadūta*. See MD (3).

**KA** Bhāmaha. *Kāvyaḷamkāra*: D. T. Tatcharya Siromani ed. *Bhāmaha's Kāvyaḷamkāra with Udyāna Vṛtti, a Lucid Commentary, English and Sanskrit Introduction, (Index), and an Appendix Dealing with Alankarikas*. Foreword by M. Krishnamachariar. Tiruvadi: The Srinivasa Press. 1934.

**KĀ** Daṇḍin. *Kāvyaḷadarśa*: O. Böhtlingk ed. *Daṇḍin's Poetik (Kāvyaḷadarśa)*. *Sanskrit und Deutsch*. Leipzig: Verlag Von H. Haessel. 1890.

**KAS** Vāmana. *Kāvyaḷamkārasūtra*: Carl Cappeller ed. *Vāmana's Lehrbuch der Poetik*. Jena: Verlag von Hermann Dufft. 1875.

**KASV** Vāmana. *Kāvyaḷamkārasūtravṛtti*. See KAS.

**Kātyāyanī** Āchārya Śrī Charaṇatīrtha Mahārāj. *Kātyāyanī: Meghadūtam of Mahākavi Kālidāsa with the Katyayani Sanskrit Commentary and English Translation*. Kashi Sanskrit Series 219. Varanasi : Chowkhamba Sanskrit Series Office. 1973.

**KS** (1) Kālidāsa. *Kumārasaṃbhava*: M. S. Narayana Murti ed. *Vallabhadeva's Kommentar (Śāradā Version) zum Kumārasaṃbhavam des Kālidāsa*. Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 20, I. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag. 1980.

(2) —. *Kumārasaṃbhava*: Wāsudeva Lakṣmana Śāstri Pansikara ed. *The Kumārasaṃbhava of Kālidāsa with the Commentary (the Sanjivini) of Mallinātha (1-8 sargas) and of Sītārāma (8-17 sargas)*. Reproduction of the Earlier Edition of Nirnaya Sagara Press. Delhi: Nag Publishers. 1985.

**KST** Vallabhadeva. *Kumārasaṃbhavaṭīkā*. See KS (1).

**KV** Vāmana and Jayāditya. *Kāśīkāvṛtti*: Śrīnārāyaṇa Miśra ed. *Kāśīkāvṛtti of Jayāditya-Vāmana, along with Commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjalī of Haradatta Miśra*. 6 vols. Ratnabharati Series 5-10. Varanasi: Ratna Publications. 1985.

- Lakṣmī** Ācārya Śrī Kṛṣṇamohana Śāstrī. *Lakṣmī: Ācārya Śrī Kṛṣṇamohana Śāstrī ed. Śrīviśvanāthakavirājanītaḥ sāhityadarpaṇaḥ 'lakṣmī' ṭīkā-ṭippanīvibhūṣitaḥ. Kāśī-Saṃskṛta-Granthamālā* 145. Banaras: The Chowkhamba Sanskrit Series Office. 1955.
- Mahābhārata** Vyāsa. *Mahābhārata*: Vishnu S. Sukthankar ed, with the Cooperation of S. K. Belvalkar, A. B. Gajendragadkar, V. Kane, R. D. Karmarkar, P. L. Vaidya, S. Winternitz, R. Zimmermann, and Other Scholars and illustrated by Shrimant Balasaheb Pant Pratinidhi. (Since 1943 ed. S. Belvalkar). *The Mahābhārata*. 19 Vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1927-1959.
- MBh** Patañjali. *Mahābhāṣya*: F. Kielhorn ed. *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali, Third Edition, Revised and Furnished with Additional Readings, References and Select Critical Notes by K. V. Abhyankar*. 3 Vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1: 1962; 2: 1965; 3: 1972.
- MD** (1) Kālidāsa. *Meghadūta*: Nārāyaṇ Rām Ācārya ed. *Mahākavikālidāsaviracitaṃ meghadūtam. Mallināthapraṇītasamjivīvinīvyākhyayā, ṭippanī-pāthāntara-parīṣṭādibhiḥ ca sanāthīkṛtam*. 16th ed, Bombay: Nirnaya Sagar Press. 1953.  
 (2) —. *Meghadūta*: E. Hultsch ed. *Kālidāsa's Meghadūta edited from Manuscripts with the Commentary of Vallabhadeva and Provided with a Complete Sanskrit-English Vocabulary*. London: Royal Asiatic Society, 1911 and reprinted (New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers, 1998) with a New Foreword and Select Bibliography by Albrecht Wezler.  
 (3) —. *Meghadūta*: M. R. Kale ed. *The Meghadūta of Kālidāsa. Text with the Commentary of Mallinātha, English Translation, Notes, Appendices and a Map*. Reprint of 7th ed, Delhi, Varanasi, Patna: Motilal Banarsidass Publishers. 1987.  
 (4) —. *Meghadūta*: Walter Hardeing Maurer ed. *Sugamānvayā Vṛtti. a Late Commentary in Jaina Sanskrit on Kālidāsa's Meghadūta by the Jaina Muni Sumativijaya, Critically edited with an Introduction and Explanatory and Critical Notes. Vol. 1: Introduction and Text*. Building Centenary and Silver Jubilee Series 5. Poona: Deccan College. 1965.  
 (5) —. *Meghadūta*: Gopal Raghunath Nandargikar ed. *The Meghadūta of Kālidāsa with the Commentary of Mallinātha, a Literal English Translation, Copious Notes in English, and Various Readings*. Reprint, Delhi: Bharatiya Book Corporation. 1979.
- (6) —. *Meghadūta*: N. P. Unni ed. *Meghasandeśa of Kālidāsa with the Commentaries Pradīpa of Dakṣiṇāvartanātha, Vidyullatā of Pūrṇasarasvatī, Sumanoramanī of Parameśvara, edited with an Elaborate Introduction*. Delhi, Varanasi: Bharatiya Vidya Prakashan. 1987.
- MDV** Vallabhadeva. *Meghadūtavivṛti*. See MD (2).
- MS** Manu. *Manusmṛti*: Suman Olivelle. ed. *Manu's Code of Law, a Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra with the Editorial Assistance of Suman Olivelle*. Oxford University press. 2005.
- N** Nandargikar's edition of *Meghadūta*. See MD (5).
- NŚ** Bharata. *Nāṭyaśāstra*: Pushpendra Kumar ed. *Nāṭyaśāstra of Bharatamuni, Text, Commentary of Abhinava Bhāratī by Abhinavaguptācārya and English Translation*. 3 vol. English Translation and Index by M. M. Ghosh. Edited, Introduction and Index by Pushpendra Kumar. Dillī, Bhārata: Nyū Bhāratiya buka kāraporeṣan. 2006.
- Nyāsa** Jinendrabuddhi. *Nyāsa*. See KV.
- Prabhā** Rangacharya Raddi. *Prabhā*: Vidyābhūṣaṇa Pandit Rangacharya Raddi Shastri ed. *Kāvya-darśa of Daṇḍin. Edited with an Original Commentary by Vidyābhūṣaṇa Pandit Rangacharya Raddi Shastri, Second ed. by K. R. Potdar*. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1970.
- Pradīpa** Dakṣiṇāvartanātha. *Pradīpa*. See MD (6).
- Prakāśa** Helārāja. *Prakāśa*. See VP.
- PYBh** Vidyānātha. *Pratāparudrayaśobhūṣaṇa*: Kamalāśaṅkara Prāṇaśaṅkara Trivedī ed. *The Pratāparudrayaśobhūṣaṇa of Vidyānātha with the Commentary, Ratnāpaṇa, of Kumārasvāmin, Son of Mallinātha, and with a Critical Notice of Manuscripts, Introduction, Critical and Explanatory Notes and an Appendix Containing the Kāvyaśloka of Bhāmaha*. Bombay: Government Central Press. 1909.
- RA** Vālmīki. *Rāmāyaṇa*: Wāsudev Laxman Śāstrī Paṇśīkar ed. *Rāmāyaṇa of Vālmīki with the Commentary (Tilaka) of Rāma*. 2 vols. Delhi, Varanasi: Indological Book House. 1983.
- RĀ** Kumārasvāmin. *Ratnāpaṇa*. See PYBh.

- RV** (1) Kālidāsa. *Raghuvamśa*: Dominic Goodall and Harunaga Isaacson ed. *The Raghupañcikā of Vallabhadeva being the Earliest Commentary on the Raghuvamśa of Kālidāsa*. Volume 1. Critical Edition with Introduction and Notes. Groningen: Egbert Forsten. 2003.
- (2) —. *Raghuvamśa*: Gopal Ragnath Nandargikar ed. *The Raghuvamśa of Kālidāsa with the Commentary of the Mallinātha, edied with a Literal English Translation, with Copious Notes in English Intermixed with Full Extracts, illustrating the Text, from the Commentaries of Bhaṭṭa Hemādri, Chāritravardhana, Vallabha, Dinakaramiśra, Sumativijaya, Vijayagaṇi, Vijayānandasūri's Varacharaṇasvevaka and Dharmameru, with Various Readings*. 4th ed, Delhi, Patna, Varanasi: Motilal Banarsidass. 1971.
- Samjīvinī** Mallinātha. *Samjīvinī*. See KS (2), MD (1), (3), (5), RV (2).
- Sarvaṃkaṣā** Mallinātha. *Sarvaṃkaṣā* See ŚV (1).
- SD** Viśvanātha. *Sāhityadarpana*: Drugāprasāda Dvivedī ed. *Sāhityadarpana of Viśvanātha*. Reprinted from 1922 Edition of Nirṇaya Sagar Press, Bombay. New Delhi: Meharchand Lachhmandas. 1982.
- SGAV** Sumativijaya. *Sugamānvayā Vṛtti*. See MD (4).
- SK** Bhaṭṭojidīkṣita. *Siddhāntakaumudī*: Giridhara Śarmā Caturveda and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara ed. *Śrīmadbhaṭṭojidīkṣitaviracitā vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī (samāsaprabhṛtita-dhitaparakaraṇāntā) śrīmadvāsudevadīkṣitapraṇīṭayā bālanoramākhyavyākhyayā śrīmajjñānendrasarasvatīviracitayā tattvabodhinyākhyavyākhyayā ca sanāthitā*. Varanasi: Motilal Banarsidass. 1977.
- SM** Parameśvara. *Sumanoramaṇī*. See MD (6).
- Suvṛ** Kṣemendra. *Suvṛttatilaka*: Nyāyopādhyāya Kāvyatīrtha & Paṇḍita Śrīduṇḍhirājaśāstri ed. *Suvṛtta Tilaka by Mahākavi Śrī Kṣemendra*. Haridas Sanskrit Series 26. Varanasi: The Chowkhamba Sanskrit Series Office. 1933.
- ŚV** (1) Māgha. *Śīsupālavadhā*: Pandit Durgāprasāda and Pandit Sivadatta ed, revised by T. Śrinivāsa Venkatrāma Śarma. *The Śīsupālavadhā of Māgha with the Commentarry (Sarvaṃkaṣā) of Mallinātha*. 8th ed, Bombay: Pāndurang Jāwajī. 1923.
- (2) —. *Śīsupālavadhā*: Ram Chandra Kak and Harabhata Shastri ed. *Māghabhaṭṭa's Śīsupālavadhā, the Commentary (Sandeha-Viśauśadhi) of Vallabhadeva (Complete)*. Delhi: Bharatiya Book Corporation. 1990.
- SVO** Vallabhadeva. *Sandehaviśauśadhi*. See ŚV (2).
- US** Uṇādisūtra: T. R. Chintamani ed. *The Uṇādisūtra with the Vṛtti of Śvetavanavāsin*. The Uṇādisūtras in Various Recensions Part I. New Delhi: Navrang. 1992.
- Vaijayantī** Yādavaprakāśa. *Vaijayantī*: Gustav Oppert ed. *The Vaijayantī of Yādavaprakāśa*. London: Archibald Constable. 1893.
- ViP** Maheśvara. *Viśvaparakāśa*: Śrī Śīlaskandha Sthavira and Śrī Ratnagopala Bhatta ed. *Viśvaparakāśa of Śrī Maheśvara Sūri*. Chowkhamba Sanskrit Series 37. 2nd ed, Varanasi: Chaukhamba Amarabharati Prakashan. 1983.
- Vivrṭti** Rāmacaraṇatarkavāgīśabhaṭṭācārya. *Vivrṭti*. See SD.
- VL** Pūrṇasarasvatī. *Vidyullatā*. See MD (6).
- VP** Bhartṛhari. *Vākyapadīya*: K. A. Subramania Iyer ed. *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Helārāja, Kānda III, Part I*. Deccan College Monograph Series 21. Poona: Deccan College. 1963.
- VR** Bhaṭṭa Kedāra. *Vṛttaratnākara*: Śrī Kedāra Nātha Śarmā ed. *Vṛttaratnākara of Bhaṭṭa Kedāra. With a Commentary of Bhaṭṭa Nārāyaṇa Bhaṭṭ and Note etc., by Śrī Vaidya Nātha Śāstrī Varakale. Edited with the Maṇimayī Hindī Commentary by Śrī Kedāra Nātha Śarmā*. The Kashi Sanskrit Series 55. 6th ed, Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan. 1980.
- Vt** Kātyāyana. *Vārttika*. See MBh.

## (2) 二次文献

- Ballantyne, J. R. and Mitra, Pramadā Dāsa.  
1994 *The Sāhityadarpana or Mirror of Composition of Viśvanātha. A Treatise on Poetical Criticism*. Translated by J. R. Ballantyne and Pramadā dāsa Mitra. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- Bhat, M. Ramakrishna.  
1997 *Varāhamihira's Bṛhat Saṃhitā with English Translation, Exhaustive Notes and Literary Comments*. Part One. Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

- Bhattacharya, Biswanath.  
1975 "A critical re-examination of the variants 'prathama-divase' and 'praśama-divase' in Kālidāsa's *Meghadūta*." In *Dr. V. Raghavan Felicitation Volume*, Sanskrit and Indological Studies (pp. 509-513), ed. R. N. Dandekar with a foreword by D. P. Yadav. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Gerow, Edwin.  
1971 *A Glossary of Indian Figures of Speech*. Hague: Mouton.
- Ghosh, M. M. and Kumar, Pushpendra.  
2006 *Nāṭyaśāstra of Bharatamuni, Text, Commentary of Abhinava Bhāratī by Abhinavaguptācārya and English Translation*. 3 vol. English Translation by M. M. Ghosh. Introduction and Index by Pushpendra Kumar. Dillī, Bhārata: Nyū Bhāratiya buka kāraporesān.
- Goldman, Robert P. and Goldman, J. Sutherland.  
1996 *The Rāmāyana of Vālmiki. An Epic of Ancient India. Volume V, Sundarakāṇḍa. Introduction, Translation, and Annotation*. New Jersey: Princeton University Press.
- Goodall, Dominic and Isaacson, Harunaga.  
2003 *The Raghupañcikā of Vallabhadeva being the Earliest Commentary on the Raghuvamśa of Kālidāsa, Volume 1. Critical Edition with Introduction and Notes*. Groningen: Egbert Forsten.
- Hultsch, E.  
1911 *Kālidāsa's Meghadūta edited from Manuscripts with the Commentary of Vallabhadeva and Provided with a Complete Sanskrit-English Vocabulary*. London: Royal Asiatic Society, 1911 and reprinted (New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers, 1998) with a New Foreword and Select Bibliography by Albrecht Wezler.
- Ingalls, Daniel H. H.  
1990 *The Dhvanyāloka of Ānandavardhana with the Locana of Abhinavagupta. Translated by Daniel H. H. Ingalls, Jeffrey Moussaieff Masson, and M. V. Patwardhan. Edited with an Introduction by Daniel H. H. Ingalls*. Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press.
- Iyer, V. Narayana.  
1952 *Dandin's Kāvya-darśa with Commentary of Jeebananda Vidyasagara Bhattacharya and an Introduction and an English Translation*. Madras: Netaji Subhash Chandra Bose Road.
- Joshi, S. D. and Roodbergen, J. A. F.  
1969 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya. Avyayībhāvatatpuruṣāhnikā (P.2.1.2-2.1.49). Edited with Translation and Explanatory Notes*. Poona: University of Poona.  
1971 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya. Kar-madhārayāhnikā (P.2.1.51-2.1.72). Edited with Translation and Explanatory Notes*. Poona: University of Poona.
- Kale, M. R.  
1987 *The Meghadūta of Kālidāsa. Text with the Commentary of Mallinātha, English Translation, Notes, Appendices and a Map*. Reprint of 7th ed, Delhi, Varanasi, Patna: Motilal Banarsidass Publishers.  
2004a *Kumārasambhava of Kālidāsa, Cantos I-VIII edited with the Commentary of Mallinātha, a Literal English Translation, Notes and Introduction*. Reprint of 6th ed, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.  
2008 *The Raghuvamśa of Kālidāsa with the Commentary Sañjivani of Mallinātha, Canto I-V. Edited with a Literal English Translation, and Copious Notes*. Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- Kane, Pandurang Vaman.  
1974 *History of Dharmaśāstra (Ancient and Medieval Religious and Civil Law). Vol. V, Part I (Vratas, Utsavas, and Kālas, etc.)*. 2nd ed, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Katre, Sumitra G.  
1989 *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini. Roman Transliteration and English Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Koṭhārī, M. G.  
1965 *Śrījinasenācāryaviracitaṃ Pārśvabhūdayam. saṃpādaka em. e. ity upapadadhārī, bhāṇḍārakarapāritoṣikavijetā*. Bombay: Śrī Gulābacāṃḍa Hirācāṃḍa.
- Lalye, P. G.  
2009 *Mallīātha. Makers of Indian Literature*. Reprint, New Delhi: Sahitya Akademi.
- Lienhard, Siegfried.  
1984a "Ghaṭakarpara und Meghadūta: einige bemerkungen zum alter des botengedichts." In *Amṛtadhārā: Professor R. N. Dandekar Felicitation Volume* (pp. 247-253), ed. S. D. Joshi. Delhi: Ajanta Publications.  
1984b *A History of Classical Poetry: Sanskrit—Pāli—Prakrit. A History of Indian Literature Vol. III, Fasc. I*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

- Mallinson, James.  
2006 *Messenger Poems by Kālidāsa, Dhoyī & Rūpa Gosvāmin*. The Clay Sanskrit Library. New York: New York University Press & JJC Foundation.
- Maurer, Walter Harding.  
1965a *Sugamānvayā Vṛtti, a Late Commentary in Jaina Sanskrit on Kālidāsa's Meghadūta by the Jaina Muni Sumativijaya, Critically edited with an Introduction and Explanatory and Critical Notes. Vol. I: Introduction and Text*. Building Centenary and Silver Jubilee Series 5. Poona: Deccan College.  
1965b *Sugamānvayā Vṛtti, a Late Commentary in Jaina Sanskrit on Kālidāsa's Meghadūta by the Jaina Muni Sumativijaya, Critically edited with an Introduction and Explanatory and Critical Notes. Vol. II: Note to the Text, Bibliography and Index*. Building Centenary and Silver Jubilee Series 5. Poona: Deccan College.
- Mishra, Madhusudan.  
1977 *Metres of Kālidāsa*. Delhi: Tara Prakashan.
- Murthy, K. R. Srikantha.  
2007 *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅga Hṛdayam (Text, English Translation, Notes, Appendix and Indices)*. Volume I (Sūtra & Śārīra Sthāna). Krishnadas Ayurveda Series 27. Varanasi: Chowkhamba Krishnadas Academy.
- Nandargikar, Gopal Ragnath.  
1982 *The Raghuvamśa of Kālidāsa with the Commentary of the Mallinātha, edied with a Literal English Transration, with Copious Notes in English Intermixed with Full Extracts, Illucidating the Text, from the Commentaries of Bhaṭṭa Hemādri, Chāritravardhana, Vallabha, Dinakaramiśra, Sumativijaya, Vijayagaṇi, Vijayānandasūri's Varacharaṇasvevaka and Dharmameru, with Various Readings*. 5th ed, Delhi, Patna, Varanasi: Motilal Banarsidass.
- Olivelle, Suman  
2005 *Manu's Code of Law, a Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra with the Editonal Assistance of Suman Olivelle*. Oxford University press.
- Patel, Gautam.  
1986 *Kumārasambhavam of Kālidāsa with the Commentary of Vallabhadeva. Mahākavikālidāsaviracitaṃ Kumārasambhavam śrīānandadevāyanivallabhadevaviracitayā pañjikayā sametam*. Ahsmallabad: Gautama Vāḍilāla Paṭela.
- Ramamurthi, K. S and Matha, S. R.  
1993 *An English Translation of Vidyānātha's Pratāparudrīya*. S. V. University Oriental Series 24. Tirupati: Oriental Research Institute.
- Roodbergen, J. A. F.  
1984 *Mallinātha's Ghaṇṭāpatha on the Kirātārjunīya, I-VI, Part One: Introduction, Translation and Notes*. Leiden: E. J. Brill.  
2008 *Dictionary of Pāṇinian Grammatical Terminology*. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Sastri, P. V. Naganatha.  
1970 *Kāvyaḷaṅkāra of Bhāmaha. Edited with English Translation and Notes*. 2nd ed, Delhi, Varanasi, Patna: Motilal Banarsidass.
- Śrī Chandra Vasu.  
1977 *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini. Edited & Translated into English*. 2 vols. Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Trivedī, Kamalāśaṅkara Prāṇaśaṅkara.  
1898 *The Bhaṭṭi-Kāvya or Rāvaṇavadha composed by Śrī Bhaṭṭi. Edited with the Commentary of Mallinātha and with Critical and Explanatory Notes*. 2 vols. Bombay Sanskrit Series 56-57. 1st ed, Bombay: Government Central Book Depot.
- Trynkowska, Anna.  
2000 "Mallinātha and classical Indian theoreticians of literature on description in the Mahākāvya." In *Kāvya: Theory and Practice*, Cracow Indological Studies 2 (pp. 37-48), ed. Lidia Sudyka. Cracow: Ksiegaria Akademicka.
- Unni, N. P.  
1987 *Meghasandeśa of Kālidāsa with the Commentaries Pradīpa of Dakṣiṇāvartanātha, Vidyullatā of Pūrṇasarasvatī, Sumanoramaṇī of Parameśvara, edited with an Elaborate Introduction*. Delhi, Varanasi: Bharatiya Vidya Prakashan.
- Vogel, Glaus.  
1979 *Indian Lexicography. A History of Indian Literature Vol. V, Fasc. IV*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

- Warder, A. K.  
1977 *Indian Kāvya Literature, Volume Three, the Early Smallieval Period (Śūdraka to Viśākhadatta)*. Delhi, Varanasi, Patna: Motilal Banarsidass Publishers.
- Wezler, Albrecht.  
2001 “On Vallabhadeva’s characterization of the *Meghadūta* as a ‘*kelikāvaya*.’” In *Le parole e i marmi: studi in onore di Raniero Gnoli nel suo 70° compleanno*, Serie Orientale Roma XCII, 2 (pp. 897-921), ed. Raffaele Torella, Claudio Cicuzza and Alvar González-Palacios. Rome: Istituto italiano per l’Africa e l’Oriente.
- Windisch, Ernst.  
1908 *Buddha’s Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung*. Leipzig: Teubner.
- Wilson, H. H.  
1961 *The Meghadūta or Cloud Messenger. A Poem in the Sanskrit Language, by Kālidāsa. Translated into English Verse, with Notes and Illustrations*. 3rd ed, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.
- 岩本裕  
1982 『ラーマヤナ 1』平凡社
- ヴェンテルニッツ  
1965 『叙事詩とプラーナ』中野義照訳, 日本印度学会  
1966 『インドの純文学』中野義照訳, 日本印度学会  
1973 『インドの学術書』中野義照訳, 日本印度学会
- 小野島行忍  
1941a 「梵詩メーガ・ヅータ散文譯」『文學研究』28: 95-128.  
1941b 「梵詩メーガ・ヅータ散文譯」『文學研究』29: 99-117.  
1942 「梵詩メーガ・ヅータ散文譯」『文學研究』31: 79-95.
- 小川英世  
1984 「*kriyāviśeṣaṇa* について」『印度学仏教学研究』33: 384-388.  
2008 「*Vākyapādīya* 「〈能成者〉詳解」(*Sādhanasamuddeśa*) の研究—VP3.7.45-54: 〈目的〉(*karman*) 論序—」『比較論理学研究』5: 23-44.  
2009 「*Vākyapādīya* 「〈能成者〉詳解」(*Sādhanasamuddeśa*) の研究—VP3.7.55-58: 〈目的・行為主体〉(*karmakarṭr*) 論(1)」『比較論理学研究』6: 23-40.  
2010 「*Vākyapādīya* 「〈能成者〉詳解」(*Sādhanasamuddeśa*) の研究—VP3.7.59-63: 〈目的・行為主体〉(*karmakarṭr*) 論(2)」『比較論理学研究』7: 7-28.
- 上村勝彦  
1990a 「インド古典演劇論における8種のヒロイン」『日本仏教学会年報』56: 1-13.  
1990b 『インド古典演劇論における美的経験—Abhinavaguptaの *rasa* 理論—』東京大学出版会  
1999 『インド古典詩論研究—アーナンダヴァルダナの *dhvani* 理論—』東京大学出版会  
2003 『インド神話』筑摩書房
- 木村秀雄  
1965 『カーリダーサ文学集 1 抒情詩 季節集・雲の使者』百華苑  
1966 「*Ghaṭakarparakāvya* の研究」『金倉博士古稀記念 印度学仏教学論集』所収 (pp. 197-228) 平楽寺書店
- 古宇田亮修  
2010 「*Bhāmaha* 著 *Kāvyaḷamkāra* 『詩の修辭法』第1~2章—テキストならびに訳注—」『長谷川仏教文化研究所年報』34: 153-190.
- サンスクリット修辭法研究会  
2008 「*Daṇḍin* 著 *Kāvyaḷarśa* 『詩の鏡』第1章—テキストならびに訳注—」『大正大学総合佛教研究所年報』30: 117-147.  
2009 「*Daṇḍin* 著 *Kāvyaḷarśa* 『詩の鏡』第2章(上)—テキストならびに訳注—」『大正大学総合佛教研究所年報』31: 159-208.  
2010 「*Daṇḍin* 著 *Kāvyaḷarśa* 『詩の鏡』第2章(下)—テキストならびに訳注—」『大正大学総合佛教研究所年報』32: 120-169.
- 高橋明  
1995 「サンスクリット古典文学の人間像(その1)—カーリダーサ作『ラグ王系譜』より」『大阪外国語大学論集』12: 189-199.
- 立川武蔵・石黒淳・菱田邦男・島岩  
1981 『ヒンドウの神々』せりか書房
- 田中於菟弥  
1974 『酔花集—インド学論文・訳詩集—』春秋社
- 辻直四郎  
1973 『サンスクリット文学史』岩波書店  
1977 『シャクンタラー姫』岩波書店
- 寺内徹  
1979 「*Rasavalankāra*」『印度学仏教学研究』28: 146-147.
- 波多江輝子  
1986 「*Upamā* について—*Sāhityadarpaṇa* X, 14cd-26ab—」『西日本宗教雑誌』8: 80-96.  
1987 「*Rūpaka* について—*Sāhityadarpaṇa* X, 28cd-33ab—」『西日本宗教雑誌』9: 92-101.  
1988 「*Utpreṣā* について—*Sāhityadarpaṇa* X, 40-45ab—」『西日本宗教雑誌』10: 41-53.

- 1995 「Vyājastuti・Paryāyokta・Arthāntaranyāsa  
について—Sāhityadarpaṇa X, 59cd-  
62ab—」『西日本宗教雑誌』17: 57-68.
- 1998 「Virodha・Asaṅgati・Viṣama について—  
Sāhityadarpaṇa X, 67cd-70—」『西日本宗  
教雑誌』20: 59-70.
- 原実  
1979 『古典インドの苦行』春秋社
- 外園幸一  
1988a 「梵文和訳 クマーラサンヴァバ（上）」  
『鹿児島経大論集』29-1: 49-91.
- 1988b 「梵文和訳 クマーラサンヴァバ（下）」  
『鹿児島経大論集』29-2: 137-168.
- 本田義央  
2005 「インド古典修辞学における修辞と感情」  
『比較論理学研究』2: 31-38.
- 2009 「ナーラーヤナ・パンディタについて」  
『比較論理学研』6: 41-44.
- 間瀬忍  
2010 「パーニニ文法学 antaraṅga 解釈規則の  
研究」広島大学提出学位請求論文
- 矢野道雄・杉田瑞枝  
1995a 『占術大集成 1 古代インドの前兆占い』  
平凡社
- 1995b 『占術大集成 2 古代インドの前兆占い』  
平凡社
- 渡瀬信之  
1991 『マヌ法典』中央公論社
- (かわむら ゆうと、広島大学大学院 [インド  
哲学])